

# The 32nd Rotary Youth Leadership Awards Seminar



# RYLA Seminar

第32回青少年指導者育成セミナー報告書



2010年3月25日～28日

主催  
国際ロータリー第2680・2670地区  
RYLA運営委員会



# 目 次

R Y L Aセミナーの方針・ねらい.....	3
スケジュール.....	3

## ■ 1日目 ■

### ●開講式

#### オリエンテーション

ディーン	日野 博夫 ..... 4
ガバナーあいさつ	
第2680地区ガバナー	中村 尚義 ..... 6
第2670地区ガバナー	岡内 紀雄 ..... 8
ごあいさつ	
顧 問	三宅 洋三 ..... 10
元国際ロータリー理事	今井 鎮雄 ..... 12
その他関係者紹介、注意事項の説明	
ディーン	日野 博夫 ..... 14

### ●オリエンテーション

#### 「ロータリーがライラに期待するもの」

顧 問	深川 純一 ..... 16
その他関係者紹介、注意事項の説明（続）	..... 20

### ●ロータリアンのタベ

顧 問	深川 純一 ..... 22
-----	----------------

## ■ 2日目 ■

### ●講義 「カンボジアにおける住民参加型地雷処理活動」

NPO法人日本地雷処理を支援する会 高山 良二 先生	40
----------------------------	----

### ●ロータリアンのタベ

顧 問	安平 和彦 ..... 54
-----	----------------

## ■ 3日目 ■

## ●講義「平和と発展」

香川大学法学部法学科教授 石井 一也 先生 ..... 64

## ●フォーラム「私たちと社会」

フォーラムリーダー 深川 純一・安行 英文 ..... 84

バズセッション報告 ..... 84

フォーラムディスカッション ..... 94

## ■ 4日目 ■

## ●講義「いのちを受け継ぐ」

元国際ロータリー理事 今井 鎮雄 先生 ..... 104

## ●閉講式

閉講のあいさつ

第 2680 地区ガバナー 中村 尚義 ..... 114

第 2670 地区ガバナー 岡内 紀雄 ..... 116

参加者感想文 ..... 118

受講生名簿 ..... 144

第 32 回 RYLA セミナー運営委員会 ..... 146



# RYLA セミナーの方針・ねらい

RYLAセミナーのねらいは、受講生の皆様に次のような5つの特色を味わってもらうことがあります。

- ① 高レベルの講義と討議
- ② キャビンタイム（親睦の熟成）
- ③ 自由と規律
- ④ 余島の自然
- ⑤ カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれた余島で、今回のテーマである“つなぐ”を、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

## スケジュール

3月25日(木)	集 合 (14:00)				開講式 オリエンテーション (15:00)	オーブニングパーティ	キャビンタイム ロータリアンのタベ
3月26日(金)	朝食 (7:30)	講義 講師 高山 良二氏 (9:30)	昼食	レクリエーション ヨット、テニス、 ソフトボール、 アーチェリー、 カヌー、自然観察 など	夕食	キャンプファイヤー 親睦のタベ キャビンタイム ロータリアンのタベ	
3月27日(土)	朝食 (7:30)	講義 講師 石井 一也氏 (9:30)	昼食	思索の時間	バズセッション	夕食	フォーラム キャビンタイム
3月28日(日)	朝食 (7:30)	講義 講師 今井 鎮雄氏 (9:00)	閉会式 昼食 解散 (11:30)				

7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

## オリエンテーション

日野 博夫

ディーン  
(高松RC)



皆さん、余島へ、ライラセミナーにようことそ  
いらっしゃいました。

このセミナーが皆さんにとって人生の良き道  
しるべになることを私は願っておりますし、私  
どもロータリアン全員がそれを願っております。

今から何がはじまるんかなあ？ と受講生の  
皆さんは思っておられるし、目を見ているとち  
ょっと不安な、ちょっと期待している、という  
目をしておられます。しかし、この3泊4日のセ  
ミナーが終わって帰る時には、必ず皆さんの目  
のなかに希望と自信が満ちあふれていることと  
思います。

私はこのセミナーで皆さんの世話をし始めて  
7年目になります。だけど皆さん、同じような  
ちょっと不安そうな目をして来られますけど、  
3泊4日が終わったときはみんなキラキラとした  
目で帰られるのをいつも見ておりますので、ど  
うぞご安心ください。

このセミナーはですね、兵庫地区、それから  
四国地区、ロータリークラブが両方で約150ござ  
ります。四国地区に74で、はっきり私は覚えて  
ないんですけど、兵庫地区も確か74クラブあ  
ったと思います。約6,000人のロータリアンが  
支えながら、そして今ここで32回目を迎えてい  
るんです。32年前に始まったんですね、このラ  
イラセミナーは。

で、この32年間の間に約1800人、ほつほつ  
1900人のライラの卒業生、あなたの方の先輩がい  
るわけです。その方たちはですね、もう32年以

上ですから、この社会に出てとてもすばらしい  
お仕事をなさっている方が沢山おりますし、ま  
たこのライラのお世話のために後ろにおられる  
方、前に立っておられる方、この人たちの中にも  
ライラの卒業生、あなたの方の卒業生がいるん  
です。このライラを終了した方が、なんともう、  
このロータリークラブの中のメンバーになって  
皆さんのお世話をしているという伝統のあるセ  
ミナーです。

私、進行役を務めさせていただいております  
けれども、高松ロータリークラブの日野と申し  
ます。今回のライラの中で、ディーンという役  
目をしております。ディーンというのは何かと  
いうと、校長さんと言うか、あるいは学長さん  
という意味ですね。ハリー・ポッターで言ったら、  
アルバス・ダンブルドアですね。皆さん分  
かりやすいでしょう。

今日から4日間、皆さんのお世話をさせてい  
ただきます。そこにおられる方皆さん、ロータ  
リアンの方は皆さんのお世話をするために集ま  
った者です。胸に黄色い、皆さんは薄青いのが  
付いていますけれども、この黄色いのが付いて  
いる人は世話人ですから、分らんことがあったら  
何なんでも聞いてください。何でも知っています。

申し遅れました、あそこにおられる方が淡路  
中央ロータリークラブの徳梅さんと言われまし  
て、このセミナーの副ディーンを勤めていただ  
きます。

それではまずご来賓にご挨拶をということで

ございますが、まず兵庫地区、四国地区のガバナーからご挨拶いただくことになっております。

で、ガバナーとは、ロータリーの言葉にはいろいろとありますし、ガバナーとは皆さんご存知の知事のことですね。それから統率者という意味があります。ロータリーのガバナーはですね、1年ごとに交代いたします。今からご挨拶いただく両地区のガバナーは2009年度から2010年度のガバナーです。では、ロータリーでは2680地区と言いますが、兵庫地区のガバナー、中村尚義様にご挨拶をいただきます。どうぞ宜しくお願ひいたします。



# ガバナーあいさつ

## 中村 尚義

国際ロータリー第2680地区ガバナー  
(洲本RC)



こんにちは。ただ今ご紹介がありましたように、兵庫県知事の中村でございます。今、ガバナーを日本語に直したらそうなるんだそうですが、本当の知事は12年やってますが、私は1年で変わります。なんばよくても変わらなくてはならない。

ようこそ余島へお越しいただきました。あいにくの雨で、肌寒い、去年よりはちょっと肌寒いような気がしますけど、帰られる頃には桜の花が少し開いているかな? というやうないい時期を迎えるんじゃないかなと。ただ、来てみると空気がちょっと違うな、おいしいなという感じがいたします。皆様があまり知らないロータリー。余りというのが付いている余島。あまり知らない島にこうやって、お集まりになっていますけれども、このロータリーの皆様、年配いわゆる年代のプログラムが沢山ございます。ロータリーは世界的に組織を持っていて、世界の中のそういうプログラムを持つております。でもこのライラというプログラムは、その中でも少しレベルの高いプログラムでございます。

ですから今日はあまり知らない、まったく知らない人たちが、この知らない島、余り知らない島、余島に集合したということ。そして、この4日間にはいろいろなカリキュラムが用意されておりますけれど、その全てに出席をしなければならない。また大きなテーマが「つなぐ」となっております。

私は、窮屈なというか、緊張をあなた方に与

えるようなことを言っておりますので、この4日間をいかに楽しく過ごすかということを今から伝授したいと思います。良く聞いておいてください。

これは孔子という昔、中国の古い論語という書物をお聞きになったことがあるかとは思いますけど、益者三樂(えきしゃさんらく)、損者三樂(そんしゃさんらく)という、これもちょっと言葉にしたら難しいんですけど、優しく申しあげますと、この楽しみというのに有益な、為になる楽しみと、楽しみだけれど有害な、人に害を与える楽しみがあるということでございます。

その有益な楽しみ、これは古い言葉ですから、礼や学と言いますけど、ここで言えばこのプログラムをリズミカルに行う楽しみ、いわゆる自分から気持ちを込めて参加する楽しみ、それからこの度出会った人たちの、人のいいところ、利点を吹聴する、要するに『あの人、こういう良いところがあるなあ、』という、そういう楽しみ。そして良友を得る、心の友を得る、これを持つ楽しみ。これが有益な楽しみの三つでございます。

それに対しまして、楽しみですけど有害なもの。これは、わがままに振る舞う楽しみ。そして、怠けて過ごす楽しみ。それから享楽にふける楽しみ。これも楽しんできますけれども、それが皆様のために有害になっていくということでございますので、この有益な楽しみ方、有害な楽しみ方をちょっと頭におきながら、この4日間を過ごされたらどうかな? と。

そしてもう一つ私が好きな詩に、ゲーテの詩があるんですけど、空気と光と友の愛、これだけ残っていれば気を落とすことはないという。ここには空気も光もございます。友もあります。これを十分に、友の愛を感じながら、4日間を過ごすということであれば、これから先、気を落とすことありません、という有名なゲーテの詩です。

このたび2670地区、四国のロータリアンの方々に大変お世話になりました。またロータリアンの皆様方も初日から多数登録いただきまして、ありがとうございます。

私は淡路島からやって参りました。淡路島には作詞家の阿久悠さん、ご存知でしょうか？阿久悠さんが淡路島で過ごしたわけですが。あの方の歌に、「あの鐘を鳴らすのはあなた」という和田アキ子が歌っている歌があります。

この、あなたに会えて良かった、あなたには希望の匂いがするのは、この日にぴったりな歌でございますが、この「あなた…」は、歌謡曲には珍しい、だいたい歌謡曲は恋愛相手とかいふあなたが多いんですけど、このあなたは特定

されないあなた、本来優しさを備えたあなた、人間のことを言うんだそうでございます。

そして、この恋愛という意味ではない、いわゆるロータリーでよくいう無償の愛、見返りを求めない愛、これを備えた人という大きな愛をイメージしてこの曲を作ったと。

今この世の中、大きな愛を求めているという人が多いという事が新聞の記事に書いてありましたけれども、皆様方は求める方なのか、愛を差し伸べる方なのか、私たちロータリアンも後ろに沢山いらっしゃいますけれども、この4日間は持っている愛、この見返りを求めない愛、無償の愛を存分に皆様方に差し伸べたいと思っております。

そしてこの絆というテーマの元にあるものは何なのか、深く考えるのも人生の一つではないかな？と。そういうことで、ロータリアンの皆様方も、一緒に楽しんでいただきたいし、ご指導もよろしくお願いいたします、ご挨拶とさせていただきます。4日間よろしくお願い致します。

## 第32回 RYLAセミナー

2010.3.25~3.28 於:神戸YMCA余島野外活動センター  
主催: R.I. 第2670地区・R.I. 第2680地区 RYLA運営委員会



# ガバナーあいさつ

## 岡内 紀雄

国際ロータリー第2670地区ガバナー  
(高知西RC)



皆さんこんにちは。

ご紹介いただきました2670地区、四国4県の地区のガバナーを務めております岡内です。ライラセミナーのこととか、あるいはロータリーのことについてはすでにお配りをいたしました深川先生のお書きになった「ライラ受講生の皆さんへ」というリーフレットで、お読みいただいたことと思いますけど。

ロータリーは1905年にシカゴで誕生いたしました。それが今百年を経て200あまりの国、地域で広がっておりまして、クラブ数が33,695、会員総数が121万強というところまでてきております。そして、この世界中のクラブの連合体というものが国際ロータリーというふうに呼ばれています。

日本には34の地区があります。日本のクラブ数が2300。会員数が92,000人ぐらいでございます。世界には530の地区あるんですね。それぞれにガバナーがおります。中村さんは、兵庫県の知事とおっしゃいましたが、私は4県ですかくら四国州の知事であります。

ロータリーはですね。そもそも、出来た当時から職業奉仕ということを非常に大事にしておりまして。自分の職業を通じて世の中に奉仕するという、言ってみればそれだけですけれども。それだけじゃなく、奉仕の理想という言葉を掲げてですね、実現に向けて日々努力しておるわけです。

ロータリーの綱領というのがありますし、その中に示されている「奉仕の理想」というのが

あります。それは己、自分に天職、天から与えられた職業というものがあって、それを与えていただいた社会、また自分の職業を生かし続けさせてもらっているという社会に感謝する。その感謝の仕方、奉仕の基本として、個人の生活、社会生活、職業の生活において利己的自分だけの欲求は最小限にとどめて、常に最大リターン、多くの人々の利益を追求するというのが、ロータリーの奉仕の哲学なんですね。それを皆、ロータリーの会員は胸に秘めながら、1日の職業にいそしんでいるということであります。

それを端的に現したのに、4つのテストというのがありまして、事あるごとに私どもが唱和して、その実践に努めております。4つのテストは、真実かどうか、みんなに公平か、好意と友情を深めるか、みんなのためになるかどうか。これを心におきながら、言動、話す、言葉に出す時に、それは自分がそれに従っているかどうか、自問自答しながら行動しているわけであります。

ロータリーの事業にはいろいろなものがありますけれど、このライラセミナーもその一つであります。世界中のロータリーの会員が最優先事項として取り組んでいるのが、ポリオの撲滅、この地球上からポリオウイルスを消し去つてしまおう、ということに取り組んでおります。もう取り組み始めてから20数年たちますが、その今までの努力のおかげで、今ポリオが常にある国というのは、ナイジェリア、インド、パキスタン、アフガニスタンの4カ国になっており

ます。

年間の症例数もかつては35万件あったのが、今では本当に数えるくらいにまで減ってきました。ただ、まだポリオウイルスは存在しています。これを放置しておきますと、たちまちポリオのない国へ飛び火する危険性が残されているわけで、そのためには莫大な資金が必要りますけれど、このロータリーの懸命な努力を高く評価してくれましたビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団が、3億5000万ドルの資金を提供してくれています。それに答えるためにもロータリーの会員として、それに匹敵する資金をロータリーの会員さんからいただいて、一刻も早くポリオを地球から完全に消え去ってしまうという努力を続けております。

そういったこともやっているということもわかつていただけたら、ありがたいと思います。

今日から4日間、皆さんと寝食を共にさせていただきますが、集団生活である以上、何らかの一つの決まりがあります。のちほど、このセンターの施設の方からご説明があると思いますけれども、そういったことを皆さんで守っていくということを前提条件といたしまして、この4日間、皆さんと共に楽しく過ごしたいと思いますので、よろしくお願ひ致します。有難うございました。

## セミナー

外活動センター  
区RYLA運営委員会



## LAセミナー

C A余島野外活動センター  
I . 第2680地区 R Y L A 運営委員会



## セミナー

外活動センター  
区RYLA運営委員会



# ごあいさつ

## 三宅 洋三

RYLAセミナー顧問・パストガバナー  
(高松RC)



皆さんこんにちは。ただいまご紹介をいただきました、四国2670地区、高松ロータリークラブの三宅と申します。

もう今から50年も前のことだと思いますけど、人は、天の恵み、陽の恵み、人の恵み、この三つの恵みによって生かされるというふうなことを教えてくれた人があります。それ以後、何かことあるごとに、三恵という言葉を思い出しまして、頭から離れなくなってしましました。

天の恵みと申しますのは、両親、お父さん、お母さんからもらった能力、生まれつきの運命のことを言います。生まれつきの運命は一生変わることがないという人もあります。確かに人の運命は予知すること、これからどうなるということを考えることはできません。自分の人生がこれからどのように開けていくかということを考えることも不可能であります。

ただ今まで人生を振り返りまして、あの時は運が良かった、あの時はついてなかった、というふうに考えるのが普通であります。確かに人の知恵の及ぶところではないというふうに思いますが、人の能力は目標を定め、日々、精進努力をすることによって高められるというふうに思います。常に自分の置かれている環境を十分把握し、自分に与えられた機会を逃すことなく、のりを超えず、利に走らず、1日1日を積み重ねることによって、基礎の能力は高められ、自然に道は開かれていくというふうな気もいたしております。

明治になるまで日本の社会は、士農工商と四つの社会にわかれておりました。いわゆる士というのは武士であります。武士の社会であります。殿様から禄を戴いて、禄というのはいわゆる給料ですね。給料を戴いて日々倫理ということを常に考えて、正義のためには命も捨てるというのが武士の社会であります。その次の、農というのは農業ですね。先祖代々伝わってきた土地を耕して、社会に食料を供給する社会であります。工は物を作り、物を供給するという社会であります。商はいわゆる商売ですね。農業、工業の人が作ったものを販売して利益をあげるという社会であります。

1950年、戦国時代に天下を平定いたしました豊臣秀吉という人がおりました。若いときは、木下藤吉郎という名前で、農民の出身であります。織田信長の草履持ちということで仕えておりました。ある冬の寒い日に、織田信長が友人を訪ねまして、帰りに草履に足を下ろしてみると、温かい。これはてっきり、『木下藤吉郎が俺の草履を尻に敷いておったな』と思って、藤吉郎を叱りつけたわけです。

木下藤吉郎はそのとき、「ご主人の草履が冷えないように、懷で温めておりました」ということで、泥の付いた懷を広げて織田信長に見せたということ。織田信長はその行為に非常に感心しました。いわゆる農民出身は普通は武士にはなれないんですが、織田信長は木下藤吉郎を武士に取り立て、天下人・豊臣秀吉の道を開いたというふうに聞いております。

天の利の次に地の利であります。地の利と言うのは、地域社会の恩恵であります。いかに能力に優れ、技術がすばらしい人でも、不毛の砂漠では生活できません。自分の周りに地域社会が整って生活環境が整う、周囲に自分の職業を必要だと認めてくれる人がおるからこそ、生活が安定するわけであります。常に地域社会への報恩と言いますか、貢献を心がけ、地域社会の発展とともに共存するということを考える必要があります。

人の恵みは両親、家族、恩師、先輩、友人の愛であります。人は感情の動物であります。いかに精進努力をしても常に導き、見守り、励ましてくれることがなければ、生活の向上することはできません。家族、友人の情ほど人を勇気付けるものはありません。

この世の中で最もありがたいのは、私は友情だと思っております。私もこの三恵に見守られながら、80の坂をどうにか越えました。皆様もこの余島という非常に素晴らしい地の恵を受けているわけであります。この3泊4日、外では絶対味わえないような体験をし、また、ライラの友人という、すばらしい人の恵みに恵まれております。この4日間、新しい友人よりいろんなことを学び、ひとり大きい人間となって帰つていって欲しいというふうに思います。どうもありがとうございました。



# ごあいさつ

## 今井 鎮雄

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー  
(神戸西RC)



○司会・日野 続きまして、32年前に、ご自分が兵庫地区の2680地区のガバナーであられたときに、このライラセミナーを始めた32年前からずっとこのライラのお世話をなさっておられる、元国際ロータリーの理事・パストガバナーの今井鎮雄先生をご紹介いたします。先生、よろしくお願ひします

○今井鎮雄 今日、ここには岡内ガバナーや中村ガバナー、三宅先生や私のほかにも人生の先輩が大勢集まっています。こんなに多くのロータリアンが皆さんに会うためにここに来ているのはなぜなんでしょう。

岡内ガバナーのお話にもありましたように、ロータリーは世界で100万人以上の会員がいます。そのロータリーは、ロータリーの夢や理想を若い人たちと一緒に考えていくと努力しています。それぞれの地域で、高校生グループのインタークト、大学生や若い社会人のグループのロータークトなどを応援していますし、RYLAも青年を応援するプログラムの一つで、100年を越えるロータリーの歴史の中では比較的新しいものです。

ロータリアンは自分の地域で優秀な青年、将来きっと地域や世界を引っ張っていってくれると思う人を搜ってきて、旅費も滞在費もロータリーが負担するからRYLAに参加してくれませんかと呼びかけます。ということで、皆さんにここへ集まってもらったわけです。皆さんの中で「参加しないか」と誘われた人、手を

挙げてください。あなたは、どこから？

「篠山です」

篠山は以前から大勢の人が参加してくれていますね。

あなたはどこから推薦されたの？

「高松」

高松の推薦なら大丈夫。皆さん、立派なロータリアンですから。(笑)

RYLAは単なる研修ではなくて、ロータリーの夢や日本や世界の将来について皆さんとロータリアンが考える場なんです。平和とは？日本とはどういう国なのか？どうすれば子どもたちが安心して暮らせる世界をつくれるのか？地球上からポリオをなくせないか？生きることに困難を抱えた人たちにどんな応援ができるだろう？

世界の未来を考えるためにいろいろな視点でのごとを考える必要があります。先生方の話を聴くだけでなく、あなた自身に考えてもらいたいのです。あなた方にはそれが出来る。ロータリアンがそう推薦してるんだからね。後にはいる先輩も、皆さんと一緒にロータリーの夢や社会的な使命とか平和について考えたいと願ってるんですよ。皆さんがそういう問題に真剣に取り組むなら、ロータリーも応援するよと伝える場が、RYLAです。そして地域のなかで、ロータリーがそのために働くときは、助けて欲しい。「ロータリアンは1週間に1度食事をしに集まって、日曜はゴルフへ行っている。そんな人の話、べつに聞きたくないや」って考えてい

た人が、RYLAに来てロータリアンと話をする中で、「ここに来ているロータリアンだけは信頼します」って言ってくれたことがあります。

ロータリーは常に世界平和について考えています。第二次大戦末期、イギリスで、国際連盟の失敗を踏まえ、平和を教育や文化のレベルでとらえて国際連合の土台を作る際、リーダーシップをとった人の多くがロータリアンでした。平和の構築のために私たちは何ができるか。一人の力は弱い。けれどそう考える人間がいま世界に100万人いるのです。皆さんには、平和を築くための仲間になって欲しいと思います。後で見ているロータリアンはお目付け役ではありません。仲間になろうよ、と呼びかけてるんです。

年度末の3月の忙しい時期に、働き盛りの人たちがなんで3日間も仕事を置いてRYLAに集まるんだろう。RYLAを始めた当初は、忙しいからと一日目で帰る人も少なくありませんでした。しかし30回続けると「しょうがない。

じっくり腰を落ち着けて僕らの気持ちを伝えよう」「若い人の意見を聴きたい」「新しい取り組みができないか」と考えるようになった。RYLAはロータリアンにとっては、大事な集まりなんです。皆さんがそれぞれの持ち場へ戻ったあとも、ここで得た知識や人の絆を土台に地域や世界のことを考えてくださることを、ロータリアンは願っています。そんなに負担に感じなくていいんですよ、とは言っても皆さんはロータリアンが地域で見つけた大事な存在です。RYLAが皆さんにとって、ロータリーのビジョン、夢、理想、あるいは次の時代をどう作るかについて考える機会になることを願っています。

私たちはこれから4日間、時間を共有しますが、ロータリアンはあなた方を心から歓迎していることを忘れないでください。そして皆さんが、RYLAで出会ったあのロータリアンのようになりたいと思ったら、ご自分を推薦してくださったクラブを訪ねてみてください。



# その他関係者ご紹介 注意事項の説明

## 日野 博夫

ディーン  
(高松RC)

素晴らしいチャーミングな先生でしょ。お話を若々しいでしょ。先生、実は90歳になられるんです。私はちょっと疑わしいと思う。彼は産業革命の頃からずーっと生き延びているんじゃないかと。いつもお話を伺っていると、これが素晴らしいんですね。

冗談はさておき、その他の関係の方のご挨拶をいただきたいですけど、そういうわけにもいきませんのでお名前を。深川純一先生です。伊丹ロータリークラブでパストガバナーの先生で。今の、今井先生と同じ時期に、32年前からずっとこのライラの世話をしていらっしゃる先生です。のちほどライラについてのお話をいただきたいと思いますので。先生どうぞお座りください。(拍手)

それから姫路ロータリークラブの安平和彦先生です。パストガバナーでいらっしゃいます。

それから、新生代委員長の三田ロータリークラブの安行先生です。(拍手)

それから、こちらに移りまして、四国地区の去年のガバナー・豊田章二さんです。(拍手)

それから、そちらにおられますのは、今は、このセミナーのアドバイザーをおられます四国地区の3年前のガバナー・飯忠吾さんです。(拍手)

そしてその向こうにおられる方が、来年この四国地区的責任者、ガバナーをやられます亀井義博さんです。

そういうことでご紹介の方は終わりました。

注意事項を述べたいと思います。これから3日間皆さんとご一緒にこのセミナーやっていくための注意事項をちょっと述べたいと思います。このセミナーがどういうふうな流れで運営されるかご説明します。皆様、ワークブックを持っていますか？ それです。その藤色のこれですね。

1ページ目を開けてください。1ページ目を開けると、スケジュール表っていうのがありますね。これはごく大まかなようにスケジュール表が作られておりますが、これは明日からのいろんなことが書いてあります。

その前に皆さん、受講者の皆さんはですね、4つのグループに分けられます。本当はソーティングハットといいまして、組み分け帽子というのを頭に乗せてですね、あなたはここというふうに決めるんですけども、ちょっと時間がないので、私たちが独断と偏見で決めました。(笑)

今のジョーク分かりましたか？ いろいろ名前を付けずに単にABCDという4つの班に分けます。それぞれの班にですね、男性のカウンセラーがお一人。女性のカウンセラーがお一人。合計2名の方が付きます。その方たちと一緒にですね、この4日間、3泊4日を過ごしていただきたいと思います。一緒の所で一緒に寝て、一緒に食事もしますので、ちょっと年がいっておりますので、あまりいきすぎてはおらんのすけれども、大事にしてやってください。

それからですね、朝の食事は表を見ると分か

りますように、7時半になっていますね。講義が9時半にスタートいたしますので、それまでの間に食事を済ませてください。最終の日だけ、9時から始めます。これは閉講式がありますので少し早目に始めて、ということになっております。

昼食はその今、皆さんが集まっていますの食堂で全て行います。朝の食事もそこで行います。レクリエーションを明日の午後やります。これはカウンセラーを中心にして自由な時間を持ってください。できれば皆さん各グループで行動してくださいね。

それからですね、明日は夕食後にキャンプファイヤーをするって書いてありますね。しかしこのキャンプファイヤーっていうのは、みんなでどんちゃん騒ぎをするのではなくて、カウンシルファイヤーと申しまして、わりに厳かな、火を見つめながら深く物事を考え、自分を見詰め直そうというそういうキャンプファイヤーです。そういうことで、その日その日のうちにまたいろいろご説明をします。

それからここに書いてありますロータリーのタベというのは皆さんとは関係ありません。後ろに並んでおられる方々の勉強会です。それからキャビンタイムというのは、これは皆さん自由になさってください。しかし、できるだけ話し合いの時間をたくさん持ってくださいね。皆さんは20歳以上の方、全員が20歳以上ですので、もうちゃんと大人としてロータリアンはあなた方を扱いますので、それでもなおかつ、しっかり自立心を持って下さい。またこの会には酒も出ます。キャビンで酒も飲んでも構いませんので、羽目を外さないようにということは分かりますね。羽目を外しちゃ駄目ですよ。

それからですね、若者たちによくある風景なんですけれども。皆さんは大丈夫だと思うんですけど、みんなが真面目に話をしたり、ディスカッションしている間に、一人だけ別の世界に入つて一所懸命メールしてる奴がおるんです

ね。これは遠慮して下さい。できるだけそういうことはしないように。どうしても仕方がない時には、自分のちょっとした時間を作つてするように。ここにおる間はできるだけ遠慮するようにしてください。

次のページにあると思いますが、ディーンからのご挨拶というのが次の下のページに書いてあります。これは私が書いたんですけども、ライラセミナーは未来を担う若者たちをよき地域の指導者として育てようという目的でロータリークラブが始めたプログラムです。今年は「つなぐ」というテーマですけれども。ちなみに最近のテーマは、「命」とか「きずな」とか、「志」とか「生きる」とかいうテーマですね。

このテーマが示すように皆さんが考えたり、語り合ったり、ヒントのためにこのテーマがあるんでして、あんまりテーマにこだわってですね、心をうち明けて話すことが出来ないってことになったら困りますので、こだわらずに話をしてください。お互いに、考えて語り合って、お互いに共感しあう。そして、ああ、こんな違う意見の人もあるんだな、というふうに相手の意見も聞いてみる。そういう癖を付ける、それがとてもこのライラセミナーで要求されることですね。

今度の「つなぐ」というテーマも、ここで人と人が手をつなぐ、心をつなぐ、さらに世界をつなぐ、あなたがここに生きているのは数えきれないほどの先祖からのDNAがここに繋がつてあなたがあるんだ。そういうことを考えたりする、そういういい機会になると思います。自分を深く省みて、考えるという習慣がつく、いいチャンスですので、このセミナーがあなた方にとって、人生のいい道しるべになることを願っています。

次に、深川先生がライラについてお話になります。「ロータリーがライラに期待するもの」というテーマでございますので、しばらくご静聴ください。

## ロータリーがライラに期待するもの

深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー  
(伊丹RC)



皆さんこんばんは。

今、日野先生からご紹介がございましたように、このライラセミナーは32年前に今井先生と一緒に始めたのです。今井先生は90歳。私はまだ若造で80歳なんです。まだまだ若輩でございまして、ここに来られる前にロータリーとは何か？ ライラとは何か？ ということを簡単な文章を書いてお手元に渡していると思うのですが、持っておられますか、皆さん。

お読みになった人おられますか？ あまり読まないと思うんですが。実はそれ、私が書いたんですけどね。こんなこと書いても読まないだろうなと思いながら書いているんで。読んでいたら眠くなるかもしれません。悪いことは書いていません。全部真面目なことを書いているんですけども。そういうことをお話していると、人の活気を削ぐことになりますので、あとで時間があったら帰ってからでも読んでください。今日は時間もありません。およそ1時間ほどたちますから。

いろんなこと言いません。先ほど、日野先生の方から、「ライラに期待するもの」なんてテーマいただきましたが、それ喋っていたら、2時間も3時間もかかりますから、一つのことだけ申し上げておきます。

このライラで、一番大切なものは何かな、ということあります。それはごく簡単なことで、皆が仲良くなることなんです。そして仲良くなつて楽しむことです。これがライラでいちばん大事なことです。仲良くなつて楽しむ、これは

ロータリーでは親睦と言っています。親睦活動の親睦ですね。

ライラもまさに親睦とか、仲良くなるということが一番大事なことなんです。先ほど今井先生もふれておられましたが、このみんなが仲良くなつてお付き合いする、実はこのロータリーっていうのは仲良くなるという親睦から、今から、100年あまり前に始まったんです。なぜなのか、それは簡単な理由。寂しかったからなんです。

当時のシカゴの社会の現象っていうのはね。今の日本の世界的な不況それどころじゃない。もっとひどかった。商売はお互いだまし合いでありましたし、恵まれない人は放置されるし、失業者が世にあふれていた。公会堂とか警察とか、公民館とか公の場所は、そういう人たちが押し掛けて住む場所にした。警察の留置場が満員になった。どうしたか…。それは食べる物も何もないから、要するに悪いことをして、そして監獄に入ればちゃんと食事が与えられる。そういうことで懲役6ヵ月ぐらいの短期刑の窃盗とかの人が増えた。そういうシカゴの状況だったのです。

従って、人の心が荒んでしまって、みんなが自分のことしか考えない世の中になってしまった。そういう中でね、ポールハリスって人が本当に寂しかったんです。そして本当に何でも相談できる仲間を集めよう、というので、そこで4人で集まりまして、最初のロータリークラブが出来た。ロータリークラブは今、全世界に広

まっておりますけど、元々はC4人で始まったんです。

そういうことで仲良くなつて、お互いに助け合いをして、だんだん、だんだん皆が豊かになっていったんです。こんなにいいクラブだったら仲間を増やそうと、どんどん仲間が増えていった。で、仲良しクラブあります。皆が仲良く助け合つて、楽しくクラブライフを楽しんでいた。

ある時、ある人に、「楽しいクラブだから、あなたも入らないか」と誘つた。そしたら、その人は、そのクラブのいろんなやり方を見ておつて、「そりゃ君たちいいだろう。自分たちだけが助け合つて、豊かになって。それで、やがてこの世を去つて行く、それもいいだろう。だけども自分たちはこの地域社会に生まれて、地域社会にお世話になって、地域社会で育てられるんだ。このお世話になった地域社会にね、なんらの恩返しもしないで、自分たちだけが豊かになって、そしてお互い助け合つて、そして楽しく過ごして、やがてこの世を去つていく。そんな自分のことしか考えない、そういうクラブはおそらく長くは続かんだろうよ。自分はね、この世に生を受けて生まれてきて、二度とない人生をね、エゴイズムのような人たちの集まりに入って過ごすのはごめんだ」と言って、入会を断つたんです。

それを聞きまして、いたく反省をしたのは、このクラブを作つたポールハリスと言う人だつたなんあります。「で、これは我々が間違つてた。クラブの行き方を変えようよ」それから、今まで仲良くする親睦だけで生きてきた、ロータリークラブが世のため人のためのこと、人のことも考えようというクラブに変わっていったのであります。

これがロータリークラブなんです。ですからロータリークラブは、親睦団体であつて、社交クラブなんありますね。それがやがて、人のため世のためのエネルギーというものを出すよ

うになったというふうにご理解ください。で、人のために役に立つクラブであれば、何もシカゴにだけある筋合いじゃないだろう、全アメリカにあってもいいだろう、そこで、仲間を増やすどころか、クラブも全アメリカに作ろうといふんで、サンフランシスコに作り、ロサンゼルスに作り、全アメリカに広がつていて。1910年、ロータリークラブが始まってから5年経つ頃には、全アメリカに16のクラブがあつたんです。

そこでまた、もっと仲間を増やそうというの、今度はイギリスでロータリークラブを作ろう。そこで問題が出てきた。イギリスっていうのは階層社会。一方には貴族という支配階級がある。庶民という平民の階層があります。イギリスにロータリー作ろうじゃないか?って言い出したときに、貴族というお偉い人と八百屋のオヤジさん、庶民ですね、そういう人が同じクラブになつて仲良くなれるか…。

「しかしロータリーはね、そういう社会的な身分とかを超えて、仲良くならなければならぬ、これがロータリーの一つの理想だよ」っていうので、イギリスにもロータリーを作つたんです。すると、八百屋のオヤジ、魚屋のオヤジ、貴族が一緒になってロータリーを楽しむことが出来るようになつてきた。それがやがて、もつと増やそうというので、その考え方がヨーロッパに飛びました。1920年、ロータリーが始まって15年経つときには、スペインのマドリードに出来る、そして日本の東京にも出来る。フィリピンのマニラにも出来る。そういう形で全世界にロータリークラブが広がつていった。ですから最初は、身分とかそういうものを超えてクラブが出来た。

それがやがていろんな宗教、初めは、ロータリーはキリスト教だけの集まりだったなんありますが、今では仏教もありますし、イスラム教もありますし、いろんな宗教の人たちがロータリアンになっているなんあります。そういうふうに宗教も超える。果てはアメリカからイギリ

ス、ヨーロッパに行ったように、国境も超えてね、そして世界中にこのクラブ活動っていうのが広がっていった。ロータリアンが世界中におられるわけです。

どんなことやっているか、簡単に申しあげておきます。一番最初はね、世の中で恵まれない人を助けようと、本当に素朴な気持ちから、人を助けようという気持ちから始まります。しかし、やがて、それだけじゃダメだらうと。まず、次の世代を担う青少年、若者を育てようと、そこでボイスカウトを育てたり、インタークト、ロータークト、そしてこのライラ。若者たちのリーダーを育てる。リーダーのリーダー、皆さん方そうですね。リーダーのリーダーを育てようという、こういうライラも始まりました。

それから、第2次大戦が勃発するヨーロッパに、ナチズムの時代で黒い雲がたちこめてきた。なんとか戦争を予防しなければならないというので、若者たちに世界的な意識を植え付けて、その人たちがいろんなところで勉強して祖国へ帰ったら、戦争が起ったときに、よもや自分がお世話になった国に弓矢を引くことはなかろうと、そういう形で若者たちに奨学金を支給する。ロータリアンがお金を集めてきて、そのお金を全世界の若者たちに奨学金を出して、そしてどこの地域に行ってもいいから、どこでも勉強してもらおう。そして帰ってきて、それぞれの地域でまた活躍してもらおう。こういうのをロータリー財団と言っております。

で、ロータリー財団の奨学生も今たくさん出来ました。で、有名なのは第1回のロータリー財団の奨学生、これが、国連難民高等弁務官の緒方貞子さんで、第1回のこの奨学生でございまして、その他にもたくさんそういう形で役に立つ人をロータリーが育ててきたということです。

他にもあります。ポリオ撲滅をしようなんてプログラムもやっております。なかなか撲滅は出来ませんけれども、ロータリーっていうのは

いつも非常に高々と理想を掲げて、理想に燃えて行動していく、いつもどこかの目標に対して達していきたいという、その念願を持って動く世界であります。今そんなこともやっております。

このライラのことであります。先ほど日野先生から、だいたいのお話がございました。仲良くなると最初に申しあげました。なぜ仲良くなるのかというと、仲良くならなきゃ人は育たない。人を育てるためには自らも勉強をしなければならない。勉強するっていうのは、人と出会うことであります。いろんな人と出会っていろんなことを学びます。私たちの人生ね、たくさんの人と出会います。その出会いが大事なんであります。いろんな人に出会います。出会いによって、その人の人生が変わるかもしれません。いい人にも出会います。悪い人にも出会います。どういうことになっても自分がしっかりして、勉強して、信念を持っておれば、道を間違えることはなかろうと思います。

正師に出会うことは非常に難しい。で、正師っていうのは、本当の先生、人生の先生ですね。たくさんの人に出会いながらそういう先生に出会うことは非常に難しい。せっかくそんな人に出会っておきながら、例えば皆さんがこのライラに来ても、どこかの本当の先生が自分の生涯かけて勉強しようって先生がいるかもしれない。せっかくその人たちに出会っていても、この人が自分の正師だと、生涯かけて勉強しようという、そういうその人を見抜く眼力がなければそこで行き違ってしまいます。永久に会うことはありません。いろんな人と出会う、いい人とも出会う、そういう場を提供しているのが実はロータリークラブでありますし、ロータリークラブの例会でそういうことがありますし、このライラでもそういうことがあるわけでございます。ロータリーは人と出会うってことを大変大事しております。

そのことを実はロータリーの綱領の第1で、

心の友と出会い、もって奉仕の契機となすべきこと。本当の自分の親友というものとどこかで出会って、そしてその親友から得たエネルギーを今度は奉仕の契機、世のため人のために使いなさいよという、これがロータリーのモットーの第一なんあります。このライラというのも、いろんな人が出会って勉強してもらう。先ほどお酒飲んでもいいって話が出ましたが、飲んでも結構です。飲むんなら徹底的に飲んでもいいんあります。

一つこれは32年前に、今井先生が注意なさったんですが、なぜ酒を飲のかっていうのは、この勉強で議論したりして、神経が昂ってなかなか眠れないことがあるだろう、と。皆一人前のリーダーだから、そういう人にはやっぱりお酒も飲んでもいいだろうと、普通はこういうリーダーセミナーなんかでは酒は飲ませない。真面目な勉強の会でありますからね。だけでもライラは酒を飲んでもいいよと、しかしそれは、やはり疲れて眠れなくなる人があるだろうから飲んでもよろしいよ、というのが今井先生が最初にライラに酒を飲んでもいいよという意味をご説明なさった。ところが蓋を開けてみると、ライラに来ると酒を飲むものだ、飲まなければならない、というのが増えてきて大変困るんであります。そのことだけは誤解のないようにして、あくまでも酒を飲むのは第2の問題。第1はやはり、せっかくいい人と出会ったんだから、そこで本当の正師が見つかるか、見つからなければ、いい自分の心を磨く、そして疲れたお酒も飲んでもいい、そういうふうにご理解をいただきたいと思います。

このライラの特徴は、3日間は午前中、必ず専門の大学の先生に講義をしてもらう。そしてディスカッション。これは明日でも説明があると思いますが、このライラセミナーではですね、最低4時間以上のディスカッションをしてその後で3時間以上のフォーラムをやります合計7時間のディスカッションの時間をとっておりま

す。これはロータリーの中ではそういうこと一切ありません。ライラだけです。そういう長時間のディスカッションをやるところはね。そういう意味で、この大変な立派な、特色のあるそういう経験をおそらく皆さん方やったことないと思います。7時間以上で連続して、間でご飯は食べますけれども、連続してディスカッションをやるということはありませんけれど、こういう貴重な経験をして頂いて、それが何らかの皆さん方の心の糧になればと願って、こういうライラが始まっておるわけであります。

要するに今大変な世の中であります。皆さんご存知のように、シカゴのロータリークラブが始まったときと同じような状況で、人の心がすさんでしまっていて、自分のことしか考えない人たちが今大変に多いようでございます。自己中心とかそういうことよく言われますね。そういう人のことは一切知らない、自分のことしか考えない、そういう人たちが多い中でね、人のことも考えようという人たちが集まって私たちの世界があるのであります。これがロータリーであり、このライラであります。

今皆さん、先ほど出会ったばかり。見知らぬ人としてここにおられるわけです。これで4日後に、ライラが終わった時にはお互いに皆が、本当に仲良くなって、心の友を得て、何らかのエネルギーを心に持って、地域社会に帰っていただくということになっていただきたいと願っているわけであります。

こんなことで難しい話をしましたけれども、あんまり難しいことはもう後で、オープニングパーティーでご馳走も酒も存分に出ますから、そこでアルコール消毒で全部忘れちゃっていいですから、存分に楽しんで、そこから明日からまたライラのまた一步を踏み出してください。頑張ってください。ありがとうございました。  
(拍手)

# その他関係者ご紹介 注意事項の説明（続）

○司会・日野 一人、紹介をしてなかったんですけど、後ろにおられます海沼美智子さん、東京恵比寿ロータリークラブからおいでです。（拍手）

この国際ロータリーのエリアの御世話もなさつられまして、青少年の育成の方では大変偉い方なんですね。皆さんご存知の「音羽ゆりかご会」をなさっておられる方なんです。

それからもう一人、三木さん、ちょっとお立ちください。姫路ロータリークラブの三木さんです。遠慮深い方で、そこで立っておられますが、一昨年のガバナーです。

じゃあ、余島のこのYMCAのスタッフの方から、施設の紹介と注意事項を申しますので、どうぞ皆さんお聞きになってください。火の用心とかいろいろおっしゃいますので聞いてあげてください。

○山根 皆さんこんにちは。余島野外活動センターの山根と申します。本日はようこそ、この余島においでくださいました。いきなり雨が降っていて、寒くて大変などこに来たなあと、思っていらっしゃるかもしれませんが、実はこの雨も自然の恵みですし、この寒さも自然の一部だと私たち思っております。おそらく皆さん、帰られる頃にはお天気が回復してくるとは思いますし、今、余島では桜の花が2つ3つ咲き始めていますけれども、それが10、20、30と咲くようになって、開花宣言が皆さんの研修が終わる頃には出るのかなあ、と思っています。

余島は60年前から、神戸YMCAが使わせていただいて、青少年教育のためにキャンプ野外活動をしております。詳しくはしおりの方にも文章を書かせていただいておりますので割愛はいたしますが、60年はすごい歴史だと私は思っています、60年間、本当にいい意味で、この余島がいい働きをして、いろんな方々を育ててきた、いろんな方々と共に、歩んできたという証だと思っておりますので、限られた3泊4日の日程ではありますがいい研修を積まれて、より良い人生の肥やしをこの場で養って帰っていただきたいな、と思っております。以上です。それではスタッフの紹介をしたいと思います。自己紹介をしていただきましょう。

○坂田 こんにちは。余島センターのスタッフの坂田と申します。宜しくお願いします。

○松田 はい皆さんこんにちは。神戸YMCA余島センターの松田と申します。3泊4日どうぞよろしくお願いします。

はいそしたら、私の方から余島の簡単な説明をさせていただきたいなと思いますので、8ページに地図が載っていますので、お持ちの方は見ていただいて、3泊4日ありますので、いろいろ見ていただけたらと思うのですが。必要な場所だけ今、言っておきます。

今皆さんのがいるのが、漢字がほとんど読めないと思いますが大集会室という、南の浜の近くです。で、食堂の場所ですね。食事をする場所

が皆さんのが右後ろの、あの建物なります。あそこが食堂になりますので覚えておいて下さい。食堂の隣にお風呂ですね。共同浴場がありますので覚えておいて下さい。

お部屋を使うときの注意事項ですけれども、ドライヤーを持って来ている方がいらっしゃるかもしれません、部屋で二つ使うと電気が落ちてしまいますので。今晚、夜になったら分かると思うんですが、ただでさえ余島は真っ暗な島なので、どっかの部屋で2つ使うと全棟が落ちますので、ドライヤーは1つだけにしてください。

先ほど日野先生から火の用心の話がありましたが、今日は雨なんですよっと頑張らないと火が付かないと思うんですが、余島一回火事が起きると消防車が来られませんので、放水船を呼ばなきゃなりませんので、その前に皆さんでバケツリレーをすることになると思うんですけど、火の扱いだけは注意してください。

タバコ吸われる方がいらっしゃいましたら、灰皿がある場所で吸うようにしてください。歩

きタバコ等はしないようお願いします。最後に、地図のインフォメーションセンター。皆さん、さっき受付をされた場所ですけれども、そこに24時間スタッフが待機していますので、分からぬこととか緊急事態があったら24時間いますので、そこに来るようにしてください。

あとインフォメーションセンターでささやかながら、お土産コーナーと売店がありますので、朝9時から夜9時まで一応オープンしていますので、是非立ち寄ってください何かわからないことがありますればどんどん聞いて欲しいな、と思います。以上です。宜しくお願いします。(拍手)

○司会・日野 以上で開講式を終わります。皆さんお疲れになったと思いますが、今からですね、それぞれキャビンに戻られる前にですね、組分けを発表します。ABCDの4つの組に分かれますので、ロータリアンの皆様はお引き上げになって結構です。カウンセラーの方と受講生の方だけお残りください。



## 深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー  
(伊丹RC)



○司会・日野 皆さん、高山良二さんを紹介致します。ジェームスは地雷処理をするNPOですが、そこで働いておられます。もとの自衛官でございまして、カンボジアでやっておられます。地雷をマインというのを知っておられますか？ I My MeのあのMineですね。マインと言うのは、実は、I My MeのあのMineだけじゃなく、鉱山っていう意味があるんですね。石炭を掘るとかいうのをマインと言うんです。ところがマインの意味の中に地雷という言葉があるんですね。同じスペルなんですね。あれぐら悲惨な兵器はないんです。あれはパンとやると殺さないんです。殺さない兵器で恐いんです。あの兵器でやられるとね、その兵士はね、兵士でない人もね、死なないんです、足を失うだけなんです。

その程度の爆発物を埋めといて、その人たちを動けなくしちゃう。動けなくしちゃったらどうなるかって言ったらね。皆、その周りの自分の仲間の兵士はね、その人を担いで、前線から帰らなきゃダメなんですよ。そうすると兵力がね、その一人が傷ついたためにみんな後方まで帰っちゃうから、一人やつけると3人分か4人分の兵力を削いじゃうんです。恐ろしい兵器なんですよ。そういうものが世界中にいっぱい広がっているんです。そういうものを自分の心を一所懸命にコントロールしながら、地域の人と一緒に、地域の生活まで一緒に面倒みながらやっておられるという…本当に心から敬服する、そういう活動やっておられるのがこの高山

さんなんです。（拍手）

深川先生、ロータリアンのタベをよろしくお願い致します。

○深川 今日は、「石門心学に学ぶ」というテーマです。2時間でおさまるか、時間が余るか分かりませんけれど。今、お配りしたレジメを見ていただいたら分かると思いますが、「石門心学に学ぶ」というテーマなんあります。しかし実はそういうテーマですけれども、石門心学のことは何も分からぬのであります。

要するに、前回の地区大会でね、当地区の「石門心学に学ぶ」というテーマで、教育対談がありまして、その話を聞きましてね。非常にその話自体には感動を受けたんであります。その中の話に、ヒントを得ましてね。いろんな私の発想が閃いたもんですから、それをまとめただけの話でありまして、石門心学に学ぶって言うけれど、石門心学自体の話はしません。何も知らないんですから。そんなことでお許しいただきたいと思います。

で、最初にまた、誤解を招かないように申し上げておきたいのですが、今日の話は中で、宗教の話も出てまいります。キリスト教だと、禅宗だと、そういう話が出てまいりますが、私は、この宗教のことはよく分かりません。しかし、いろんな話を聞きした、その中から、ヒントを得ましてね。結局、私はロータリーの話をします。ですから宗教を批判するようなところもありますけれども、別に宗教に悪

気があって、そういうことをやっているんではなく、ロータリーを理解するための材料として、宗教の話を申し上げます。

私は、今、宗教のことは分からぬと言いましたが、私の家は浄土真宗なんです。しかし親鸞聖人の教行信証とか読んだことがないんです。それから私は実はミッションスクール、関西学院の出身でありますから、むしろキリスト教の方が知識があるかもしれません。しかしキリスト教の信仰は持っていません。

今井先生に怒られそうですが。むしろ、私が一番興味を惹かれているのが、曹洞宗の禅宗、道元禅師の話をいくらか聞きかじっているのです。道元禅師の話っていうのを、ここでは、永平寺の専門道場で修業なさったここにおられる安行さんがおられるんですが、まあロータリーのよしみで、お聞き流しいただきたいと思うんです。だからとんでもないことを言う奴だと思ってるかもしませんが、それもこれもただロータリーの話を理解する手助けになるという意味で引用するだけでありますので、あしからずご了承ください。

それで、私も先ほど今井先生が90歳で、私が80歳と申し上げました。年を取りますとね、この年を取るというのは大変いいことだなと思うことがあります。どういうことかと言いますと、年を取りますとね、新しい情報が来たり、また、新しい勉強したりしましてね、自分の今まで考えていたことが間違っていたことに気がつきます。そして、年を取って、いろいろな情報が蓄積されていきますから、新しい情報に接しますと理解度が速いということがあります。

自分の目がよく見えてくると、そういうふうにも思うんです。皆さんご経験があると思いますが、私たちが若いときにはですね、何事にも努力をすれば必ず獲得出来るという、こういう人生観を持ちます。若いときの特色であります。一生懸命努力しますと、大学にも行ける。就職も出来る、結婚も出来る。全てのこと

が努力をすれば獲得出来るという、こういうことが信ずることが出来た世代でございました。

ところが、年を取りますと、どんなに努力をしても、全ての物をポロポロポロポロと失っていく世代に入っていくのであります。まず体力を失います。筋肉は衰えます。歯が抜ける。目が老眼になる。髪は抜ける。白髪になる。健康も損ねる。私みたいに酒飲んでひっくり返る場合もありますし、それから懸命に育てた子供は、結婚して離れてきます。友達も死んでいきます。やがてそして定年で職を失うという具合に、年を取るとどんなに努力しても何もかもポロポロポロポロと失っていくわけであります。ただ、私たちはこの失ったからこそ見えてくる新しい素晴らしい世界があるということも分かりました。これは大事なところなんあります。若いちはね、どうしても生意気でね、自分の考え方方が正しいと思い込んでおりますから、かえって外からの情報に対しては固いんであります。

しかし、年を取ると熟してまいりますから、情報の蓄積によって、外の情報に対しては大変柔軟になってまいります。この情報の蓄積ってことにつきましては、ロータリーの例会を始め、地区大会、IM、その他あらゆるロータリーの会合では、ご存知のように職業の違う沢山の人達と出会うことができるわけであります。受講生の人たちに、出会いが大切だと思いましたけれど、まさしく出会いが大切であります。その結果、さまざまな情報を授かることが出来るんであります。そしていろんなことを学ぶことが出来ます。このようにいたしまして、ロータリーというところは、正に人材の宝庫なんあります。

そのことは、見方を変えますと、ロータリアンがいろいろな人と出会うことが出来る場、例会も地区大会も、このIMもライラも、こういう出会いの場なんあります。でロータリーはこれを、出会いの保証と言って、これは皆さんご存知のロータリーの綱領の第1のところに出

て参ります。どういうことを書いているかと言いますと、心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと、これが綱領の第1の文句であります

これは実際、皆さんお持ちの手続要覧の訳とは違います。あれ、ちょっと分かりにくいのですね、私はこういうふうに違訳をしております。で、こういう形で、出会いを保証する。もちろん従って、出会いを保証しておるのが、ロータリーの例会なんあります。

このことをね、今井先生流に言いますと、今日、安平さんが先ほどおっしゃってました、人と出会い、神と交わり、愛の火の燃ゆるところ、この人と出会いっていうのは、いろんな人と出会うところ、そして神と交わりっていうのはね、ロータリーで言えば、神様と交わっていわゆる奉仕哲学を学ぶところ。そして愛の火の燃ゆるところは、そういう心が出来たならば、そういう心を自分以外の全ての人達に分かち与える、要するにロータリーの実践の場なんあります。

で、こういうことを今井先生はライラが始まつて、一番最初のときに、正門の石碑のところに書かれたわけであります。私は最初に、32年前にここに来て、この言葉見たときに『あ、まさにこれはロータリーそのものだ。今井先生もなかなかやるな、と思ったんであります。そのときは、今でも思いますけれども、大した人でありますけれどもね。とりあえず最初のインパクトはそれでした。ライラで出会ったんで、すばらしい言葉だな、と思ったんです。

この人と出会い、神と交わり、愛の火の燃えるところ。で、それがこのライラなんあります。そしてロータリーでもあるんあります。このようにロータリアンはね、いろいろなことを学ぶことについて、まずいろいろな情報を授かることができます。

先ほど申しあげました、先日の当地区大会の石田梅巖の石門心学の話を聞くことができまし

た。素晴らしい話でございました。それを聞きたながら、いろいろな発想がきらめいて、メモしていると3時間ぐらいの講演の材料が出来たんあります。今日は、その石田梅巖の話を聞いて、石門心学自体の話とは関係ないのですが、その講演を聞いたことを契機にいたしまして、ひらめいた発想のうちから二つの話をいたします。

一つはどういう話かと言いますと、この石門心学の話の冒頭に出てきたのが、栗を拾った話。栗っていうのは、山になっている、子供が拾う栗ですね。これが一つ。

もう一つは、そのときの話と一番最後に出てきた、もったいないという言葉の話であります。で、その二つの話。この栗を拾った話から入りたいと思うであります。

どういう話かと申しますとね。子どもが山へ遊びに行きます。そして栗を拾って帰って、持って帰って来たんであります。それをその父親が見ましてね。「その栗どうしたんだ?」って。「あそこの山で拾って来た」って。「あの山は人様の持ち物だ。そこで落ちた栗を持って帰ったらいかん」って。「勝手に持って帰るべきじゃなく、そういうものは絶対に採ってはダメだから、元の所へ返して来なさい」と。子供は不承不承、元の所へ栗を返しに行つたんであります。こういう話、それだけの話なんですが、こういうことを聞きながら、いろいろなことが思い出されたわけであります。

この山で拾ってきた栗を元の所へ返しなさい、これは人の物でありますから盗ってはいけないということでありますから、ごく常識的な当たり前の話なんあります。従って、石門心学の立場から言っても、これは子供の教育上大切な教えであります。人の物を盗ってはならないということを子供の心に植え付けるうえで、大切な教えだという話でございました。

もちろんこの事自体は真に正しいことであります、道徳教育としては欠くことの出来ない

話なんあります。そういう教えあります。道徳上もそして社会倫理上も、何ら疑いを差し挟む余地はございません。と…一様は考えられます。しかし果たしてそうなのか？ これが唯一無二の絶対の真理なのか？ 他に考え方はないのか、というところからロータリーの思索が始まるわけであります。

ロータリーのバイブルと言われました1923年度のRIの会長・ガイ・ガンディカ?という人が、「ロータリー通解」という本を書きました。

それによりますとね、「ロータリーは思索する人でなければならない」と書かれています。それではロータリアンはね、栗を拾った話について、どのように思索を巡らせればいいんでしょうか。まず栗は自分の物ではない。人様の物だから山へ帰すべきだということは、自分の物と他人の物と峻別する論理が前提になっております。分かりますね。この峻別の論理というのは、本来、西洋の論理なんあります。自分の物は他人の物ではない。他人の物は自分の物ではない。当たり前のことではありますが、すなわち自己と他人とを峻別する論理なんあります。

これは実は、西洋の論理であります。そして実は、今、私たち日本人も、日常生活においては何の疑いもなくこの論理を使っております。で今、峻別の論理は西洋の論理だと断言しましたが、それはいったいなぜかと言いますと、元来日本には、自分と他人を峻別する、いわゆる個人という考え方がなかったのではないか、と思ったからであります。なぜかと言いますと、元来、西洋と言いますのは、狩猟社会であります。

一人ひとりの人間が弓矢を持って、獣を追いかけてそれを獲ってきて、それで自分の物だと言って食べる。一人ひとりが働いていく世界、狩猟社会ですね。それは、非常に個人という意識が強い社会であります。しかし日本は、狩猟社会ではありません。農業社会であります。田植えをするにも、かやぶき屋根の葺き替えをす

るにも、みんな村人たちが助け合って、一緒に働く社会なんあります。つまり個人では何も出来ない。いつも皆と共にいるという社会。したがって自分と他人とを峻別するという意識は元々なかったんではないか、と私は思うわけであります。

現に、この明治維新のあと、日本の近代化に大きな役割を果たされた福沢諭吉先生。中村ガバナーの出身校であります。この福沢先生が、個人主義の、インディビジュアルって英語を訳すときに、インディビジュアルっていう言葉に適切な訳語が見つからなかったそうであります。そこで個人個人とか、あるいは各個人とか、一人ひとりとかいろんな言葉を考えたわけであります。結局、個人のという訳語に決めたということであります。従って、西洋の論理で言うところの自分と他人とを峻別する意味での個人という概念が私たち日本の社会に確立したのは、明治以降のことなんあります。

民族の文化ということにつきましても、日本には西洋の論理から生まれた文化とは全く違う文化があったと思われるんです。ところでこの峻別の論理は、果たして絶対的なものなのでしょうか。私たち21世紀の人類社会の全てに当てはまる万古兵器の論理なのか、例外は一切ないのか？ ということであります。この峻別の論理っていうのは、一つの物については一つの所有権しか成立しないということが前提になっております。

これは言うまでもなく法律の論理、法の論理であります。そして西洋ではこれが社会倫理でもあるわけであります。ところがね、実は日本の社会にはこの一つの物について二つ以上の所有権が同時に存在する所有形態があります。今でもあります。それはどういうことか申しますと、村の住民たちが、村の山林とか原野などで共同してそれを利用するということ。要するにいろんなことを収益していく、そういうことができる、いわゆる入会（いりあい）権というも

の慣習があります。レジメに、出ていると思うんですが、レジメを見ながら聞いてください。いりあいの慣習あります。

そしてこれが慣習なんありますが、それは実は民法という法律ではこれを入会権という権利として保護しております。

その内容はどういうことかと言いますと、村の人であれば誰でもその山の芝を刈ったり、炭を焼くための木を刈ったり、また植林をしたりすることが出来るわけです。もちろんその入会権、権利でありますから、これは法の世界のものであります。これは同時にその内容から言いますと、入会の慣習が前提になっとるわけでありまして、従ってこれは社会倫理でもあるわけであります。で例えば、社会倫理ってどんなものがあるのか。昔から、日本の地域社会には慣習としまして、子どもが山の柿の実を取って食べても、それを許すという文化がありました。また、柿の木の高い所に実っている柿の実は、あえて全部取らずに、2つ3つ残しておく。いったいそれは何のためか。それは空を飛ぶ鳥たちのために残すんだ。こういう文化があったはずであります。

これは、人の山の栗を取ることは悪いことだとしながらも、子供が幼いときにはそれを許す。そして子供が成長して物心がついて、それが悪いことだと分かるようになれば、自然に人の山の栗を取らないようになるだろうという、考え方なんあります。

これはまさに農業国、日本古来の文化であります。私はこれを包摶の論理だと考えております。峻別の論理に対しまして包摶の論理だと考えております。しかし一方、先ほど申し上げております石門心学の論理は、これは社会的に許されないことは子どもの時から厳しく躰けるべきだというこういう考え方なんあります。

これまで実は、道徳的、倫理的に当然の論理であります。果たしてこのどちらの考え方

を取るべきなのか。見方によりますと、石門心学の論理は法の世界の論理であり、子供を許す論理っていうのは倫理の世界の論理であるということもできます。

果たしてどう考えるべきか、ロータリーはもちろん法の世界ではございません。倫理の世界にあるのであります。さてどう考えるべきか。これは実は、ロータリーの皆さん方のクラブのフォーラムなんかでは、格好のテーマになるんではないかと思うのであります。

さて今、西洋の論理では自分の物と他人の物とを峻別すると言いましたけれども、そもそもこれは自分の物だよと言えるものなんかは果たしてあるんでしょうか？ どういうことかと言いますと、自分の物について、絶対的な所有権というものを認めることは、すでに紀元後3世紀、その昔に制定された古代ローマの法律でありますローマ法典にある原理なんあります。

古代ローマというのは、紀元前3世紀から紀元後3世紀にわたって隆々と栄えた国家であります。ローマの貴族が、セックスの極致は同性愛だといって男色にふけった。そのためには子供を生むことが出来なくなってしまったローマの貴族は50年にして没落してしまう。そしてそのあとに中世の暗黒時代がやって来たんだという、こういう説を成す人もいるわけであります。しかし古代のローマ人はね、紀元3世紀に、ローマ帝国が滅亡する直前に、すばらしい法律を作ったのであります。それが実は、ローマ法でございました。そこには、所有権の定義として、誰でも自分の物を自由に使用収益する原理があると、こういう規定があります。

そしてこの所有権の原理、これは紀元後3世紀から今日に至るまで、1700年の歳月を超しましてね、現在の私たちの民法第206条にそのままの形で規定されておるわけであります。すなわち所有権っていうのは自分の物を自由に使用収益処分する権能をいうんだと、こういう定義であります。いわゆるこれは所有権絶対の思

想に基づくものであります、これは自分の物と他人の物とを厳然として区別する、いわゆる峻別の論理なんあります。

しかし言うまでもなくこの論理は法の世界のものであります、従って倫理の世界ではこれをどう考えるのか、ロータリーは倫理の世界でありますから、倫理の世界では一体どう考えるのか、例を出します。

法の世界にある著作権だとか、特許権っていうのがあります。無体財産権と言われておりますが。これは自分の著作について、それを権利として守って、その権利は自分だけのもんだから…と言って、優先的に他人の権利を排除してしまいます。しかし、よく考えてください。厳密に考えますと、どのような著作物も、その人が独力で自分で開発したものなどあるはずがないと思うんです。

例えばね、人間は15歳になるまでに200万人のお世話なっているという考え方があります。まず、それは自分を生んでくれた両親を始め、お米や野菜を作ってくれた人、あるいは服を作ってくれた人、そして学校の先生、友人、地域社会の人たち、その他、人間の衣食住に関わるたくさんの人々のおかげで育ってきたわけであります。15歳になるまで。それが、だいたい200万人だって言うんです。このように考えますと、著作権という権利につきましても、著作物はね、自分を生んでくれた両親あってこそものでありますし、その著作を作る能力と言うのは、これはもともと両親から授けられたもの。のみならずその著作は、学校の先生を始め、業界、会社、地域社会、先輩同輩はじめ、たくさんの人々のおかげであります。

さらに申しあげますと、この宇宙を支配する、宇宙を全てある大いなるもの、すなわち民から授かったものとも言える訳であります。

このように考えますと、自分一人の能力で作り出したものなど、何も無いんです。したがって私たちは謙虚に考えますとね、自分

の物などというもの無くって、全ては全体の物なんあります。すなわち、私の物と思われている物は、全て何らかの形で自分以外の人たちの影響を受けた物。そのおかげで作り出された物と言わなければならないであります。私は原則として自分の著作を出版したことはございません。例外として2件だけありますけども、それはだいたい自分の物など無いという考え方があつたからであります。

それじゃ、先ほどの、人を許すという文化、そのことについて日本の文化の中で育ってきた私たち、日本のロータリアンとしては、一体どのように理解すればいいんでしょうか。ロータリーは元来、アメリカで育った文化であります。ではそのアメリカで育った文化を私たち日本のロータリアンとしてはどのように理解すべきなのか。いうまでもなく、このことについては、まずアメリカのロータリーの歴史に学ばなければなりません。例えばアングロ・サクソン文化の中心でありますイギリス。そしてアメリカ。これはキリスト教文化の世界であります。私は冒頭のところで申し上げましたように、私は宗教のことはよくわかりません。キリスト教についてもね、カトリックもあれば、プロテスタン卜もあるし、その中にもいろんな考え方があるだろうと思います。私はそういうことは一切分かりませんが、一説によると、キリスト教っていうのは一神教だと。一つの神を信ずるものだと。したがって神を信じる者だけが救われる所以あります、神を信じないものは、いわゆる蛮族、野蛮人の蛮と書きますが。これ、レジメに書いておきました。そういう考え方であるとも言われております。

なにもこれはキリスト教を批判しているんじやなくて、そういうふうなことを言う人がいるわけであります。そしてこのキリスト教やイスラム教、その他の一神教では、厳しく戒律というものを定めています。そしてそれを守ることを養成します。もし戒律を破りますと、

例外なく罰せられます。まさに信賞必罰の原理主義社会なんあります。

たとえばイスラム教の世界では、今でも人の物を盗むと腕を切り落とすという刑罰が公然と行なわれておるようあります。このような信賞必罰の厳しい原理主義社会、ここには先ほど来申し上げております日本の地域社会の文化のように、人を許すという文化はないようにも思われるのあります。最も、この刑罰の本質というのはね、応報にあるか、あるいは改善、あるいは教育にあるかということは学説中争いになるところであります。

で、応報。そしてそれを教育する。改善って言うのは決して、どちらかを取るべきだっていう二者択一の排他的な関係ではなくって、やはり応報ってことも改善ってことも、両立する思想なんあります。そしてこれも人類の原始社会におきましては、きわめて一つの犯罪に対して復習的な色彩の強い応報思想というものが支配していたのであります。例えば旧約聖書のエジプト記、第21章を読みますとね、命には命を償い、目には目を償い、歯には歯を償い、手には手を償い、足には足を償うべき。こういう記述があります。

これは、加えた害と等しい害を加害者に応報的に加える。こういう思想あります。で、この思想は、現在でも未開民族の間には残っておりますし、いろいろな法監修の中に現れておるそうです。そればかりではなく、私たちの身の回りにも、このような感想、感情を持っている人達がいることも事実なんあります。そしてこのような思想を全く無視することも出来ないと私は思っています。この応報と言うことはね、これが人間の本能的な欲求の一つだからであります。人に害を加えられたら、その仕返しに害を加えようと、こうしたことありますから。もちろんこのことは法の世界の問題でありますから、したがって例えば、法の世界の問題としてはね、日本とアメリカを比較し

てみた場合に、この原理主導のアメリカはですね、罪を犯したことに対する刑罰というのは犯罪の対応…どんな形で罪を犯したのか、それに従って、個別的に刑罰が詳細に規定されておりまして、裁量の余地が全くありません。例えばある殺し方については、これは電気椅子だとか。こういう殺し方のときには、これは絞死刑だとか。いろいろ決められておるそうであります。そういう形で、そういう一つの犯罪についていろいろ裁量して、それで軽いとか別の刑罰を選ぶとか、そういう余地がないわけであります。

原理主義社会だから当然なんあります。で、これに対して日本はどうかって言いますと、これちょっとアメリカと違っていますね。皆さんご存知のように、たとえ人を殺しても死刑から懲役3年まで。非常に幅の広い刑が定められておりまし、執行猶予まであります。大きな幅があって、その中から裁判官の自由心証によって、その事案に沿って刑罰を選択するということになると、わざわざあります。こういう幅の広い接し論理、これも包摂の論理と係わり合いがあるのかもしれません。

ご承知の通り日本は一神教ではございません。そして日本人には無神論者、無信仰の者が多いとも言われています。私もその一人かもしれませんのが、しかし日本人も、宗教心というものは健全として持っています。従って無信仰というよりも、一神教、多神教の区別でいけば、多神教なんだと思います。例えば仏教では、人間のみならず動物やさらには一木一草に至るまで、仏の心が宿っているという考え方であります。従って、私たち多くの日本人は、キリスト教、マホメット教、イスラム教、そういう特定の宗教一つだけを信仰するというのではなく、多くの日本人の守教心とか、宗教観の中には、各々それに儒教とか、仏教とか、新党とか、キリスト教、その他もろもろものが混在をしております。したがってキリスト教の国のように、日曜日には必ず教会に行って、このただ一つの

神に祈るという、こういうことは無いようであります。日本人って言うのは平素は、そんな儀式は何もしません。教会にも行かないし、お寺にも行かない。で、何もしないのに、お正月になつたら神社仏閣に初詣をしますし、春と秋の彼岸には先祖の墓参りをします。お盆になつたら墓参りをしたりお寺参りをします。そして今度はクリスマスになると教会に行ったり、家庭でお祝いをしたりしているわけであります。

さらに、魚を獲る漁師は、鮎供養ということはよくやります。鮎供養というのもやります。獣を獲る猟師はしし供養、猪を獲って、櫛を立てている猟師はしし供養。そういう供養というものをやります。これは平素、自分が殺生をしている魚や動物の心を慰める供養をするわけであります。それはやはり、鮎とか猪にも仏の心が宿っているという気持ちがあるから、こういう供養をするわけであります。

ところがこういう供養というものは、こういう慣習は、キリスト教の国にはないようであります。詳しいことは知りませんけど、私の聞いたところでは無いようです。これは一神教ではございませんから、特定の宗教を信仰することも日本人にはありません。要するに、何でもいいのであります。したがって一神教のように厳しく戒律を守ることもありません。逆に言いますと戒律を破った者には信賞必罰で望むという、これ原理主義社会ではなく、日本という国は「罪を憎んで人を憎まず」という言葉もありますが、すなわち人を許す心があります。で、何やっても自由なのか、そうじゃなくて、日本文化の中には、自分の行動というものを厳しく規律する心構えがありまして、例えば、「お天道様が見てござる。だから悪いことはしない」こういう考え方があるのであります。

要するに、無宗教と言われる多くの日本人の宗教観は、キリスト教とかイスラム教とか、その他もろもろの宗教を超えたもの。すなわちこの宇宙を全てある大いなるものを信じているわ

けであります。従って、これらの日本人は、キリスト教のような特定の宗教は信じなくても、その大いなるもの、それを神と言ってもよろしい、仏と言ってもよろしい。あるいは自然の攝理と言ってもよろしい。要するに人間を始め一本一草に至るまで、この森羅万象を全てある大いなるものを信じておりますから、その他の事はどうでもいいのです。

このおおらかな心、人間のみならず動物から、一本一草に至るまで全てのものに仏の心が宿っているという、そういう全てのものを慈しむという、全てのものを包摂する大きな心。ここから人を許すという文化が生まれたのではないかと思われるわけであります。で、この一本一草にも仏の心がある、仏の心を宿るという多くの日本人の宗教心は、日本の文芸の世界にも表われております。

その典型的なのが春夏秋冬。微妙に変化していくこの四季のうつり代わりに、心遊ばせているのが俳句の世界なんであります。

これは日本独自のものでありますて、西洋人は理解できないと思うであります。たとえ西洋人が日本語が巧みになつても、この俳句の本当の心を理解するのはかなり難しいであろうと私は思います。例え一つの例があります。これはレジメに書いておきました。

「甘草（かんぞう）の芽のとびとびのひとならび」っていう句があります。これは私の師匠であります高野素十の代表句の一つなんであります。甘草の芽が、とびとびにひとならびに並んでいる、ただそれだけのことであります。従つて、この句を読みますと、多くの人々は、甘草の芽が一筋に並んでいるだけ、この句のいつたいどこがいいのかと思う人がいると思うであります。しかし俳句というものは、芸の世界でありますから、いろいろ俳句の修業を積むにしたがつて、その鑑賞眼、俳句を見る目も変わってまいります。例え、伝統俳句とか、新興俳句（しんこうはいく）ということもあります

すけれども、この昭和の初期の起こりましたこの伝統俳句、正岡子規から、高浜虚子、高野素十と渡ってくる伝統俳句。それに対して、水原秋桜子はじめ、新しい人たちが始めた新興俳句に属す人々たちは、この高野素十の甘草の句を見まして、単にこれは甘草という草の芽を描いただけのトリビアリズム、つまらない俳句だと言って酷評をします。しかし私はそのように考えることは、この句の鑑賞能力がまだないことを示していると思うんです。

この句は、大地の底深く眠っておった甘草の球根が、春になって芽を吹きます。やがてその芽が太陽を求めて伸びていきます。最後には土をもたげて、持ち上げて大気の中へ、芽吹いていきます。息を吹きかえす、その球根が、甘草の芽が、大地に顔を出す、それまでの長い間の年月の、甘草の芽に対する作者の思いやりの心が、この句のモチーフになっているんですね。

そこには甘草の球根が、神様から与えられた命を一生懸命に生きていこうとする、そういうものを慈しむ心があるんですね。その心が分からなければ、句の鑑賞なんて私は出来ないと思うんですね。このように、甘草という小さな草の芽一つにも命が宿っておる、仏の心が宿っておる。こういう考え方、これが優れて日本的な思いやりの心なんですね。俳句の鑑賞というものは、このようにしなければ、正しい鑑賞は出来ないであろうと私は思います。ここにも私は、おおらかな心で人を許す文化があり、冒頭の栗を拾った話に通じるものがあるんではないかと思うわけあります。

またもう一つ句を紹介しておきます。「ひっぱれる糸まつすぐや甲虫」これも高野素十の作品であります。この句は、私たちが子供の頃、よく目にした情景であります。甲虫が角に糸をつけられて、一所懸命でマッチ箱を引っ張つておるなんですが、これは動物、それも小さな昆虫のある動作を客観的に描いただけであり

ます。多くの人々たちはやはり、いったいこんな句のどこがいいのか、と思うわけであります。

そしてこのような客観写生の俳句は、言葉で甲虫のある動作を描いただけじゃないかと、何の情緒もない、と酷評をします。しかしこの句には、一生懸命にマッチ箱を引っ張っている甲虫を慈しんでいる作者の姿があるわけあります。それは甲虫が神様から与えられた小さな命を懸命に生きている一つの姿でありますし、大自然の中の一つの小さな世界ではあります。先ほどの人を許す文化に、これは通ずるものがあろうかとも思うんですね。ここにも作者の大自然に帰依する心、宇宙を全てある大いなるものに帰依する心があると思うんであります。全ての生き物を慈しむ、包括の論理の世界があると思うんですね。

で、さて話を戻します。それじゃ一神教を信仰する原理主義社会、例えば、アメリカには、人を許す文化は無いのかと言いますと、実はアメリカにおいても倫理の世界では、人を許す文化があります。例えばキリスト教では、キリストは「汝の敵を愛せよ」と言いました。まだマザーテレサは、すべての人を包摂する大いなる愛があります。そしてその根底には、人を許す文化があると思うんですね。そしてこのことは、実はロータリーの奉仕哲学の中にも現れています。実はアメリカに育ったロータリー。そこにも人を許す文化があります。そしてその事を、ロータリーの世界で自覚したのは、実は敬虔なクリスチヤンでありますポール・ハリスであります。それはいったいどういうことかと言いますと、実はこれは、奉仕哲学の中核にある哲学であります。3時間くらいかかるんでありますから、とても今日はそんな話は出来ません。従って、概略のほんの一部だけ申し述べたいと思います。簡単に申し上げておきます。

例えば、1905年に、ポール・ハリスは親睦、今日、受講生に説きました「みんなが仲良くする」を説いてロータリークラブを作ったのであ

ります。そして2年経って1907年、「親睦だけではダメだね。ロータリーはやはり世のため人のための奉仕も考えなきゃならない」そういうことも自覚をいたします。そこでロータリーの世界に親睦と奉仕という二つの中核概念が現れました。ポール・ハリスは、この奉仕と親睦を比べた場合に、奉仕というものを親睦よりも次元の高いものと考えまして、親睦というもの軽く見て、奉仕の方だけを重視したなんあります。

ロータリーは奉仕だというので、当然のことながら、その当時のシカゴのクラブはほとんど親睦派の人たちでありますから、クラブの人たちの反発を買います。シカゴクラブは荒れに荒れるわけであります。そしてついには、シカゴクラブは崩壊寸前にまでなります。詳しいことはいろんな物語があるので省略します。そういう状態になってきました。幸い、このことは、ロータリーが出来て5年たって1910年、チェスリー・ペリーという偉大なる組織管理者が現れることによりまして、全米ロータリークラブ連合会を作ることによって一様収束をいたします。

「クラブの中で奉仕、奉仕とやったために、それじゃ親睦が潰れてしまうじゃないか」そこでポール・ハリスは、自分がこのシカゴクラブをめちゃくちゃにした原因はいったいどこにあったのか？謙虚に反省をしたわけであります。自分のどこが間違っていたのか。その反省の結果、ポール・ハリスは一つの結論を得ました。ロータリーというものは、親睦と奉仕の調和の中に宿るんだと悟るわけであります。すなわち、親睦と奉仕というのは、等位の概念、お互いに等しい位の概念、同じレベルにあるものだととらえるべきだったと。この親睦と奉仕というものは、ロータリークラブという社会制度におきまして、表裏一体の関係にあるいる、いずれを優先させてもいけない。親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る、と悟ったわけであります。

このときに実は、ロータリー思想の原点が確立されたと思うんであります。よくロータリーの原点はいつから？なんて議論がありますけど1905年じゃございません。思想の原点は1910年なんあります。ポール・ハリスはこのときの気持ちを、全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文、「Rational Rotarianism」なんです。

これはどういうことかと言いますと、合理的な立場から考えますとね、ロータリーの試行というもの、考え方はどのような特徴を持った思考なのかということを解説したものであります。ところでこの「Rational Rotarianism」の論文の中においてポール・ハリスはこんなことを言っております。「自分はロータリーの創立者として神様の思し召しにより一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、それは寛容である。トラレーションであると答えるであろう」と、こういうことを言っております。これが実はポール・ハリスのロータリー論、ロータリー=寛容、ロータリー寛容論であります。

従って彼は、ロータリーは親睦と奉仕との調和の中に宿ると説いたわけですが、ロータリーとは寛容である、親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。寛容な心を持つこと、そして自分の考え方を他人に押し付けないこと。人を責めるな、例え過ちがあっても、人を許す心を持つこと。ロータリーはこのような思考の世界の中にある。これがポール・ハリスのロータリー理論であります。

私は、アメリカ人であるポール・ハリスが説きました、「ロータリー=寛容論、ロータリーは寛容の中に宿る」、これは実は非常に東洋的な発想に基づくものであると思うわけであります。なぜかと言いますと、初期ロータリーが、1915年のあのサンフランシスコの国際大会において採択いたしました、全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓、別名これはロータリ

一道德律と呼ばれておりますが、その第11条には何が書いてあるかと言いますと、キリスト教の黄金率がそれがそのままの形で規定されております。

この黄金率に象徴されますように、非常にロータリーの道徳律、倫理訓というものは、キリスト教の色彩の強いものでありまして、しかもポール・ハリスは、一神教を信じる敬虔なクリスチヤンでありまして、従って彼の信じるキリスト教的な原理主義社会の文化は、人を許さぬものであったはずです。それにもかかわらず、彼の提唱したロータリー寛容論というのは、その思想を超えるもののように考えられるからであります。

そこで、哲学者の田中忠男先生の説によりますと、イギリスの世界的な論客でありますアーノルド・J・トインビー、皆さんご存じであります、この人が言うんであります。キリスト教的な不寛容、寛容を否定することですね。キリスト的な不寛容では、現在の対立を救い得ない、こういう発想からアジアの精神的な基盤こそ、人類の運命を、希望をつなぐことが出来るということをトインビーは述べているそうであります。

ことにこのアジアの精神的基盤であります禅の真髓、禅宗の禅ですね、禅の真髓は明らかに寛容にあるんであります。確かに多くの流派を要しながらもですね、この度量の狭い、繩張り争いをやったことは非常に少ないのであります。禅の訓練っていうのは安行さんもご経験であります、本当に峻烈をきわめたものであります。それにもかかわらず、やはりまだ仏土の慈悲を背負っております。慈悲とはいったい何か、それは他人の身になって感ずるという人間最高の能力のことであります。

それがまさに寛容ということの真義なんであります。私は、この昨今の国際社会、ことにアメリカを中心とする様々な対立の状況を見ておりますとね、誠にアジアの寛容こそは今や世界

救済の原動力でなければならないんじゃないかと思うわけであります。

昔、20年以上前になりますが、イタリアのジユリオ・アンドレオッティという首相が、イタリアのマルタ島で開かれました世界宗教者会議におきましてね、「宗教家っていうのは、寛容ということを説いているけれども、その寛容、自分を絶対視して相手を許すというのは、これは寛容じゃないよ」と、こういうことを言い切っております。これ大変に、傾聴に値する見解でないかと思います。この寛容について、今申し上げました哲学者の田中忠男先生は、「仏陀の教えにある一水四見（いっすいしけん）のたとえ」として説いております。ちょっと難しいのでレジメに書いておきました。このことが分かりますとね、人間は度量が大きくなって、寛容になれるようでございます。

どういうこと言っているのかと言いますと、先ず、三保の松原の天女っていうのは、水を珠玉、玉と見るわけであります。その意味はどういうことかと言いますと、天女がね、羽衣で水面を羽ばたきますと、水滴が飛び散って玉となる。七つの色に光るって言うのであります。したがって天女にとっては、水が珠玉、玉に見えであります。

ところが鬼、これも想像上の動物でありますが、鬼は水を血と見ます。その意味はね、鬼が水に入ると、たちまち七転八倒して苦しんで死んでしまうと言うのであります。したがって鬼にとっては、水が忌わしい血に見えるであります。これに反して龍。これも想像上の動物であります、龍は水ってものを宮殿と見ます。龍にとっては水ほど住みよい場所はないんであります。龍にとって水は、竜宮城のような宮殿であります。したがって誰かが龍に向かって、「お前の今、住んでいるその宮殿は実は、水の中で流れとるんだぞー」と言えば、龍は「そんな馬鹿なことはあるもんか」と言って笑い飛ばすだろうと思うであります。

そして最後に、人間は水を水と見るんです。そこで道元禪師は言います。「すいれいの所見浮動なり」これ、レジメに書いていました。天女とか、鬼とか龍とか人間とかいう具合に、それぞれ類にしたがって見るところがみな違うんです。人間もね、自分が水と見るからと言って、天人や鬼や龍のように他の種族も同じく、水を水と見なければならぬ、このように強制することは出来ない。人間もやはり多くの種族のうちの一つにすぎない。人間だけが水それ自体とでもいうべき客観的な真理を知つておるわけではございません。

これを道元禪師は、「本水なきが如し」と言っておられるんです。珠玉でもなく、血でもなく、宮殿でもなく、水でもない。本水。本当の水、こんなものは別にあるわけではない。仮にそんなものがあるとしても、どうして人間がそれを知ることができるでしょうか？　人間が知ることができるのはやはり、すいれいの所見の一つとしての水にすぎないのであります。

ところが人間は、やっぱり思い上がっておりまして、この宇宙を自分中心にばかり考えます。便所の糞壺が汚いもんだと決め付けておりますけど、それが、うじ虫にとっては無情の楽園であるということを忘れております。この思い上がった一人よがりの人間中心主義の思想が、これが根本になって、人間の間にも独りよがりの非寛容を否定することが出てくるわけであります。すなわち宇宙が人間のために存在する、このように錯覚したのと同じ原理です。

国際的ならびに国内的な一切の問題は一水四見（いっすいしけん）の利で動いています。左とか右とかの入りわけをします。自分の主張を絶対化していきます。自分だけが正義だと思い込む。こういう悪習から速やかに脱却することが必要であろうかと思うんです。

しかしながらなかなか難しいことでありまして、まさに脱却するためにはアジアの道に参ざるべき

だと。これら田中忠男先生の考え方であります。で、こういう意味で東洋思想には本当のゆとりがあると思うんであります。今から20年あまり前には、評論家の草柳大蔵先生が、一燈園と言う宗教団体でお話された、その話を参考までに紹介しておきます。

私はこの草柳先生の著書には大変いろいろと教えられました。どのようなことかと申し上げますと、パリでね、世界情報会議というのがあったわけであります。この情報という言葉はね、研究社の新英和大辞典によりますと、コミュニケーションとかコミュニケイトといって、本来の意味は思想を伝達するとか、生態を授けるという意味。すなわち生態拝受という意味なんでありして、一つの生態に神がいます。その神につながつておる人、同じ神を信仰している人の間に、伝達というものが行われる。これがコミュニケーションという言葉の内容だというのであります。

世界情報会議でアメリカの学者が言いました。我々はいま一つの神を設定して、その神を認めるか認めないかというところから始めなければならない。そして、この一つの神以外のところにいるのは、エクストラコミュニケーション、すなわちこれは蛮族である。したがつてキリスト教の原理を持ってこの蛮族に属する人たちを、コミュニケーションすなわち生態拝受の世界に引き入れなければならない。コミュニケーションっていう言葉の第一義は、この生体拝受ということなんです。

それは一つの神をみんなが仰ぎ見ていることである。一つの神のもとにコミュニケーションが行われるんだ、と言うことをアメリカ側の学者が言ったわけであります。要するにアメリカ側の学者は、神を知らない人は蛮族であつて、教化しなければならないんです。今日の情報工学の基調にあるものは、コミュニケーションであると説いたわけであります。その話が終わりますと、ドイツのヤスバースという哲学者が立

ちあがりまして、「何を言うか、傲慢さも甚だしい」と。かつてアーノルド・トインビーは、「西洋文明は没落する」と言った。

その一番大きな原因とは何か？ それは非寛容の原理だと。キリスト教文明が作った現在の西洋文明の基礎にあるのは、この非寛容であると。すなわち自分の神以外のものを認めないと。そして神を信じないものを強化して自分の中に取り入れている。このようなことをしておると非常にかたい社会になってしまいます。したがって今の西洋文明を壊さないためには、寛容の原理を持ったインド文明を取り入れないとならないと言うのが、このアーノルド・トインビーの文明論であります。

従って、あなた方がエクストラコミュニケーション、すなわち蛮族だと言っておるところのほう、すなわち共通の神をいだかないところの方が、実はコミュニケーションが実際にいいじゃないか。たとえば東洋はどうか。シンガポール、台湾、韓国、日本、言ってみればこれ、みんな儒教文化の国である。儒教文化の国の方が、経済成長率が高いではないか。これに対してキリスト教国はどうか。アメリカやヨーロッパの方が経済成長率が低いではないか。

ところがこのミックスと呼ばれるこれらの国、儒教圏の国々は、いずれも高い成長率を遂げております。何もこの経済性成長率が高いからいいというのではなく、経済成長率が高いということは、社会のコミュニケーションがうまくいっているということで、社会が活性化しているということで、生き生きしているということです。従って停滞抨受などと言って、自分達の考え方しかないと思っていると、ヨーロッパとかアメリカはますます没落していくだろう。このようにヤスパースという哲学者は言ったわけであります。

で、難しい議論は私はよくわかりませんけれども、このヤスパースは、神をいだかない日本という国をよく知っているようであります。日

本をよく勉強しております、「日本には神なぞは存在しないんだ。日本人は結婚するときは神道であって、人が死ぬと仏教になって、12月末になると今度はキリスト教になる。それじゃ日本はアニミズムか精霊信仰か、精霊とは「しようりょう」とも言うんですが、動物、人、無生物などすべてのものに宿つておる超自然的な存在のことあります。こういう精霊信仰かというとアメニズムでもない。要するにいい加減なんだ」と言うんであります。彼はよく知っています、日本のこと。

そしてヤスパースは続けます。「日本をはじめ東南の国は、仁の国である。キリスト教国は神を中心として、聖体抨受によるコミュニケーションということを言っておるけれども、社会が活性化しておる国は、この仁を中心として、コミュニケーションがある」というこういう言い方であります。

「じゃ仁とはいったい何か。書いて字のごとく、人が二人居るということ。二人の人という意味であります。これは具体的にどういうことかと申しますと、Aさんは自分が生きているのは、Bさんのおかげだと考える。Bさんは自分が今日あるのはAさんのおかげだと考える。したがってこの根底には人を許す心があるんです。このようにお互いの存在を支え合っているというこのコミュニケーションが基礎にある、そういう社会が一番強いんだと、いわば神を中心とした聖体抨受におけるコミュニケーション、ロジカルのコミュニケーション論理である。これに対して仁の方はエコロジカルのコミュニケーション。これは生態という意味。すなわち生きていく姿なんだと。ロジカルとエコロジカル、論理のコミュニケーションと生態のコミュニケーション。これから謙虚に、エコロジカルなコミュニケーション、仁の思想によるコミュニケーションを考え直すべきである」とこのヤスパースという哲学者は言い切ったんであります。

私はこの議論は難しくてよく分かりませんけれども、ただこの考え方は、20世紀初頭のロータリーの考え方、すなわちポール・ハリスがロータリーが寛容の中に宿ると説いた考え方を通じるものがあると思うんです。仁っていいうのは東洋の哲理。その核にあるものは寛容であります。聖体拝受は西欧の哲理。キリスト教の哲理であります。その核にあるものは何か、非寛容であります。

先ほど申し上げましたように、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る。したがってロータリーは寛容である、と悟ったポール・ハリスは、自ら敬虔なクリスチヤンでありキリスト教の非寛容の世界に住む人であります。あえて東洋的な哲理を説いたということは驚くべきことなんだと思います。

この意味におきまして偉大な思想家だと私は思います。ポール・ハリス自身は、いみじくも「自分はロータリーをデザインしたもの。すなわち、ロータリーのデザイナーである。デザイナーにすぎない。ロータリーを作りあげたのは、チェスリー・ペリーである」と言って謙遜しておりますけれども、私はポール・ハリスは単なるデザイナーではなくて、正に偉大なる思想のデザイナーではないかと思うであります。

重ねて申し上げます。ロータリーとは寛容であります。親睦も大切だが奉仕も大切。奉仕も大切だけれど、親睦も大切。したがって寛容な心を持つこと、決して自分の考え方を人に押し付けてはならない。人を責めてはならない。人を許す心を持つこと。

このような思考の世界の中にロータリーはある。これがポール・ハリスの奉仕理論であります。そしてこの寛容論は、ロータリー奉仕哲学の中核にある思想であります。これが今まで申し上げて参りました日本語古来の人を許す文化と共通の境地にあるのではないかと私は思うであります。

栗を拾った話から、いろんな発想が浮かびま

してペラペラと喋ってきたわけですが、この話はこれぐらいにしておきまして、皆さん方の議論を待ちたいと思います。誤解のないように。これはあくまでも私が教えられたことの紹介にすぎません。ですから、これなんかも、私自身が開発したものでなく、私がいろいろと影響を受けた結果、ロータリーの世界に引きなおして考えると、こんなことになろうかということを申しあげただけであります。

そこで次に、2つ目の話に移ります。それは「もったいない」という言葉の話であります。で、先日の教育対談。これ、安平先生と石田二郎さんの対談があったんあります。

ここで石田二郎さんは、話の一番最後に、環境活動家の、ケニアのワンドラ・マーテンさんの話をなさいました。どんな話かと言いますと、ワンドラ・マーテンさんが日本で最も印象に残ったのは、京都の清水寺だったと言うんであります。2005年の2月に清水寺を訪れましたときに、森清範貫主から「もったいない」という言葉の意味について教えを受けた。とても貴重な時間を過ごしたと言っておられました。それはどういうことかと言いますと、食べ物を無駄にしない。再利用するということだけではなく、食べ物に感謝することは大事なことであって、それは料理をした人にだけ感謝するんではなく、この料理を作った農民、お百姓さん、あるいは日照をもたらした、太陽の光をもたらした自然、とにかく全てのものに感謝する、ということを説かれております。

一木一草に渡る全てのものに、仏の心が宿るというのと同じことなんでございますが、そういう話を聞いたことは決して忘れない。そこでワンドラ・マーテンさんは、この「もったいない」という言葉を、政治の世界に生かして、「この、『もったいない』と言う言葉を世界の合言葉にしよう」と彼女は断言して日本を去っていったのであります。

しかしこのロータリー運動には、皆さんご存

知のように、政治性はございません。「もったいない」という言葉が、世界の共通語になろうがなるまいが、そんなことはロータリーとは全く関係ないことであります。したがって、私はワンダリン・マーテンさんの話自体には、何の興味も関心もなかったのであります。

ただ私は、この「もったいない」という言葉について以前から気になっていたことが一つありました。今から25～26年前、「もったいない」ということにつきまして、先ほど申し上げました草柳大蔵先生の講演の記録、どっかにあったな、と思って探したらありました。この講演記録の中で大変興味のある記事を見つけたんです。草柳先生が、精神医学の先生に「山下清画伯の絵が、なぜ皆にこんなに感動を与えるのか」と尋ねられたところ、その先生は、「僕のやった西洋医学でもわからなかつた。結局、僕は山下君のために宗教とか、東洋哲学まで勉強せざるを得なかつた」と言うのであります。

「その結果、何が分かったんですか?」と言うと、「山下くんという人はね、おそらくもったいを大切にした人だ」ということなんですね。山下画伯は、IQが確か70しかなかった。日本人の平均は111でありますからね、山下さんはご不便なさったと思います。生活しても人によく笑われることもあったんですねが、しかしその知能指数の低い山下画伯、もったいを大切にした人であろう、と精神医学の先生がおっしゃった。しかし、日常の言葉で「もったいない」とか「もったいぶつた」とか言う言い方をします。それから「もったいつけて」とか「もったいぶる」って言い方は言いますけれど、「もったいを大切に」という言い方はございません。

みなさんご存知の通り、我々、「もったいを大切に」なんて言葉は使いません。そこで不思議に思って、京都の大徳寺のお茶会で、そのことをご老師にお話しなさったそうです。そうするとこの老師の手がふと止まりまして、「そ

れ、どっかで読んだ記憶があるよ。探して進ぜよう」と言ってくださって、3カ月ぐらいして盤珪禪師の法話集を送ってくださったそうですね。その中に、「人々みな母親の生みつたるもったい、不詳の物心を大切にしそうらえば、そのままにして仏にて候」こういう言葉であります。「もったいない」とか「もったいぶる」ではなくて、「もったい」そのものの概念がピシッとここで出てきているわけであります。ちなみに広辞苑で「もったい」という言葉を引いてみると、「重々しい様」とか、「物々しい様」とか、淨瑠璃にある言葉であります。

「もったい」そのものの概念を詳しく説明はなされていません。この盤珪禪師とはどう人かと言いますと、8代将吉宗の頃の人であります、全くの無学文盲であります。自分で悟りを開いた、素晴らしい偉い人であります。寺子屋で勉強した子供は自分の寺に入れなかつたそうですね。なぜかと言いますと、寺子屋で勉強したとか、そういう、さかしら事の勉強をしたものは、仏の道を説いてもダメだと言うであります。どんな人に仏の道を説いたかと言うと、八ちゃんや熊さん、当時のまさに無学文盲の自分の名も書けないような人たちだけを集めて、仏の道を説いた。

なぜかと言いますと、そういう人たちは心で話を聞くから分かるんだと、寺子屋の出身者はね、頭で聞くからダメなんだと。無学文盲だけ集めなければならない。こういうことだったようであります。実は、八ちゃんや熊さん、文字を全く知らないにもかかわらずですね、今申し上げた難しい言葉、「もったい」という言葉が通じておるということは、その当時は、「もったい」という言葉は、少なくとも8代将吉宗の頃は一般世間の通用語であったということであります。「もったいを大切に」とか、「お前のもったいはいったい何か?」と言うように、おそらく日常の会話で使われておった、会話の中にしっかりはめ込まれておった時代があった、こう

いうことだと思います。ところがいつしか、この「もったい」そのものの概念が消えてしまいまして、「もったいない」とか「もったいつける」そういう言葉になってしまった。これいつからか分からぬと言うのが草柳先生の解説であります。この話は大変示唆に富むものだと思うんです。

お母さんが赤ちゃんにおっぱいを飲ませております。すると赤ちゃんが乳首からパッと口を離すときがあります。小児科の先生も、一般的私たちも、それは赤ちゃんがお腹が一杯になったから離すんだと、そういうふうに思つたんですが、実はそうじゃないよ。母乳を取って分析してみたところが、母乳はPH7.4、アルカリ・酸性の度合ですね。7.4になったときに、赤ちゃんは飲んでおった乳首をパッと離して飲むのをやめるというんです。

PHは7が基準であります。上がアルカリ、下が酸性であります。7.4という水準は何を意味するかと言いますと、これは私たち人間の細胞にとって最適な値なんあります。細胞が目覚めましてね、一番気持ちよく働いている時、人間の細胞がいちばん生き生きしているときが7.4でありますその時に赤ちゃんは、お母さんのおっぱいを飲んでおって、一番いい情報が来たということになって、乳首から口を離す。体がふわっといい気持ちになって、それで満腹すると、もう30秒ぐらいして寝てしまう。足の裏まで満足しているわけであります。

ところが人工栄養・ミルクの場合は、非常によく出来ている。栄養的には文句はないんですけど、やはり作るときに濃い、薄いの差が出来ます。なかなか7.4にはならない。そういうことから、人工栄養で育った子供は、いつまでたっても満腹感、満足感が得られないですから、どんどん飲み続ける。飲みすぎて結局、肥満児が出来てしまう。母乳だけで育った赤ちゃんは、そのように満足度、アルカリ度が7.4になったときにはそれ以上飲まない。そして満足

して寝てしまう。そういう状態がありますね。精神科の先生も、アルカリ度が酸性とアルカリ性に調和した状態、それが赤ちゃんがおっぱいをパッと離す時だと。それは実は「もったい」の出来た時だと言っておられるであります。

そしてこの「もったい」をですね、私たちはロータリーの世界にどのように理解すべきか、私はそのもったいというのは、先ほど来申し上げておりますポール・ハリスがね、ロータリーは親睦と奉仕の調和、その中に宿る、この調和を自覚したとき、ロータリーの思想の原点、それがロータリーの「もったい」であると思ったわけであります。

赤ちゃんのおっぱいが酸性とアルカリ性を調和したとき、それがこのもったいだとすれば、ロータリーのもったいっていうのは親睦と奉仕とが調和したとき、それがロータリーのもったいだと、このように理解をしているわけであります。従って私たちは、今や、奉仕哲学の原点、すなわち寛容の心にたちかえらなければならぬと思うであります。

以上、今日の話の冒頭で申し上げました1923年度のRIの会長・ガイ・ガンディーが「ロータリアンは思索する人でならなければならない」と言うことについて、この石門心学で聞いた話、栗を拾う話と「もったいない」という話、そのことからいろいろと私なりのくだらない思索を展開したわけであります。誤解を受けるかもしれません、悪いところがあったらまたご指摘をいただきたいと思いますし、すべて私の話はロータリーというものをわかりやすく考え方直す、その材料としていろんなことを例会とか地区大会とか、IMとかライラで学びとて、それを喋っているだけで、私自身のものは先ほど申し上げましたが、何もないということも申し上げて今日の話を終わりたいと思います。ご静聴有難うございました。(拍手)

○司会・日野 何かご質問あったら何なりと。場合によったら、このあとフォーラムでやっていただいて結構です。

深川先生、どうもありがとうございました。どうも私も頭の中で理屈ばっかり考えてやっているんで、どうも今日の話は私にとってはもったいない話ではなかったかな、と思いますが、皆さんいかがでしたか？ 「もったいがあるような」そういうロータリアンになりたいと思います。

今日は本当にご苦労様でした。今からキャビンにお帰りになって、ゆっくりとくつろいでください。三木先生からお話をあります。

○三木 失礼します。伊丹ロータリークラブの2年ほど前の50周年でしたかね。永遠の課題、職業倫理という記念誌が出ております。それは深川先生のお話になりました、いろいろと原稿と、西の深川、東の佐藤と言われる、佐藤千壽先生との往復書簡とかが入っております。これは本当に珠玉の名著でございます。今日8冊だけ持ってきておりますので、特に、2670地区、四国の皆さん方にお渡したいと思います。兵庫県の方はまた機会がいくらもありますので。

冊数が少ないので、もしお入用であれば、のちほど私に言っていただければお送りします。「アホウドリよちよち歩く」という私どもの地区的、佐伯亀次郎さん、この方は368地区でしたから、四国と兵庫が同じ地区であった時の名パストガバナーであります。東洋哲学をロータリーに持ち込んだすばらしいロータリアンでありまして、ガバナーアードにいろいろ書き留められたことを1冊の本にまとめられました。これは昭和33年、34年ごろに書かれた本ですけども。この方の本を持ってきました。これは絶版になりますて10年ほど前に、姫路ロータリークラブで再版しました。ちょうど私が50周年の会長をしましたときに復刻版を作りました、形も製本も何もかも全て当時のままに再現しまして作り

ました。これも素晴らしい書籍でございますので、特に四国の皆さん方にお持ち帰りいただきたいと思って、持ってまいりました。先着8名様でございます。後は厳正なる阿弥陀くじでお届けしたいと思います。

ここに深川先生が各地でお話になった原稿がございます。これも8種類、つい先日の嵯峨野IMでやったりとか、尾道の合同例会であったりとか、曾根崎ロータリークラブの卓話であったりとか、佐藤千壽先生の「他人の金で奉仕をする虚構」なかなかの素晴らしいものです。「我が理想のロータリアン」これは私ども地区の先輩ロータリアンのこともあり書いてありますので、面白い読み物でありますし、「すべての人の幸せを祈る気持ち」これは先生、どこでお話したのですか？ 会長だよりでお話したのですか？ ご本人もあまり覚えてられないんですが、京都でお話しになった「ロータリアンは新生代をいかに育てるか」、全日本ライラのワークショップの、これは10年ほど前ですが、基調講演、「人を育てる」それから伊丹ロータリークラブのセミナーで「不況におけるロータリー」。

こんな原稿がありますので、私が全部原本を持っておりますので、一番上の表紙の部分にお名前を書いていただけましたら、コピーしてお送りいたします。ぜひ今日、明日、明後日中にお書きいただければ。そんなことでぜひお持ち帰りいただきたいと思います。全てこれは無料でございますので。これ、私が頂いたから、お金もらうと変なことになります。これでお金儲けをしてはいけないという、是非、私たちはこういう書籍を紐解きながら、ロータリーの心を学びたいと思いますので、お読みいただければありがたいと思います。是非よろしくお願ひします。

それから深川先生が講演を各地でなさっていますので、もし四国の方でご講演なさるときには私を通じていただければ早くなります。個別

にお尋ねになられたら時間がかかりますので、  
私に言っていただけましたら、すぐに私の深川  
を差し向けてますので、よろしくお願ひします。  
(笑) 失礼しました。



## カンボジアにおける 住民参加型地雷処理活動

高山 良二 氏

NPO法人日本地雷処理を支援する会  
(JMASジェーマス) 地雷処理専門家



■出身地 愛媛県宇和島市三間町

■現住所 伊予郡砥部町高尾田 1191-87

■自衛官として36年間勤務し、その間施設科部隊（地雷等に携わる部隊）で訓練する。

■1992-93、自衛官として「カンボジアPKO」に参加、以降カンボジアに特別な思いを抱く。

■2002年5月、定年退官と同時に「日本地雷処理を支援する会（JMAS ジェーマス）」に参加、理事。カンボジア現地副代表として現地での不発弾処理活動の立上げを行う。

■2004年9月、帰国愛媛でJMASの広報活動を行いながら地雷処理事業の立上げを準備する。

■2006年2月、カンボジアに再入国し地雷処理事業の立上げのための調査・現状把握を行う。

■2006年6月、「住民参加型地雷処理活動」を同国バッタンバン州で開始する。現在、住民100名と共に地雷除去に従事しながら学校建設、井戸掘り、道路建設など村の復興支援活動に携わっている。4～6ヶ月に1回一時帰国し、自分が何ができるか、何が幸せなのか講演などを通してカンボジアの現状を日本の皆様にお伝えしている。

○司会・日野 高山さんのプロフィールのご紹介を篠原さんがやってくれます。篠原さんは高山さんを紹介して下さったお一人です。どうぞ。

○篠原 皆さんおはようございます。

今日の講師の先生のご紹介を時間つなぎでさせて頂きたいと思います。高山良二先生ですが、地雷処理、爆発物の処理技術を自衛隊の時代に身に付けて、現在カンボジアで地雷処理の仕事をされているのが本業であります。

しかし、私は何をやっている職業かと言いますと、お酒や焼酎などアルコール飲料を作っている商売をやっているわけであります。地雷処理をした後の畑で、このタムロンという芋、キヤッサバーという芋を作っているんです。

タイとの国境の町ですので、タイの方へ全部安く買われて、作ったのがお金にならない。これを何とかしたいと言う事で、焼酎造りを考え

られました。もともとカンボジアでは米の焼酎を作っていました。菌はどういう菌を使っておるかというと、中国系の菌でありますのでクモノスカビという菌でありますが、これを使って作っています。

暖かいところで出来る菌でありますけれども、それを日本の泡盛を作る菌を持って行って、本当はなかなか中に入れないのが普通なんですが、こういう仕事をしているので、高山さんはずっと入れるそうでありますので、日本だったらなかなか外国から菌を持って入れないんですけども。そういう菌を持って行って、現地のやり方でその菌を使って焼酎が出来ないかという事で、ご協力を申しあげておるということです。

高山さんに共感したのはどういうことかと言いますと、高山さん自身は地雷処理をするのが仕事なんですけれども、地雷処理も自分たちだけでやるんではなく、現地の人を教育してや

る。そして現地の人、スタッフを勉強させる。そしてその人たちの生活向上の為に井戸を掘ったり、学校を建てたり、いろんな事を皆さんのが状態でやっておる。その町を自立さそうと、地雷処理が終わった後、自立してその地域が良くなるようなことはどのようなことをしたいのかと考えてやっているというのに共感して、ご協力を申しあげておるということです。

プロフィールについてはワークブックに書いてありますので読んで頂けたらそれでいいと思います。電源も入ったようですので先生に講義を申し上げたいと思います。以上です。(拍手)

○高山 アロンソウスダイ。カンボジア語でおはようございます、と言ったのですが。おはようございます。

昨夜は眠り薬を許可されておりましたので、どうですか? 先ほど食事のときに、朝ご飯の時に、2時前とか1時前とか言われておりましたが、どうぞもうお休みになる方は遠慮なく、頭を下に向けてください。

今お話をありがとうございましたが、今月の17日に成田に帰りました。私は年に3回だけ日本に帰って、後は殆んど、12カ月のうちの10カ月はカンボジアですね。日本には2カ月を3回位に分けて、ですから20日ぐらいですか、1回につきですね。20日以上おりますと女房に鬱陶しがられますので退散をするようにしています。

4000キロ離れているのがちょうど夫婦のバランスがよくてですね、それ以上近付きますと、非常に恐くなりますので。日本に帰ってもおかげで家にいなくて。今日もこれが終わったら岡山の方で講演がありまして、今日はありがたいかな、ダブルヘッダーでやらせていただきます。

なかなかですね。情報を皆さんにお伝えするのは1時間2時間の講演だとか、テレビ、新聞、いろんなメディアも協力していただいて、ドキュメントを作っていただいたりしました。しかし、今年初めてですね、本という物がすごいな

と思ったのは。今回いろんな方から頼まれて本を出せということで、簡単に引き受けて「作文だったら何とか書けるかな」と思ってやったんですが、東京の筑摩書房さんから言われまして、最後の詰めが本当に大変だなあと思いました。「てにをは」だとか、いろいろチェックされて、なかなかOKが出なくてですね。やっと出来まして、今月東京では8日位に、地方では10日過ぎに出ました。

最初に忘れたらいけませんので、自分の本を宣伝するのは恥ずかしいのですが、タイトルは「地雷処理という仕事」。筑摩プリモ新書ということで書いてあります。「カンボジアの村の復興期」という副タイトルで出ていました。

今日カバン一つで来ましたので、たくさん持って来られなくて、本屋さんに行ってください。全国で8,000部創刊されたそうです。全部売れましたら、次も刷っていただこうかなと思います。最初に紹介だけさせて頂きます。

カンボジアでずっとやっているんですが、今日は住民参加型の地雷処理事業ということで、その現状についてご紹介するということで、それで1番最初にビデオを見てもらおうかなと思います。

これは、テレビ愛媛さんが作っていただいたビデオなんですが、それを先ず見て頂こうと思います

## (ビデオ放映)

### 「テレビ愛媛のスーパーニュース」

高山さんは、NPO日本地雷処理を支援する会の専門家として、タサエンで活動しています。現地で進められてさまざまな復興支援の様子です。地雷処理の現場で、住民自らが訓練を受け地域の安全に向け活動をしています。カンボジアの首都・プノンペンから10時間。タイとの国境に位置するタサエンは、1990年代までカンボジア内戦で、ポル・ポト派とベトナム軍が激しい戦闘を展開。大量の地雷が埋まっています。



地雷探知棒で慎重に地雷を探知するデマイナー



戦場の跡が生々しい地雷原で残留物を確認しています  
(これは政府軍が使ったやじりで敵の足を負傷させるもの)  
私も一度踏んで怪我をしました



地雷原の村のちびっ子たちと過ごす時間は最高に楽しい

タサエンの地雷処理には訓練を受けた住民も参加。地域の復興は地元の人たちが中心となって進めるべきと考える、高山さんが導入した世界で初めての試みです。デマイナーと呼ばれる総勢100人のスタッフを指導しながら、安全に作業を進めるのが高山さんの役割です。

どこにいくつ埋まっているか分からない地雷原。生い茂る木や草を取り除きながら、金属探知機で反応を確かめます。金属反応があれば、尊重に土を払いのけ、掘り出していきます。地雷には1キロの重みがかっただけで爆発するものもあり、まさに命がけの作業です。

破片なども多く残っているため、わずか40センチ進むのに1時間かかることもあります。この日、発見できた地雷は5個。どれだけ時間がかかっても、1個たりとも見逃さないことが重要です。

素人を指導しながら、復興にむけて進む地雷処理。7人のデマイナーを事故で失うというつらいこともありました。「無念さもありますが、供養のためにもこの地雷処理は続けていかないと…」畑も広がり、安全な場所には学校も建てられています。

カンボジア全土にはまだ400万個から600万個の地雷が埋められていると言われています。全てを無くすには長い年月がかかります。タサエンの人たちと、高山さんのひたむきな思いが広がっていくといいですね。日本からの支援が更に広がっていくことを願います。

○高山 ビデオを見ていただきましたが、写真を見ていただきながらお話をしようと思います。テレビの方でも伝えてもらいました様に、住民が途上国の発展とか支援とかに関わる上で一番皆さんが悩んでいるのは、先ほど出ましたように、住民を外に置いてしまいますと、住民の自分たちでやらなければならないという気が薄れて、かえって、ほどこしになってしまいます。住民自らが自分の村を何とかしようという気持



隊員に教えながら安全に作業する



子供たちが牛と戯れても牛は決して嫌がりません



ちが薄れてしまうという事が一番問題になると  
思いましたので、全部住民にやってもらうと。  
それに出来ない所を我々が若干手助けをする  
という発想に切り替えてやっております。

なぜカンボジアに行ったのとよく聞かれます。大きく二つ理由がありまして、一つは1992年から93年にかけまして、日本で初めての試みであった、これも国会で国論を2分するぐらい大きな議論になって、全部が一致しないまま出してしまったカンボジアPKOというのがあります。これの一陣で行ったのがカンボジアとの出会いですね。それから10年後なんですが定年退官しました。自衛隊の場合は早くて54歳の誕生日、55歳の誕生日、56歳の誕生日。この辺で皆さん退官されます。私は55歳の誕生日で退官しました。

定年になったら十分な仕事ができなかったという思いもありましたので、カンボジアに行こうと決心しておりました。それで自衛隊時代には地雷だとか道路柱だとか、そういう軍事建設ですね、地雷も含めてそういうことをやっておりましたものですから、もう二つが重なりましてカンボジアへすんなりと行ったということですね。もちろん女房だとか周囲からは反対されました。55歳ですから、それ以降は給料が出ませんので。

カンボジアの歴史なんですが、皆さんご存知だと思いますが、非常に複雑ですよね。日本もある意味、複雑でしたが。13世紀のアンコール王朝というのがありましたね。550年続いたわけですね。本当にすごいことだと思います。江戸時代よりもっともっと続いたわけですね。

14世紀頃になりますと、ベトナムとタイに挟みこまれるわけですね。それで、フランスに保護領を求めるわけですが、ベトナムとタイの話し合いで、メコン川を国境にしょうじゃないか、と言われたそうです。そうすると、カンボジアは消えて無くなるわけですよ。ベトナムがメコン川まで。それじ

やカンボジアはなくなるわけですね。脅威を感じられてフランスに、助けて…と言うことになった。それから約100年間、フランスの保護下に置かれておかれたわけです。

最初は保護領ですけれども、そのうち植民地化になってしまって。カンボジアの人が怒ったわけです。1953年に独立するわけですが、その間ですね、シアヌーク国王は18歳のときに即位されまして、ベトナムに留学されているときにフランスのもくろみで、お父さんが王様だったのですが。フランスの都合がいいと言うことで、このシアヌーク国王を18歳のときに国王にした。ところがシアヌーク国王はたいへんやり手ですので、そうはいかなかったということですね。アメリカ、中国、ベトナムなどいろいろ翻弄されていくわけです。

1982年、三派連合と呼んでいましたが、シアヌーク派、ポル・ポト派、ソン・サン派が三派連合。最終的には、タイの国境の難民キャンプの方で政府を作るわけですが。ベトナム軍を援軍とした政府軍が、ポル・ポト軍を追い詰めていく。で、今、私が活動していますのは、その最終で一番戦闘が激しかった地域ですね。

そこはジャングルだったんですが、タイの方に逃げて、よしんばチャンスがあったらゲリラ的に攻撃して、また逃げて、それをずっと繰り返していた人たちですよ、村人は。平和になってやっと戻って村を作ったのが、私が今いますタサエンの地域ですね。100%クメール・ルージュの方たちですね。

クメール・ルージュって言ったら、「世界でも身の毛のよだつ」という感覚があるんですが。私も日本の本を読んで、そういう感覚を情報として持っていました。しかし、4年もそこに住んでいましたら、どう考えてもそういう人たちじゃなくって、非常にカンボジア人全体の付き合いの中でもクメール・ルージュの人たちとの付き合いが一番楽ですね。

純粋なことと、それから裏がないこと、非常

に頭のいい人たちが多いです。過ごしやすいです。情報って言うのは、一方的に見ても正しい情報にはならない。逆に情報をたくさん集めた中で、分析して、真実が何かということを探らないと、本当の情報が入らない、ということが言えると思います。

日本の国民の特性っていうのは、人がいいので、テレビ、新聞、大学の先生が言ったじゃないの、本にあったじゃないの、ということで、情報を鵜呑みにして自分の状況判断にするので、えらい間違いがあったりなんかするということです。私は決して情報を鵜呑みにしてもらいたくないな、と。オレオレ詐欺にも引っかかるってもらいたくないな、と思います。情報は一応参考にして、自分の目で確かめて、真実というのがほっと見えてくると思います。そういう情報の取り方が1番いいのかなと…。

91年にパリ和平協定がありました。PKOというのをやろうとなつて、93年に1回目の選挙、2回目、3回目、この間が4回目ですかね。そんなことがカンボジアの歴史ですね。

向こうに行きました、長官、シーマックと言いますが、カンボジアマイアクションセンター、だいたい2300名体制で今やっているそこの長官ですが、話し合いをして、支援のあり方だととか何が必要だとかいうのを調整したりしました。地元の規模だとか現状の調査をいたしました。この29日に愛媛にみえます。愛媛とバッタンバン州の姉妹都市の実現に向けた構想のために来られます。

村のコミューンっていうのは日本の自治体にはないので。自治能力があるのはコミューンから上です。集会所みたいなところはあるんですが、日本でいう役場ですが。常駐員はありません。村があります、ビレッジが。村が5、6個集まって一つのコミューン。コミューンが6つぐらい集まって、ディスウイーク、郡ですね。郡までは建物はありますが常駐はありません。常駐があるのは次のプロビンス、県ですね。向こ



地雷原で休憩中



休憩中の女性デマイナーはみんな明るい



サマキ村はタサエン地区で最も僻地にある村です。  
みんな大喜びです



カンボジアの厳しい炎天下で黙々と地雷探知作業をする若い女性探知員（04小隊）

うでいう州ですね。それとガバメント。州以上が常駐で自治をやっていますね。村は、自治能力は全然なしです。村長さんがいるだけと。

カンボジアをおさらいしますと、インドシナ半島の日本の半分ぐらいの土地です。隣国としてタイとベトナムがあります。国境線はこのようになっていまして、アンコールワットよりも古いと言われている遺跡があります。それが世界遺産に一昨年認定されましたので、それでまたタイも欲しいという色気が出て、今、国境問題になっています。世界遺産にならなきゃよかったですのになあ…と、個人的には思いましたけど。私のいるのはこちらですので、国境ということでは変わりないんですが、極度の緊張はあります。

私は2003年くらいまで不発弾の処理をやっていたんですが、今は自分のテリトリーの地雷の処理をやっています。プノンペンから私の活動地の国境まで行くには車で約10時間かかります。バンコクから行きますと、舗装道だけで5時間で来られます。現地に行ってみたいなといわれる方もいらっしゃるかもしれませんので、あとで行き方を教えますので。

去年から機械処理班が入りました。私は手作業で。小隊約100名でやっています。機械処理班は、40数名で機械処理機とともにやっています。これは小松さんが支援してくれています。ベトナム戦争の影響が不発弾の影響ですね。内戦の影響で400万個とか600万個とか言われています。住民をリクルートしまして、小隊を編成しました。33名おります。3つの小隊で99名です。

(休憩)

井戸なんですが、これはハッピーな映像なんですが、こればかりではありません。もう井戸はいい…と。それよりもとにかく、直すことを教えたい。痛んだら直す。直すための部品を事前にみんなで買っておくとか。そういうソフト

の部分を今からはお願いしていく時期かな？と。井戸をくれんかいなーという気持ちではないんです。事実を言っております。井戸を増やすのはそろそろこの辺でおいといて、中身を皆さんにアップしてもらいたいというのが本音です。

この井戸、2001年の4月の26日に出来たと。おばさんに聞いたら2年間も使っていません、と言うことで、皆さんに集まってもらって、それから一生懸命に説くわけですよ「日本の方も泣いていますよ。お金持ちはばっかりがやったわけではありません」って。おばさんは物分りのいい人で、「みんなで相談して、使えるようにいたします」ということで、5軒が8ドル出して、40ドルのポンプを買って、今は使っています。

そのときに思ったのは、作ろうというパワーだとあるわけですね。でもその担当者がいなくなったら、もうほったらかし。非常に腹立たしいんですよ。そういうモニターもしない。現状把握もしない。ただやっただけ。仕事なんですよ。そこに心が入っていないんですよ。それが非常に頭にきて、「誰の責任じゃ」と言うことで、あるテレビでカンカンになって怒ったんです。放映されてないけど、考えたら腹立たしい。そういうものではないでしょうというのが、私の心境です。

で、Mr.ボンメイという私と同じ年の男に掘らしてました。69基まで。あるときボンメイがぐじゃぐじゃ言うし、私も頭にきて、ボンメイと仕事するのは嫌だと思って、それで、もう村でやらそうと。村の職員で、村人の自覚でやらせると。150万円ほど見積もったらしいんですが、本格的なボーリング機械は1千万円からするわけです。いれいでやったら、何とか150万円くらいでと言うから、タイの向こうに行って、ボーリング機械の上部機械だけタイの業者に作らせて。下の自動車はカンボジア人に作らせたんです。

2つ合わせて150万円。結果的にはタイの連中

が素堀りするときに成功しなかったので、30万円くらい私が値切ってですね、結果的には120万円でゲットして、30万円は開発費に充てたんですが、こういうことで、コムユーンの自前で掘らすことに、今はしています。財源がないので、日本人の人からお金をもらってそれを給与に当たり直したり燃料だとか、セメントだとか、いろんなことに使っています。

残った分についてはプールしといて、傷んだときに使うわけです。それをやることで人の管理、職員の管理だとか、運営の管理だとか、ようするに管理の部分で、コムユーンが勉強になるわけです。これが良いなあ、と私もすべて思いつきでやるわけですが。カンボジアの方は、管理にきわめて弱いですね。これとの闘いだあ、と言うくらい。支援をしても管理のソフトを教えなければ、何をやっているか分からないんです。一番大事なのは管理というものを教えていくことが、それにブチ当たるわけです。本にも書いてませんし、現場で教えてもらっていくわけです。これで練習させると、他のこと、村の管理もできて、発展していくわけです。

篠原さんに焼酎作りも教えてもらって成功したわけですが。途上国の中は、先進国とある程度、似たり寄ったりのことはするんです。この井戸掘り機械もそうでした。酒作りも井戸掘りも全くの素人。のりかかるわけで、自分で勉強しなきゃいかん。日本のボーリングの会社に行って、それを持って帰るわけです。その時に思ったのは、どうしても先端が折れたりするわけですよ、掘っていくと。それで、どうしたら良いのかな？ と。

すると回転方向のこの角度が逆なんです。全く考え方方が反対なんです。それでも切れるんです。逃げ角を作っているので、もげない、壊れない。私は、これを見て、うわあーと思いました。これを持って帰ってカンボジア人に説明して。ところがそれから一苦労なんです。素直に「はい」と言わないんです。もう頑固なん



CMAC のスタッフと発見された地雷を確認する



地雷原でカンボジア人スタッフと打ち合わせ中



対戦車地雷

す、「違う」って。

「あなた達より、日本はトンネル掘るなど、トップクラスをいっているんだよ。そこから教えてもらったんだから、私の言うこと聞け」って。「いいや、違う」って。それからまた始まるんです。すったもんだしてですね。どうにもならんと思っていたら、私の言ったことを実行するわけですね。上手くいくわけですよ。「いったやろ」って言ったら、黙っているんです。

焼酎もそうでした。カンボジアは芋は誰も気がつかなくって、米で焼酎をやっていたんです。飲んでいて、頭が痛くなるんです、すぐに。「頭が痛いんだ」と言うことで、日本の趣を持って帰って、それでやったら頭が痛くない。それが出来て。ことあるごとにそうなんです。最後の決め手、日本の知恵、最後の先進国の知恵が入ってないので、それを入れる人、派遣する人がいれば、解決するんですが、ほとんどそれがなかなかできないですね。

水引というのをご存知ですか？ お悔やみとか、お祝いを入れて持っていく袋ね。あれは15～17年前は日本の技術だったんです。ところが、だんだん高度成長で、日本人の人工費が高くなつて、みんな中国の企業の方に行つたんです。日本の技術はゼロになった。日本でこれ作る人、一人もいません。今、中国にこの技術があります。中国も人工費が上がってきた。日本の企業も「これはいかん」ということで逃げる算段をしています。その中の一つの企業が、四国中央市の企業の方で、たまたま私のテレビを見て来てくださいました。それでタサエンで会社を作ることになって。今、100名体制で、中国人を呼んで教えてもらって、一期生がある程度できるようになって、二期三期で。大きな建屋も作って会社になりました。

村民の職業というのは農業一つしかないんです。ひたすら畑に行って、賃雇い。1日1ドル。今はちょっと高くなつて、2.5ドルくらいに増えました。それは年間通じてずっとあるわけじ

やないです。忙しい時だけですから。

これは、給料制の歩合制ですので、能力が高い人はたくさんもらえる。最低賃金は月に40ドル。この土地を貸すときにも、村の人は「わからん」って。日本人は買えないから借りる。20年間借りようという会社の方針になって。「1ヘクタールで1年間でどれだけの収益があるんですか?」って言ったら、「2000ドルです」って。20年間借りて4万ドルで契約して、サインして、借りることになりました。100名ほど入る建屋のイメージは学校で、それが500万円だから、5万ドルでしょう、って契約が5万ドルになったんです。とにかく、分からぬけれども決めていかないといけないですね。責任がどうのこうの…と言われては一步も進まないわけです。

今度は焼酎作りになるんですが、これは、おばさんがやっていたんですよ。買って飲んでいたんです。唯一の社員一号です。その人が米を作っていたんです。その技術と、日本の技術と麹と、それをミックスしてタムリンというここで取れる芋と、トータル的にやろうということで、これが出来たんですけども。

壺もですね、コンポンチナムというところで、日本人が少し教えた焼物屋があって、お願ひしたんですが、四合入りを50個お願ひしたんです。漏らなかつたのが20個なんです。あと30個漏るんです。それがカンボジアの一番レベルの高い焼物の水準なんです。それで「これはいかんだろう」と。それで、私は愛媛の砥部焼きの町・砥部町に住んでおりますので、その技術を…と若干思っているんですが、まだそこまでいっておりません。将来はそういうふうに。

篠原社長さんに持つて帰つて見てもらうわけですが。社長の首が固まるわけです。何回も持つていつて、帰つてで、私もモチベーションが下がつてですね。やる気なくなつたんです。

あるとき行つたら篠原さんが、「麹を持って帰る?」と言われて、白麹と黒麹をもらつたんですね。それを持ち帰つて、おばさんに「これ

でやってみんかい?」と言って作らせたんですね。そして、また篠原さんとこに持つて帰つて。そしたらですね、「うん、これじゃ」と言うことで。またやる気が出てきまして、それからずっと作っています

水害の現地視察があつて、知事がたまたま来て、お昼ご飯を食べることになつて、この話をしたら、知事が、「地場産業までもついてもらいたい」というのがあったので、試飲会に壺を12本持つて行つたら、皆さんもう「これはすごい」という話になつて。それからいろんなところで、タイで飲ませたり、試飲会をやりました。

「プロンペンで日本人の一番うるさい人を集めてくれ」ってやつたらですね、「これ高山さん、2回醸造しているんじゃないの?」って。1回しかしてないけど、完全醸造した甘口なんです。香りだとか。度数は37度くらいです。なんとか地場産業まで持つていこうとスタートさせたところなんです。

カンボジアはゴミの国なんです。それを何とかさせたいといらんこと考えてスタートしたんですが。これだけは後悔しています地雷除けるよりも難しいと思っていたんです。カンボジアからゴミ問題を除ける、これは絶対に難しいですね。小学校なんかでも少しずつゴミ箱を置いたりするようになりました。日本語教室の前には、私が来る前に、毎日ゴミを拾つてから日本語の教室を始めています。子供達が学校の近くでゴミ拾いをしています。要するに子供達からやっていくのが1番いいかなと言つことです。

日本の教室ですが、これ最初は200人ぐらい来ていました。今は私のところで20人そこそこです。もう一つで20人、全部で40人ぐらいです。この中の一人を、今回留学で連れてきました。17日に18歳の高校一年生の女の子を連れてきて、青森の高校に預けました。3年間預かってくれることで、校長先生ご夫妻に面倒みてもらつてゐるんですが。校長先生さん宅のおば



2006年6月8日、住民参加型地雷処理活動を開始したタサエコミューンのオ・チヨムロン村の地雷原でタサエコミューン長、ソック・ティウさんと固い握手をする



2006年8月15日、金属反応があったポイントを探知棒で探知するデマイナー



2006年8月24日、活動開始の次の日に大豆畠から04小隊が発見した「72型対人地雷（中国製）」



2006年8月29日、オ・アンロック村の04小隊

あちゃんを含めた3人家族、そこにチェンタが入ってお互いに今パニックですよ。文化とか習慣を教えない。

「この前、電話の声がするから聞いたら、チェンタが私の携帯で話しているんです」と私と話していました。寂しいだろうと、チェンタに携帯電話を渡した、と。チェンタが勝手に私に電話したと。それは向こうの文化なんですね。「一つひとつ教えていってください。これはプライベートのお金でいくら要ったよ」と。「200ドルくらい要ったよ」と。

先ほどの管理ではありませんが、「物には種類が3つある。これは私の物。これはあなたの物。これは公共の物。3つある。しかし、あなたが自由に出来るのはあなたの物だけです。私の物や公共の物は、黙って自由にしてはいけません。公共の物はその責任者に言って、OKが出たら事由に」と言うことを、大学や全てのカンボジア人に説明しないといけません。疲れます。

このときもチェンタはそこにあったので、校長先生の携帯をかけて。この前も、チェンタが「カンボジアの両親にかけたい」と言うので、かけさせたんです永遠にかけるので、冷や冷やしました。それなんかも一つ教えてください。「いくら、お金が要ったんだ。一つひとつ教えてください。それとの闘いですから」と。

話したら非常に聞き分けのいい子なので、理解してくれたということです。そんなもんなんですね、文化の違いだとかは。今から苦戦があると思いますが、3年間学校で面倒みてもらいます。そういうのが私は、生きた交流だと思いますね。国際理解なんか簡単には出来ないです。

地雷原が無くなったあと、大豆なんか植えて、こういうのを見ると安心できますが。地雷原の中で種まきしていますからね。

これ私のお部屋です。マラリアとか、テング熱は蚊でやられます。マラリアではやられていませんが、テング熱ではやられました1回くら

いは経験した方がいいかな、とは思っていますが、2度とテング熱は経験したくないです。あんないやらしい病気はないなあ、と。

ペットで飼っているわけではないですが、ポッキーって名前なんです。ヤモリみたいな30cmくらいあるんです。大きな声で鳴きます。

ここに、唯一、私の部屋に来た人がおられます。谷口さんって言われます。愛媛大学の3回生の時に愛媛大学において講演をしたんです。300人以上の方が来られましたが、その第一号なんです。2006年8月23日に実際にトレーニングセンターから連れて帰ってきて、地雷原に出すその日に立ちあわれたんですよね。

果物ですが、今はマンゴーです。日本人は黄色い美味しいのを食べたいですが、カンボジア人は青いのに塩をつけて食べるのが普通なんです。

黄色いのを食べるカンボジア人は見たことありません。パパイヤは青いのは野菜として食べます。ドリアンは臭いから駄目だと言われるんですが、カンボジアのドリアンは美味しいですよ。本当に神様が作った最高の果物ですね。ジャックフルーツは年がら年中食べられます。

ドライバーと通訳ですが右側の通訳は、1月1日で私から離しました。「焼酎を作れ」って。ジェーマスを首にして、焼酎のジェネラル・マネージャにして、新しく子は非常に能力の高い子です。ところが日本に連れて帰ってきて、私の家に行ったら、玄関から裸足でダートと行くんです。そのまま上がるでの、女房はそれを見て、カンカンに怒っていますよ。

「日本はちゃんと靴を履いて出て、脱いで上がるんよ。裸足は日本の習慣じゃない」と。トイレに入ったら閉める。出たら戸を開けて出るんですね。女房が「日本のトイレはちゃんと終わったら戸を閉めるんよ」って言ったら、「開けとる方が、誰が入ってるのか、分かるのに。いいでしょ」と。これも言い訳しているんですね。私はちょうど中間で、どちらの文化も、カ

ンボジア系日本人ですので。二人がパニックなったんです。味噌汁が嫌いなんですよ。女房も徹底して、最後まで味噌汁を出していましたね「そんなん、虐待じゃないか」って言ったんですよ。

これは、ちょうど6月に満開になる、火炎樹(かえんじゅ)っていう花です。今回は桜の時期に帰りましたが、これを見て桜を見たような感じでいます。

プロのカメラマンはたくさん来ます。でもがっかりして帰ります。

戦地を想像して、しょぼくれている写真を想像してくるんです。ところが村の人たちは、ハッピーハッピーな顔しているので全然イメージが合わなくて、お金にならないのでがっかりして帰りますが。

みなさん行かれたことがあると思うますが、アンコールワットですね。文化ですが、こうして托鉢にきたお坊さんに、子供のときから膝まづいて。2部制ですので、午前中と午後と分かれていますので、我々にとっては1日中、子供たちがおるという環境です。村に行ったら子供から逃れることは、まず不可能です。

継承はター、ターって呼ぶんです。敬称で呼ぶんですが、下からポン、オン、パー、ター。日本語に訳しますとポンはお兄さん。パーとターはおじさん。ターっていうのはおじいさん。「私は違う。ターと呼ぶな。ポンと呼べ」って言っていますね。今は諦めています。

これは、子供がたくさんいて、真ん中に牛がいるんです。牛も同化しているでしょ。牛も家族なんですね。こういうのが村の実情です。

この方が「戦争がない今は幸せ」って書いたんです。活動の初め頃なんですが、非常にこやかな顔をされたので、質問したんです。非常に意味が深いな、と思ってですね。この人は非常に小さい時に、ポル・ポトの時代を送っていますね、お父さん、お母さんに手を引かれて逃げまとった経験を持っている。自分が大きくな



PMN (USSR)、112mm、57mm、240gTNT、600g



オ・アンロック村の地雷原で休憩するデマイナー。こんな時は一人の村の娘さんに帰ります。33名のグループが現在は3グループ、99名が活動しています



カンボジア語でダムロンミー（英語名でキャサバ）という芋。「大きいだろう…」と村人が胸を張ります。この方は地主ですがほとんどの村民は自分の土地を持っていないため地主の畑で働かせてもらい賃金を貰って生活しています。一日働いて7000リエル（約200円）



# 5CBD 小隊（未着 3 名）

って、結婚して今は幸せだ、という。

悲しい顔をしている人は見たことないですね。今は戦争で逃げまとわんでいい、なんとかご御飯を三食食べられる、家族と一緒にいられる、たったこれだけの要素が最高の幸せなんですね。その時、思ったんですが、この写真が非常に印象に残った写真で、紹介しました。

日本語教室が6時頃に終わって、宿舎に帰るときに、タイの国境に沈む夕日を見ながら、よかったですかなということです。

一つ、まとめなんですが、私は心の風船っていうのを感じます。戦争に負けてからの日本というのは復興のためにみんなが頑張ったんですね。ここに今井先生とか深川先生とかおられます、たぶん一生懸命、復興のために頑張られた。私は戦後の第一号ですので、それは経験してないですが。豊かな生活が送れるようになりました。しかしながら、一番大切なものを一生懸命にやったがゆえに忘れてきた。それは心の風船ではないかなと。

少し他人のことを思いやって、自分のことに振り返ってというような訓練をすれば、もう少しゆとりや豊かさが出てくるんじゃないかな？

と、生意気なようですが、カンボジアの現地でやりながら、日本を見ながら、カンボジアの人を見ながら、そういうことを考えますね。

愛媛県とバッタマン州をつなごうと思ったきっかけは、まさにここにあったんです。今からは経済的発展しているところとの付き合いというよりも、昔、日本がこうであったというふうな途上国と付き合うことによって、かつては日本もああだったんだよね、と思い出して、日本がまた心を大切にする、心がしほんてしまつたけど、それに空気を入れる作用を国あげてやれば、こちらのお金儲けはこのへんで置いといでですね。風船を同じように膨らませたら、バランスの取れた社会になるんじゃないかなというふうな偉そうなことを思います。

それと、もう一つ最後に、これは、日本の問

題、世界の問題ですが。私がカンボジアの村で過ごすときに思うのですが、二つあればなんとか、人間は幸せのチャンスがあるんかな、と思うんです。一つは戦争がない社会ですよね。戦争があったら元も子も全てなくなる。もう一つは環境。人間がなんとか生活できる環境。この二つが揃えば、小さな幸せをつかむチャンスが出てくると。しかし、この二つのどれかがなくなったら、小さな幸せすら絶対にゲットできることさえ不可能。これは、世界の歴史が示している通りだと思います。

だいたいのまとめはこの辺なんですが、名刺をみなさんにおあげすることが出来ませんので、できましたら、私のメールアドレスにご連絡いただけたら…と思います。連絡先ですが、takayama@jeimasu-njo.jpで、国内でも海外でもメールはチェックするようにしています。

あと、ホームページですけれども、アドレスはJMASと検索していただいたら、「日本地雷処理を支援する会」と出ますので。そのホームページから愛媛を探してもらって、私のブログにあたるようになっています。

次の帰国予定は、7月の中旬から8月の下旬に今は帰るように考えています。年に3回ですが。以上です。質問の時間が少しになりましたが、質問があればどうぞお願ひします。

**○司会・日野** 皆さんの経験したことのない世界のお話を聞いているんですから、何か質問があったらどうぞ。

**○受講生** 住民参加型の地雷処理や井戸掘りや、学校建設を聞いてとても勉強になりました。その中で、カンボジア人の国民性ですかね、言い訳とか、自立面、管理面で少し苦労されているようなお話を聞いたんですけども、その中でもカンボジア人のいいところもよく知っていると思うんですけど、そういうところで私たちも学ぶべきところがあれば教えてもらえたたらと

思います

**○高山** まさに、昨日、寛容と言う言葉を言われましたが、もう一つの言葉で言うならおおらかですよね。「おおらか」どちらかというと我々日本人は若干ミリミリしています。私も代表選手みたいな日本人なんですが、8年の間に少しだけ影響はあります。おおらかを心掛けるようになりました。おおらかさがカンボジア人のいいところだと思います。それと純粹ですね。村の人たちは。

それがだんだんプロンペイに近づくに従って、ちょっとずつ壊れていきます。村の人と私が国境のところにおるんですが、とにかく楽です。絶対に、疑うとかを感じなくていいんですよ。その通りなんです。そういう純粹さ、素直さ、おおらか。おおらかを言葉変えたら、いい加減で、具合の悪いこともあるんですが、本当に底抜けにおおらかですね。非常に明るい。これらが1番いいかなと思います。

**○司会・日野** 他にどなたか？

**○受講生** ポル・ポトの虐殺の問題などは、今のおおらかさの中でどういうふうに評価されているんでしょうか？

**○高山** たくさんの本を書いたりしますので、できるだけ村の人たちにインタビューします。それで本音を言ってくれます。完全に村人になっていますので。そのときに、クメール・ルージュの人たちは、「それはみんなカンボジアのためにやったんだ。同じ民族なんで、今は全然そういうことは考えないんだ」と言いますね。

日本から考えたら、何かのわだかまりがずっとあるだろうと思うのですが。ゼロではないと思いますが、それはおおらかさの中で、『そんなことはどうでもいいんだよ。国を思ってやったんだから。今は平和になってやっているんだか



2006年10月12日、とうもろこし畑の地雷原



金属反応のあった場所の土を除去する作業は特に危険を伴うので慎重な技術が要求される



らそれはそれでいいんだよ、と言うようなのが風潮ですね。

裁判とかやっていますが、しっくりこないと思いませんね。アメリカだとかが手を挙げた関係で、結果的にはやらざるを得ないということでやっているんですが、しかしそれで何が残るのということでしょうね。だから世界の人が考えるような内情ではないですよね。なかなか説明が難しいんですが。

○司会・日野 ばつばつ時間になりましたので、このあたりでと思いますが。

先ほどの「戦争がない今は幸せです」って、私は映画を観て思ったのですが、実は私も小学校の2年生の時に日本が負けちゃいましてね。その当時の旧満州生まれなんですね。だから1年ちょっとの間、負けた世界の中で、政府とか守ってくれるものが何もない世界の中で、殺されても文句言えない世界の中で1年だけ生きていたんですけど。鉄砲の弾に追いかけられたこともあります。今でも心の中にトラウマとして残っておりますね。

「戦争のない今は幸せだ」って言うその言葉が、とても今心の中に染み込んできましたね。皆さんはとても幸せな中に生きているんだなと、言うことなんですね。それを噛みしめて、今晚こういうことでお話をされたらいかがですか。と言うことで、先生ありがとうございました。(拍手)

## 安平 和彦

RYLA委員・パストガバナー  
(姫路RC)



日野先生から2日目を喋れ、ということで、昨日、深川先生が梅巣の中の栗の問題を取り上げて、大変深い話をされたと思うんですけれども、私の方は今勉強中でございまして、勉強中の聞きかじりの事やら生煮えの事やらをご披露しようかなと思っておりますが、その中で梅巣のDVDもありますので途中でそれをしばらくの間見ていただいて、後は梅巣とか鈴木正三の話をしようと思っています。日本古来の実業倫理、古来と言うのはちょっと抵抗があるんですけど、昔から言い伝えられている日本人の実業倫理とロータリーの職業奉仕と言う事で一応名前を付けましたけれども、これも深川先生がいつもおっしゃっていることなんですね、「ロータリーとは人類文化史が二十世紀の時代に刻印を打った、職業人の最も優れた倫理運動である」と言うふうにおっしゃっておられます。

で、深川先生の言葉によれば「職業奉仕とは、愛情の世界の考え方を持って、打算の世界をコ

ントロールしていこうという考え方であると、これが職業奉仕の根本原理なんだ」と、「ロータリーでは愛情の世界に生きる心、すなわち世のため、人のための心をもって職業を営んでいると、その結果として信用と言う保護膜に包まれて長期的に安定した利潤を着々と獲得することが出来る、強靭な体質の企業を作り上げる事になるんだと、この原理の相対をロータリーの職業奉仕と呼ぶもの」とおっしゃっています。

この信用という事ですね。信用という保護膜に包まれて長期的に安定した利潤を着々と獲得が出来るそういう企業を作り上げていくことが出来るんだという、これが一つのキーワードかなと思っております。で、そこの所と言うのが実業倫理、いつもロータリーの話ばかりですが、少し2680地区の方には職業奉仕セミナーとか、こないだの地区大会にも喋っておりますので、また、中村ガバナーが梅巣、梅巣というふうな事で、こないだ梅巣の子孫の方とも対談もさせていただいたんで、そんなことで、いやおうな

### 「日本古来の実業倫理と ロータリーの職業奉仕」

国際ロータリー 第2680地区

パストガバナー 安 平 和 彦

(2010年03月26日)

第32回RYLA ロータリアンの集い

#### ■ 2680地区 深川純一PG

・「ロータリー」とは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った 職業人の最も優れた倫理運動である。

・「職業奉仕」とは、愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールしていこうという考え方である。これが職業奉仕の根本原理である。

・ロータリーでは、愛情の世界に生きる心、すなわち世のため人のための心をもって職業を営んでいると、その結果として、「信用」という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得することができる強靭な体質の企業を作り上げることになる。

・この原理の総体をロータリーの職業奉仕と呼ぶのだ。

く勉強させられておりますけれども。東洋の実業倫理の考え方を少し勉強させて頂いて、まだまだ勉強中ですけども、それとロータリーの職業奉仕論の発想ですね。

ロータリーなんていうのは東洋とは全く関係なく生まれた訳ですけれども、その発想というのは世界共通の発想があるんじゃないかというふうに思っておりますので、そんなことの話をしたいと思います。

鈴木正三から順を追って話をさせて頂こうと思っていますけれども、とりあえず梅巌のDVDを一部だけ見ていただきます。この間の2680の地区大会で中村さんが手に入れて、ちょっと映した物です。

#### (DVD放映)

今から330年前の元禄時代、徳川8代将軍・吉宗によって思い切った改革が行われていました。幕藩体制の強化を主軸に、儉約政策の徹底、乱れた商業道徳、肥大化していた商人勢力の抑制が断行されました。そのため、商家の倒産や没落や相次ぎ、混乱を極めた時代でした。そのころ石田梅巌は、23歳から20年間勤めた2度目の奉公先・京都の呉服商、黒柳家を思うところあって、惜しまれながら辞めていました。

1685年、梅巌は丹波の国、現在の京都府亀岡市の農家の次男として生まれました。幼いときの呼び名は勘平。本名は、おきな。後に梅巌と称しました。厳格で律儀で正直な父の影響を大きく受け育ちました。梅巌の少年時代にこんな有名な逸話があります。

「母ちゃん、栗」

「ぎょうさん拾ってきたんやな？」

「勘平、その栗はどこで拾ってきたんや？」

「裏山の一本杉の木の下で」

「あの道にうちの栗の木はない。その栗は隣の山のもんや。よその家のもんと、うちの家のもんと見分けもせんと拾ってくるとはどういうことなんや。今すぐ返してきなさい」

「そやかて…」

「今すぐやなんて…」

「早く返しておいで。その栗はよそさんのもんや」

幼い頃に律儀で、正直な父のこんな教えや環境で育った梅巌。その基本となる考え方、生き方がここから芽生えていきました。

その栗を拾ってきた私を厳しく叱ってくれた父。これこそ親の愛です。どんなに厳しくしても、正しいことを教えることこそ、本当の愛なんです。

11歳で最初の奉公へ旅立ちます。幼い勘平にとって、丁稚奉公生活は過酷なものでした。その中で、勉強好きを發揮し、「人はいかに生きるべきか」「自分とはなにか」など寸暇をさいて本に親しんでいました。

2度目の奉公先・黒柳家は梅巌に深い信頼をよせ、35歳のとき、禪僧の小栗了雲に出会い、その思想を支持することになります。この出会いが、梅巌自身の長年にわたる奉公体験を基にした、商いと道徳の融合という独特の思想が生まれ出される原点になったわけです。

45歳にして京都車屋町で講義を始めました。石門心学がスタートしたのです。「お金は入りませんよ。女性の皆さんもどうぞご自由に。一緒に人の道を勉強しましょう」

聴講料は無料、誰でも自由に聞けるというスタイルを生涯貫きました。人々は驚き、女性でもどうぞ、となると当時としては誠に画期的なことであり、やがて老若男女も押しかけるようになります。ただ、これに反発する学者連中もあり批判を広げました。

この時代、士農工商の厳しい身分制度の時代に、下にいるはずの商が、実際にはのし上がってきて、貨幣経済を動かしていくに従い、武士は商人たちに厳しく当たり、商人は悪知恵で一発の利益を狙う最も卑しき者であるという非難の言葉で差別意識をあらわにしていました。その中で商人たちは、「利益を出すことは悪いこ

となるのか？」と迷いました。そんなとき、梅巌が現れたのです。「商人の利益は侍の禄と同じである」あの封建時代にそんな発言をするのは命がけだったはずです。命をかけてこの論理を主張した梅巌は、商人たちの大きな心の柱になったわけです。

とりあえず地区大会で映していただいたDVの一部なんですが、石門心学の石田梅巌のことを、それなりにうまく紹介しているので、見ていただきました。今日は、石田梅巌ものちほど触れますけれども、その100年前に、鈴木正三という、仏教的な考え方、禅を主になさった方ですが。鈴木正三、石田梅巌、二宮尊徳、どんなことを言っているのかを見ていきたいと思います。

鈴木正三と言うのは、私も聞きかじりの話ばかりで失礼ですけども、三河の国に足助町という、足助渓谷というのがありますが、そこで生

## 東洋の実業倫理との比較

- 鈴木正三 万民徳用
- 石田梅岩 石門心学
- 二宮尊徳 報徳教(二宮翁夜話)
- 近江商人 「三方良し」の商人道

→ロータリーの職業奉仕論と発想において相似

### ■ 鈴木正三(1579-1655) 万民徳用

三河の国加茂郡足助町に生まれる

- ・何の事業も皆仏行なり。仏行の他なる作業あるべからず。
- ・一切の所作、皆もって世界のためとなる。
- ・鍛冶番匠をはじめとして、諸職人なくしては世界の用いる所、調うべからず。
- ・武士無くて世治まるべからず。
- ・農人無くて世界の食物あるべからず。
- ・商人無くて世界の自由、成るべからず。
- ・この他あらゆる事業出てきて世のためとなる。ただ一仏の徳用なり。一世俗的行為は即ち宗教的行為である。(世法即仏法)
- ・「士農工商」という分業は、「一仏分身して世界を利益したまう」ためであり、武士は秩序維持、農人は食糧、商人は必要な品々の提供、商人は流通をそれぞれ分担するのが宗教的な義務であり、それが各人の職能であり、それに専念することが仏行である。

まれた人のようです。もともと武士でありました。徳川の旗本だったわけですけれども、42歳で急に、武士をやめて坊さんになりました、九州の島原の乱なんかで、大変荒れたところの復興に、兄弟でもって努力したという方なんですけれども。非常に仏教に帰依されまして、いずれの事業も仏業なんだ。仏業のほかかる作業はないと。世法即(そく)仏法と書いていますけど、全ての事業は全て世のため、仏がすべて姿を変えて果たしているんだというふうに言ってですね例えば、田んぼを耕しますよね。正三は、「一鉢ごとに、南無阿弥陀仏と言いなさい」と。そういうことすることによって、仮の道を極めることができるんだと。職人でもそうですね。職人がなにかするときに、例えば、旗を織るときに「南無阿弥陀仏」というふう言いなさいと、そんなことを言ってですね。すべて宗教的な行為に繋がるんだ、世法即仏法というふうに言います。

面白いのは、士農工商という身分制度ですが、それは一種の分業なんだ。仏が姿を変えて、それぞれの分業をやって、世界を利益したまうんだ。それぞれの分業であって、それぞれの職能であると。それに専念することが仏業であると、言っているようです。

そういう縦社会の中の士農工商というのを分業と見てですね、それぞれがそれぞれの職能を果たすんだということを言って、その時代から言うと、先端的なというか、平等社会的なこと

### ■ 正三

- ・「士農工商」という現実の家業に精励する中に仏教の本質があり、且つ仏教が実現されるとする、仏教の職業倫理を述べたものであり、優れて近代性をもつ経済倫理。
- ・売買をせん人は、まず得利の増すべき心づかいを修業すべし。その心づかいと言うは他のことにあらず。身命を天道にぬうって、一筋に正直の道を学ぶべし。正直の人には、諸天の恵み深く、仏陀・神明の加護有りて、災難を除き、自然に福を増し、衆人愛嬌浅からずして、万事心に叶うべし。
- 商業利潤の正当性を評価

→日本人の労働觀・職業觀の基礎となり、やがて日本の資本主義の精神的な源泉になっていった。  
(比較 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」)

を言っているんだという感じがいたします。で、同じようなことなんですが、士農工商という現実の家業に精鑑する中に仏教の本質があつて、そして仏教が実現されるという、仏教の職業倫理を述べたものであります。優れた近代性をもつ経済倫理だと言われています。

彼は、商売をせん人はまず徳利の増すべき心遣いを修業すべきで、心遣いとはなにかと言うと、身命を天道になげうって正直の道を学ぶことなどだ。商売をしようとする人は、正直にやりなさい。そして、そういうふうにすれば、特利と言う利益を増すことができるんだと。こういうふうに言いまして、商業利潤の正当性を評価したんだと言われております。

日本人の職業観と言うか、一所懸命まじめに働くという職業感、そのことが、家業を栄えさせていくんだという日本的な、資本主義的な考え方がありますけれども、その源泉になったというふうに言われております。

面白いのは、マックス・ウェーバーが、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本を書いていますが、あの中で、ルダーとかカルヴァンの教えを受けた市民たちですね、自分は神から受けた身分などだ。そして自分の職業は、ベルーフと言っていますけど、神から受けた職業などと一所懸命に神から与えられた職業に励むことが、それがとりもなおさず利潤を生むと。そのことが神の御心に添っているんだと、いうふうに言ってですね、一生懸命やったということが利潤を生み、西洋の資本主義の発達につながっていったんだという考え方を、ウェーバーは示していますけれども。日本の仏教的な職業倫理は、一所懸命まじめに正直に働くことが利益を生んで、その利益が日本の商業を一種、資本主義的というか、商業主義の原理的なものになったと言うようなこともあるわけで、大変考え方方が似ているなあ、と思っているわけです。この辺のところは、今井先生にまた教えていただかないと分からないんで

すが。

次に、先ほどの石田梅巖。鈴木正三から100年くらいあとですけれども、京都府亀岡市に生まれました。この方はさっきもありましたように、神道、儒教、仏教の3つの教えを基に、本性の通りに生きれば、天理にかなった生き方なのだと。それは、宇宙の秩序通りに生きることであると。心とか、本心とか、本性とか言うんですけど、全て宇宙の秩序に沿ったもの、こういうふうなことなんですかね。

梅巒は形というのを言っています、馬は馬という形が与えられているから草を食べることを実践するんだという。畜類鳥類は自然に与えられた本性通りに生きていると。人間は労働して職を得るのが本性ゆえ、その本性に従ってひたすら働けば天理にかない、安心立命の状態になると、そういうことが自然な秩序に従うことになり、同時にそれが社会秩序の基本なんだというふうなことを言っています。

■ 石田梅岩(1685-1744) 石門心学  
京都府亀岡市に生まれる

#### 神儒仏の三教をもとに

・「本然の性」すなわち「本性」のとおりに生きれば、天理に適った生き方とは、宇宙の秩序どおりに生きることである。

・馬は馬という形が与えられているから、草を食うことを実践する。畜類鳥類は私心がないから、自然に与えられた本性どおりに生きている。  
人間は労働して職を得るのが本性ゆえ、その本性に従ってひたすら働けば、天理に適い、安心立命の状態になる。  
そうすることが自然の秩序に従うことになり、同時にそれが社会秩序の基本、すなわち「礼」になる。

#### 梅岩 「都鄙問答」「僕約齊家論」

・商人が売買によって獲得する利潤は、武士が主君から受ける俸禄に相当する貴重なものである。

・実の商人は、先も立ち、我也立つことを思うなり。

・商人道の本質は、勤勉・誠実・正直の精神に立ち戻ること

「仁」(相手を思いやる心),

「義」(人としての正しい心)

「礼」(相手を敬う心)

「智」(智慧を商品に生かす心)

の四つの心を備えれば、客の「信」(信用)となって、ますます商売は繁盛する。

・ありべかかり(なににらし)の心…商人は商人らしく、ただひたむきに仕事に励むことが人格形成につながる。

・僕約の奨励・富の蓄積の擁護

形という意味で言いますと、蚊っていいますよね。蚊は、ぼうふらの時には、ぼうふらの形があつて人間を刺さない、血を吸わない。蚊という形になったときに血を吸うんだという、形によって機能が違ってくるんだということを言っていますね。

人間っていうのは、労働して仕事を得るのが、それが天から与えられた本性なんだと。その本性に従つてひたすら働けば、天理にかなうんだと、こういうふうに言っているわけです。

梅巌は「都鄙問答」や「僕約斎家論」を表していますが、商人が売買によって獲得する利潤は、武士が主君から受ける俸禄に相当する貴重なものだと、商人道の本質は、勤勉、誠実、正直の精神にたち戻ることなんだと。そして、仁…相手を敬う心、義…人としての正しい心、礼…相手を敬う心、知…知恵を商品に生かす心、この仁義礼智という4つの心を備えれば、客の信用となって商売は繁盛するんだと、こういうふうに言っておられます。

そして「ありべかかり」という言葉をよく言うんですけど、「何らしく」ということなんです。商人は商人らしく、ひたすら仕事に励むことが、人格形成につながるんだと、そのことが僕約をし、富の蓄積をしていくんだというふうなことで、これも一生懸命やることが、その富の蓄積をしていくんだというふうなことで、商人の活動を擁護したことあります。

ご承知のように、江戸時代、商人というのは右から左へ物を動かしただけで何も体も動かさないし肉体も使わない。だけれど利益をあげている。けしからん、ということで大変、商人は非難されたわけですが。梅巌は「そうじゃないよ。商売によって得る利益は、武士の俸禄と同じなんだ。職人の利益と同じなんだ。それから、農民の利益と一緒になんだ」とこういうふうに言ってですね、商人の利益の獲得を擁護したというのが梅巌であります。

それから二宮尊徳、これは江戸時代後期の

■二宮尊徳(1787-1856) 江戸時代後期の農政家  
小田原市に生まれる

「報徳」の教え

- ・神儒仏の三教などと農業の実践から編み出した、豊かに生きるためにの知恵
- ・天道人道論  
天道と人道は相和して百穀も実る。  
(道心に沿った生き方)
- ・道德経済一元論 (道德と経済の融合・両立)  
経済を忘れた道德は寝言である。道德を忘れた経済は罪悪である。私利私欲に走るのではなく社会に貢献すれば、いずれ自らに還元される。
- ・報徳仕法  
至誠・勤労・分度・推諉の実践によって初めて人は物質的にも精神的にも豊かに暮らすことができる。
- ・五常(仁・義・礼・智・信)・五常講

■二宮翁夜話

- ・箱根湯本の温泉場での弟子たちに説いた湯舟の話  
奪うに益なく、譲るに益あり。譲るに益あり、奪うに益なし。これすなわち「天理」である。

・天地の道・親子の道・夫婦の道・農業の道の四つの法則

- 商法は、売って悦び買って悦ぶようにすべし。  
売って悦び買って悦ばざるは、道にあらず。  
買って悦び売って悦ばざるも道にあらず。  
貸借の道もまた同じ

・商法の本質を説いた

“ロータリー以前の大ロータリアン”（土屋元作）

人で、梅巌の100年後くらいなんですけど。鈴木正三、石田梅巌、二宮尊徳とちょうど100年、100年、100年くらい経っているわけなんですけど。

尊徳は小田原に生まれました。報徳の教えと言われていますけれども、信事物の三教という神道、儒教、仏教の教えと農業の実践からあみ出した豊かに生きるためにの知恵だと言われています彼は、天道・人道論というのを書きました。

また、道徳・経済の一元論と言っています。「経済を忘れた道徳は寝言である。道徳を忘れた経済は罪悪である。私利私欲に走るのでなく、社会に貢献すれば、いずれ自らに還元されるのだ」と言うことであります。ここでも道徳的に商売をやりなさい。自分の仕事に励みなさい。そういうふうにすれば、そして社会に貢献すれば、いずれは自分に返ってくるんだ、という一つの因縁論みたいなことも言っているわけであります。

それから報徳至宝と言いまして、報徳仕法と言いまして、至誠(しせい)・勤労(きんろう)・分度(ぶんど)・推讓(すいじょう)のこの四つを言っていますけど、眞面目に働き、贅沢をしないで自分の歩に合ったことをする、すると必然的に利益の余剰が出てくる、それを他に譲ると、そういうことによって人間は物質的にも精神的にも豊かに暮らすことができるんだというふうなことを言っているようあります。

仁・義・礼・智・信という教えを重要にしておりまして、これを五条というわけですけれども、今の信用組合とか信用金庫とか、協同組合とか、そういうものに類したような一つの信用組織のようなものを作ったと言われております。一番私が好きなのは、箱根大和の温泉場で、二宮翁が露天風呂のふちに座って弟子たちに説いたという話です。露天風呂があって温かい湯が流れてきたら、誰だってそれを自分の方にかけたくなるよと。いくらその温かい湯を自分の方にかけたって、その湯はあなたの傍らを通ってよそに行ってしまうじゃないか。そうじゃなく、その温かい湯が流れてきたら、人の方に押し上げなさい。すると暖かい湯は人を温めて、いざれは回って自分のところ戻ってくるじゃないですか、そういうふうにしなさいと。向こうに少し押せば少し返る。強く押せば強く返る。そういうふうに人のために押すのを尽と言うんだ、と、自分のほうにかき寄せるのを不尽と言うんだ、とりわけ物を見なさい、物は自分のほうに便利になっていただけで、かくようにしか出来ていない、人間はそうじゃないよと。人のために押すものもあるし、かき寄せることも出来る、そうであるのに自分の方にはっきりかき寄せようとするのは、鳥や獸と同じじゃないか、恥ずかしいではないか、ただ単に恥ずかしいだけではなく、そういうことをやっていると、いざれ身を滅ぼしてしまうよ、というふうに言っています、ここにあるように「奪うに益なく譲るに益あり、譲るに益あり奪うに益なし、

これが天理である」というふうに言っているわけであります。

それから二宮翁はいろいろなことを言っていますけれども、天地の道、親子の道、夫婦の道、農業の道の四つの法則っていうものがあるんだと。

商法っていうのは、売って喜び、買って喜ぶようにすべし。売って喜ぶ、買って喜ばざるは道にあらず。買って喜び、買って喜ばざるも道にあらずで、商法の本質を説いたと思うわけであります。これが二宮尊徳の話です。

ご承知の近江商人の「三方よしの商人道」、これもすばらしい話だなと思うんです。近江商人は売り手よし、買い手よし、世間よし、というふうに言いました。商いの基本は売り手、買い手の双方の満足のほかに、取引が世間に認められ、社会全体の倫理にかなった商いをすること、すなわち三方よしが商売の秘訣だと、こういうふうに言っているわけであります。で、本来の商いは、売り手と買い手が満足すれば良いわけですが、そうじゃないよと、単に売り手と買い手だけの満足だったら、マフィアややくざの取引でもシャブ売買だって、双方が満足するわけですからそうではなくって、その取引が倫理にかなった社会全体の幸福に繋がる商いであること。それが商売の秘訣なんだと、こういうふうに言ってまして、そういうふうに理念して行商をやることが、人々の間に信用という、目に見えない財産を築いていくて、家業を未来栄

### ■近江商人「三方よし」の商人道

→「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」

・中村治兵衛(宗岸)が1754年に15歳の養嗣子に認めた書置(家訓)が原典と言われる。

・商いの基本は、「売り手よし」「買い手よし」の、売り手・買い手双方の満足ということのほかに、「世間よし」として、その取引が世間に認められ、社会全体の幸福につながる倫理に適った商いをすること、すなわち「三方よし」が商売の秘訣である。

・このことが、行商先の人々の間に「信用」という目に見えない財産を築いていき、家業を未来永劫に存続させていくのだ。

#### ・中村治兵衛宗岸の書置

「自分のことだけを考えて一挙に高利を望んだりせず、損得は天道のめぐみ次第であると思い定め、ひたすら人様の役にたつことのみを心がけよ」

#### ・西川甚五郎家の家訓

「いつも薄い口銭を心がけ、たとい品薄の時期であろうとも余分な口銭をとらず、何事であれ世間の害になることをしてはならない」

#### ・外村(とのむら)与左衛門家の心得書

「売って悔やむような取引を販売の極意とせよ」

→顧客満足を高めることこそ、家業永続のもととなる

### ■東洋の実業倫理の特徴

いわゆる企業の社会貢献やフィランソロピーのように、企業が、本業とは別にその余剰(利益や組織力)をもって社会のためになることをしよう(ロータリーで言う社会奉仕)ということではなく、事業活動(ビジネス)そのものの中核に、社会をよりよくすることを組み込んでゆこうとするもの。

すなわち、企業の存在と活動そのものを社会のためによいこと(good business)であるようにする経営原理。

→「こんなことをしていてはお天童様に申し訳ない」

→「宇宙の法則」(天地の理法)

→「天知る・地知る・我知る・人知る」

彼らは、優れて因縁論の世界を説き、目先の利益に目がくらんで破滅に至ることの愚かさを説いた。

彼らの商人道は、今日の企業における、いわゆる CSR (Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任)に通じる。

まさにロータリーの職業奉仕の理念と共通

### ■ロータリーの職業奉仕の理念

■ロータリーは、1905年に東洋哲理とは全く関係なく生まれた

■両者の間には何の脈絡もない

■しかしながら発想は大変に似通っている

■このことが日本におけるロータリー運動の受容と発展に寄与した

光に存続させていくんだ、とういうふうに言っているわけであります。

鈴木正三から近江商人まで四つほど見てまいりましたけど、とういう立業理念の特徴っていうのは、本業とは別に利益が上がったという余剰を持ってですね、社会のためになることをしよう、と言うのが企業の社会貢献なんですが、ロータリーで言うならば社会奉仕になるんだろうと。

ライオンズクラブの悪口を言ってはいかんのですが、一生懸命儲けて、その金をもって何かいいことをしようと言うことですから、それは今の社会貢献になるのかもしれません、事業活動そのものの中核に社会をより良くしようとすることを組み込んでゆこうと。事業の活動そのものが、社会のためになるんだと、そういうふうに考えていくよと言うことでありますて、ちょっと方向が違うと思います。すなわち企業の存在と活動そのものを社会のために、よいことにしようという権利で、経営権利だと思います。

ちょっと下の方に三つほど書きましたけれども、違うかもしれません、商売やっているときに、こんなことやっといたらおてんとさま(お天道さま)に申し訳ない。それから、インチキやっていたら宇宙の法則に反するよと、いずれ破滅するよと、いうふうな気持ちでやるとか、天知る、人知る、我知る、地知る、というのも同じなんですけれども。すっこいことやっとったら、誰かが知ってるよ、と。そんなことやっていると商売が破滅するよ、というふうなことを言ってるんだろう、と思うのであります。

今も言いましたように、東洋の実業倫理、彼らは優れて人間論の世界を説いて、目先の利益に目がくらんで破滅することの愚かさを説いたということでありまして。まさに東洋の実業倫理の考え方もロータリーの職業奉仕の理念と共通な部分があるんだろうと。生まれも育ちも別なんだけれども、やっぱり一つの因縁論の考え

方っていうのは世界共通の考え方ではないかとうふうに思うわけあります。

そして日本の場合は、昔からの発想、まじめに働くというのが昔から言われておりまして、日本にロータリーが作られ、たちまち世界第二のロータリー大国になったということなんですけれども。やはりそれは日本人の中に東洋の実業倫理的な考え方というのがあったので、需要と発展に寄与したのではないかというふうに思っております。

そこで、ロータリーに戻りまして、一番大切なものの、これは決議23の34の第一条だったと思いますが、ロータリーは基本的には一つの人生哲学である。それは利己的な欲求、義務ならびに他人のために奉仕したいという感情、そういう自分の心にある二つの葛藤を調和するのがロータリーの思想で哲学なんだと。今度の規定審議会でこの23の34を強調しようというような立法案を日本から出しておりますので、どうなる

か分かりませんけども、そういうものが採択されることを期待しているわけでありますけれども。

これを私流にいいますと、自分のことに先に他人のために尽くすことは、やがて巡り巡って自分の人生を照らし、明るくするんだということですね。因縁論の中で、人のためにしていると、自分の指針を高め、自分の企業を栄えさせるんだと同じことを言っているわけです

奉仕の理想の哲学を自分の職業に適用し、他人のために倫理にかなった職業を営むということ。自己と自己の企業の倫理性を高め、永続的な利潤を確保していくことに繋がるんだと言うことですね。この信用が大切なんだと。深川先生が、最初におっしゃっていましたけれども、信用というものを作っていく、それが企業を非常に強い体質に作っていくんだというふうに言わされましたけれども、そういうことだと思います。

## 決議23-34 第1条

- ロータリーは、基本的には、ひとつの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。
- この哲学は、「超我の奉仕」の哲学であり、これは「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

Fundamentally, Rotary is a philosophy of life that undertakes to reconcile the ever present conflict between the desire to profit for one's self and the duty and consequent impulse to serve others. This philosophy is the philosophy of service – "Service Above Self" – and is based on the practical ethical principle that "He profits most Who serves best"

## 「利己と利他の調和」の哲学

すなわち、この利己と利他の調和の哲学が、  
「The philosophy of Rotary」であり、  
「The Ideal of Service」(奉仕の理想)  
に外ならない。

この哲学は  
「Service Above Self」の哲学であり、

「He profits most Who serves best」の実践倫理原則に基づく

## 決議23-34 第1条

### ロータリーはひとつの人生哲学

(Fundamentally, Rotary is a philosophy of life)

**利己的な欲求**  
(The desire to profits for one's self)

**他人への奉仕感情**  
(the duty and consequent impulse to serve others)

**相反する二つの心の葛藤を調和**

(Undertakes to reconcile the ever present conflict)

### 「利己と利他の調和」の哲学

#### ■ Service Above Self

自分のことより先に他人のために尽くすことは、やがて巡りめぐって自分の人生を照らし、明るくするということ

#### ■ He profits most Who serves best

利己と利他の調和の原則、すなわち奉仕の理想的哲学を自己の職業に適用し、他人のために倫理に適った職業を営むこと、このようにして、自己と自己の企業の倫理性を高め、自らと自らの企業の信用を高めていくことが、結果的に、自己の企業の安定的且つ永続的な利潤を確保していくことにつながるのだ、ということ

#### ■ ロータリーの職業奉仕論は「商売の極意論」

「満足」という商品と「感謝」という対価  
「眞実」という商品と「信用」という対価

私はロータリーの職業奉仕論って言うのは経営学で、いかに職業を営むべきなんだという、そのことで未来を栄えさせるんだということだと思います。我々は一つの商品を売り買いまする場合に、その商品と対価のお金交換するわけですけれども。

例えば時計を取り上げた場合に、時計という商品を売って、対価としてのお金をもらうんですけども、外観的にはそうなんですけれども。ロータリーでいう売り買いと言うのは、満足である商品を売って、感謝という満足をもらうんですよ。眞実という商品を売って、信用という対価をもらうんですよ。そういうふうに理念して、相手のためになるように、商売をやるということが感謝と信用という対価をもらって自分の商売を未来に栄えさせていくんだと思うわけあります。

これら先ほど来、見てまいりました東洋の実業倫理が言っていることだと思いますし、ロータリーも同じことを言っていると思います。ロータリーあんたのもの、皆さん方、ロータリアンそのものですから、僭越ですけれども、よそのクラブに喋りに行ったときには、ロータリアンたるものは、例会によって切磋琢磨して自己改善をしなさい、米山梅吉はロータリーの例会は、人生の土壤と言っているでしょ。そして例会で学んで奉仕しなさい、ロータリーの理想をロータリーから派遣された大使として、広めていくんだというふうに理念してやりなさいと。

### ロータリアンたるもの

- 例会における切磋琢磨による自己改善
  - ロータリーの例会は人生の道場(米山梅吉)
  - Enter to learn and Go forth to serve
  - ロータリアン大使論(ガイガンドィカー)
- 神から問われる者としての自覚
- ロータリーのエンブレムから問われる者としての自覚
- ロータリー哲学で覆われた「ばい菌マン」の心意気

神から問われるものの自覚というと格好よ過ぎますが、お前は真面目にやっているか？嘘ついてないか？理にかなっているか？と、神さんから問われているんだ、そしてロータリーのエンブレム、バッヂからですね、お前はインチキしていないね、と問われているんだという自覚でもって、やっていかなければいけませんよ、やりましょう。なかなかできませんけど。やりましょう、と時々言っているわけであります。

ロータリーに入った限りは一生物だと思いますので、単なる親睦では寂しいので、何よりもロータリーの哲学を実践することは、必ずや他人を助け、巡り巡って自分の人生を明るくするんだと。そして自分の職業を隆々と栄えさせるんだという信心ですね。確信とロータリアンの誇りでもって、やって欲しいですよ、と時折、喋っているわけでございます。そんなことで、私の話は終わらせていただきます。

### 終わりに

- ・縁あってロータリーの世界に入った  
一生もんのロータリー  
昼飯会(晩飯会)ではさびしい  
感性的親睦でもさびしい  
知ることの楽しさ 自ら学ぶことの楽しさ

- ・そして、なによりも「ロータリー哲学」(利己と利他の調和の哲学=奉仕の理想)を実践することは、必ずや、他人を助け、やがては巡りめぐって自らの人生を明るく照らし、いずれは自己の職業を隆々と栄えさせるのだという確信と、ロータリアンとしての誇りを持って、ロータリー人生を楽しみましょう。

### ご静聴

ありがとうございました



## 平和と発展 －ガンディー思想を手がかりとして－

石井 一也 氏

香川大学法学部法学科教授



- 学歴 早稲田大学政治経済学部（1983～1988）  
早稲田大学大学院経済学研究科（1988～1991）  
京都大学大学院経済研究科（1993～1997）
- 職歴 香川大学法学部講師（1997.4～）  
香川大学法学部助教授（1999.4～）  
スタンフォード大学経済学部客員研究員（2002～2004）  
香川大学法学部教授（2008.4～）
- 研究テーマ 平和と発展の研究
- 主な著書 「経済思想」（第11巻）日本経済評論社 2007.12

香川大学から参りました石井と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。本日は、32回のライラセミナーにおいて私の話を聞いていただけるということで、このような機会を与えてくださいましたことに感謝申しあげたいと思います。普段から若い学生さん達を相手にして、話をする仕事をしているわけですけども、また今日は違った顔ぶれで、また新鮮な気持ちでお話をさせていただきます。

来歴については資料に載せていただいていると思うのですが、今日のお話に先立って、少し自己紹介をさせていただきます。

たまたま教壇に立って、自分の研究したことなどを若い学生さん達に講義をする仕事をしていますけれども、私自身は子供の頃から勉強が大嫌いで、テレビばっかり見ている子供だったんです。

ところがちょっと気になった事が、1984年にあったんですね。エチオピアというアフリカの貧しい国の1つで、異常気象が起きて、毎日400人くらいの子供達が亡くなっていました。その

ニュースを映像で見まして、かわいそうだなあと、一瞬思ったのですが、それはエチオピアに生まれた子ども達がたまたま不幸だったのであって、自分には関係ないなあ、自分には何もしてあげられないなあ、ということで通り過ぎてしまつたことがあります。

そんな私は、大学3年生の時にアメリカに留学する機会を得ました。

その最中に、86年、ニューヨークの国際連合本部というところで、学生向けのセミナーを受講しました。ちょうど皆さんぐらいいの年代の時でした。そのセミナーは3週間くらいあったのですけども、世界の問題について考えるというセミナーでした。私は別に世界の問題なんて自分には関係ないことで、日本は今でこそだいぶ経済力が落ちてきていますけれども、当時は東西冷戦下にあって、経済はNo.3でした。

No.1のアメリカの中でも、それこそパナソニックがあり、トヨタが走り、日産が走り、アメリカ人の生活の中に日本の資本が沢山入っているのを見て、どこか日本から来たということに

一瞬のそこはかとない優越感を感じていたんです。さぞかし国際社会の中でも日本は貢献しているだろう、世界の人達から感謝されているだろうと思って、そのセミナーに参加しました。

そのセミナーが私に大きなショックを与えました。その中で、なんとエチオピアから一人のジャーナリストが私たちの前でお話をしてくれました。その人のお話の本題の部分は全く覚えていないんですけど、お話の枕の部分で日本のことについて、一言二言語ったんですね。それが私には非常にショッキングだったのです。

彼は言いました。「日本という国はけしからん国だ」と。さぞかし感謝されているだろうと思って参加した私にとっては、何事が始まるんだろうと思いました。彼が言うには、「日本は、私たちの国に来て大切な地下資源を安く買い叩いて帰っていく。また戻ってくる時にはテレビを持ってきたり、車を持って来たりするが、非常に高い値札をつけて帰ってくる」と言ったんです。この一言は、私に強烈な印象を与えました。なぜならば小学校から、日本は資源のない国で、いわゆる貿易立国、世界と平和を保ちながら通商を通じて経済的な繁栄を享受しているのだ、と習ってきた。それは良いことだと、教えられてきた気がします。

大学時代も、経済学の中に国際貿易の理論というのがあるのですが、それは非常に乱暴に言いますと、二つの国が貿易するとお互いに豊かになりますよということを理論で説明するものなんです。それを勉強していました。ですから国際貿易、とりわけ自由貿易というのは良いことだと、強く信じていたんです。けれども、同じ貿易のコインの裏側から見ている人は、私とは全く違うイメージでとらえているんだなと思った。もしも、そのジャーナリストが見ていく見方が正しいとするならば、少しでも豊かな暮らしをしようと思っていた私の生活と、毎日400人から命を落としていたエチオピアの子供たちの生活というのは世界経済の中で繋がって

いるかもしれないなという感覚を得たんですね。

私は、日本の中では、中の下ぐらいの階層ではないかと自分では思っているんですけど、普通のごくごく小さな家に生まれ育って、私よりもはるかに裕福な暮らしをしているクラスメートをうらやましく思って、子供時代を過ごしてきたんです。けれどもその時に、世界で見たら、もう自分は突出してピラミッドの上の方にいるんだな、と気づきました。それからというもの、勉強の意味が大きく変わってしまったんですね。一体自分は他の人たちとどう繋がっているのかなと？ あるいは自分が生きている世の中というのは、どういうふうにできているのかな？ ということを思うようになりました。

それまで私は、本屋なんて行かなかったし、行ってもせいぜいマンガのコーナーか、英会話のコーナーか、就職関係のコーナーかですね。たいてい足を運ぶとすると。

アメリカから帰ってきてからは、なんと勉強なんて大嫌いだった私が、社会科学や経済学のコーナーに行くようになり、本を目にすると、貧困とか南北問題（南北問題とは、豊かな北と貧しい南の間の経済格差の問題）、人権とか、N G Oなんて文字が次から次へと目の中に入ってくるようになりました。

それまで進路を考えると、七つの海をまたにかけて活躍するようなインターナショナルなビジネスマンを思い描いてみたり、商社とか銀行に憧れていきましたね。ですけれども、アメリカから帰ってきてからは、どうも私は勉強をしてみたい、本を読んでみたいという気持ちになったわけですね。

親の前で珍しく膝をついて、「お父さんお母さん相談もあります。大学院に行ってみたいんだけども」と言いました。『はあ？』と思つたと思います。うちの子がそんなこと言うだろ？ とは、夢にも思つていなかっただろうと思う

んです。大学院進学は冒険みたいなもので、普通は大学を卒業すると就職していくパターンだったんですが。大学に進学して、果たしてご飯が食べられるかどうか分からぬという不安を抱えながらも、今はもうちょっと勉強してみたいたいと、大学を卒業する寸前に思い直して、今はこうして、たまたま運よく拾ってくれるところがありましたのでこういう仕事をしているわけです。

それから、なにしろ大学院に進学するのですが、勉強が大嫌いでしたので、進学したはいいが、何を勉強していいか分からぬわけですね。そのときに「国際貿易の理論とは異なる考え方はありませんか?」と、先生に相談したら、「では、マハトマ・ガンディーでも読んでみたらどうかね」と先生がおっしゃたんです。

私は、『はあ?』と思いました。ガンディーというと、中学時代に歴史の教科書で写真を見ていましたが、汚い格好をした歯の欠けたおじいさんというイメージでしかなかったし、それが何で経済学の修士論文になるのかなと思いました。「先生、それはちょっと…」と出かかったんですけども、そこは学生でしたので、その言葉をぐっと飲み込んで、「先生のアドバイスは如何でしょうか」と言うことをいうために、騙されたと思って、冬休みにガンディーを読んでみようと思って本を開いてみました。

そうすると、なんとですねえ。その中に国際貿易の理論とは、まったく異なる考え方方が次から次へと出てくるではありませんか。気が付いてみると、今、こうして今日もお話をさせていただきますけど、ガンディーのことを20年ぐらい勉強しているんですね。人生の半分までいってないんですけど、それに近い時間、ガンディーの勉強をしてきました。

ですから、あのときに「先生ちょっと…」と、ここまで出かかった言葉を飲み込んでいてよかったです、と思っています。多分これから先の20年も同じようにガンディーの研究をしていくと

思うし、言い換えるとライフワークになるのではないかと思うんですね。ささやかな事しかできませんけど、大変ありがたい研究テーマをその時先生にいただいたと思ってます。

そんな人間が、平和とか発展とかこうした大きなテーマを語るとして、果たしてどれだけのことをお伝えできるのかなというふうにも思いますけれども、今日はちょっとささやかなお話をですが、しばらくお付き合い頂けたらと思います。

レジュメを用意しました。パワーポイントなども使えるということですが、私は人間が旧式のもので、そういう機械には通じていませんので、昔ながらのこういうやり方でやっていきたいと思います。数日前に風邪をひいて、お聞き苦しいかもしれません、お許しいただきたいと思います。

最初に、皆さんに事前にお配りした小さな文章においては、テーマとしては「平和と発展」というふうに記してあったとは思いますが、今日は副題として、「ガンディー思想を手がかりとして」とつけ加えさせていただきました。

はじめに考えてみたいと思いますが、地球上にどれだけの人が住んでいるかご存知ですか?

地球の人口はどのくらいかご存知ですか? 68億人くらいです。このうち先進国に住んでいる人がだいたい15%くらい。発展途上国とか開発途上国と呼ばれる国に住んでいる人が残りの85%ですね。

GNIという言葉をご存知でしょうか? Gross National Income(グロス・ナショナル・インカム)、国民総所得。GNPは聞いたことがあります? Gross National Product(グロス・ナショナル・プロダクト)、国民総生産と言いますが、似たような考え方ですが、インカムと入ると、一人ひとりの所得に目を向けて、一つの国の経済的な規模を図ろうという指標ですね。ここに私たち一人ひとりの所得を積み上げていって、国民全体で積み上げられたものが日

本のGNIということになります。

これを世界で合計していきますと、各国がどれくらいの割合でシェアを持っているかということになりますが、先進国がだいたい世界のGNIの80%を占めているということになります。そうすると残りの85%の人たちは、GNIの20%を受け取っているということになります。人口の15%の人たちが80%の人の経済的な富を受け取り、85%の人たちが20%を分け合っているということです。そうすると当然、豊かな国はものすごく豊か、貧しい国はきわめて貧しい、ということになりますね。ちなみにアメリカ合衆国と、最貧国の一つであるアフリカのブルンジ共和国の違いはどれくらいか、想像づけますか？なんと、460対1です。圧倒的な格差があるわけですね。もちろんそれぞれの国でいろいろな食べ物だと、衣服だと生活に関わる品々の物価水準がそれぞれ違いますから、アメリカ人がブルンジ人よりも460倍幸せだと、乱暴に言うことは避けないといけない。とはいえると、国際社会で取引される品物についてはアメリカの方がブルンジ人よりもはるかに有利ですね。

飛行機に乗るときに、460分の1の価格で乗らせててくれるわけではありません。石油を取り引きする時に、アメリカ人だってブルンジ人だって同じだけの額を払わないと石油は買えない。

日本はどうでしょうか。日本とブルンジを比べてもやっぱり、416対1という大きな格差があるんですね。一人当たり所得で見たときに、これだけの大きな格差があります。こうした社会の中で私たちは生きているわけですね。そうすると日本とかアメリカとか、物質的にきわめて豊かな社会に至るのには、どういうプロセスをたどったのかな、と考えてみると、長い歴史の中で、人間は少しずつ少しずついろいろな技術の開発をしてきて、おそらく18世紀の半ばぐらいから急激に物質的な豊かさを手に入れるようになっていったという見方が一つにはで

きるんですね。

18世紀の半ばとはどういう時期なんでしょう？産業革命がイギリスで起きた時期ですね。それまでは、人間は風力とか、昨日は非常に風が強かったですね。ああした力を利用して、それを動力源として、あるいは畜力ですね、家畜の力。そして人力。これを使って生産活動をしていましたけれども、産業革命以降というのは、化石燃料、石炭とか石油とかですね、何億年前の生物の死骸を燃やして、動力源としていくようになったわけです。

それ以降、化学技術が飛躍的に進歩して、思想の世界でも、自由とか進歩というものが前面に押し出されて、人類は非常に力強く、物質的な発展の道をたどっていくことになったわけですね。その結果、国内で大規模な工場が、イギリスをはじめとして産業化をしていった国々では、次から次へと作られていますけれども、働く労働者と雇う資本家の間で、激しい階級間の対立が生まれたり、あるいはその産業化のためには外国から資源を持ってこなければいけませんので、植民地をお互いに強い国同士が獲得したり、作った製品を売りさばく先として、植民地が必要になったり、国内においても階級間の対立が生まれるのと同時に、国際的にも支配する国とされる国に分かれていったりしたわけですね。

それから19世紀を経て、20世紀に入ると、資本主義と社会主義の対立する時代になりました。ロシアで革命が起こって、労働者が自分たちの政権を創る。20世紀は、ソビエトや東ヨーロッパという国々があって、社会主義圏を構成していましたけれども、自由主義や資本主義を信条とする国々と激しく競争し合う、そういう時代だったんですね。社会主義圏も1990年を境として、次々に崩壊して今では社会主義を名乗っている国はほとんど少なくなってしまいました。名乗っていても事実上、資本主義の国と変わらないというのがほとんどのパターンです

ね。社会主义と資本主義は20世紀を特徴づけた二つの大きな体制だったわけですが、ただ一つ共通していることがありました。それは、どちらも物質的な豊かさを求めるという社会体制、経済体制だったわけですね。

社会主义国というのは資本主義の国に対して、非常に強いライバル意識を持っていましたので、資本主義を追い越していくことが一つの社会の目標だったわけですね。その社会主义のグループが事実上崩壊して、今は資本主義や、経済学の領域では市場経済という言葉をよく使いますけれども、国家が経済を管理するのではなくて、民間の自由な経済活動を中心にして経済を作っていく、という考え方ですね。市場経済の国々がほとんどになってきているし、旧社会主义圏を含めて市場が世界的に拡大していく、いわゆるグローバル化の時代ですね。そのまま21世紀に突入し、今日に至っているわけです。

ところがそのグローバル化とか、市場経済の拡大とかいうのは、どうなんでしょうか？

社会主义が崩壊したときには資本主義の勝利ということが声高に叫ばれましたが、確かに物質的な反映を築いていく上では、この市場経済というのは非常に力強いものがありましたけれども、同時に資源を大量に消費して、そして環境を破壊し、水、空気を汚し、森を切り開いてそこに住んでる他の生物を絶滅に追いやっていく、そういうプロセスであったりしないでしょうか？

そういう時代に私たちは住んでいるわけですね。はたして、平和とか発展を考えるうえで、資本主義の勝利を声高に喜んだ時代があったわけですけれども、その延長で考えていいのかどうか、ということを最初に問題提議しておきます。

それを前提としまして、いよいよガンディーのお話をさせていただきたいと思うわけですが、ちょっと実験をしてみましょうか。

ただ私の話を聞いていただけでは面白くないので、皆さんに協力してもらって。2人1組になって自分の相手を確認してください。どちらかが拳を強く握りしめてください。もう1人は、その相手の拳を両手で握りしめてください。離さないように。離さないように。ロータリアンの皆さんもどうぞ。握られている側の人は、どのような方法をもちいても構いませんので、今、束縛されている状態ですよね。自らを自由にしてください、私が合図をしたら、いいですね。最初に言っておきますが、あまり激しくすると相手を傷つけますので、そこまでやらなくてもいいですからね。ではどうぞ。やってください。

皆さん自由になりましたか？ 相手をくすぐっている人もいましたね。おもしろいやり方とは思いますが。この中ですね、こんなふうにおっしゃった方いらっしゃいますか？ 「すいませんが、手をほどいていただけませんか？」と。

おっしゃった？ すばらしいですね。まさにガンディーのような方だと思います。逆に、死にもの狂いで、ありったけの力を使って手を振り払ったと言う方、どれぐらいいらっしゃいましたか？ どうしてこんな実験をしたかといいますと、植民地支配をされた国々、民族というのは、自分たちを解放する時に、力ずくで支配から自らを解き放とうとするわけですね。それに対してガンディーは、相手の良心に訴えかけて自らを解放していこうと、そういう運動だったということなんですね。これは独立運動のやり方としては非常に、稀有なやり方だったということです。

実験の前に写真をお見せしようと持ってきました。ご存知だとは思いますが、瞑想している写真です。真ん中にある人が、マハトマ・ガンディーですね。右側の帽子をかぶった人が、ジャワハルラール・ネルーという人で、インドの初代の首相を務めた人です。左側は、ネルーほど有名ではありませんが、サルダール・パテール

という人で、インドの副首相を務めた人ですね。

ネルーという人は、先ほどのロシア革命に非常に心を打たれて、社会主义に共鳴した人でした。独立してからも、社会主义の路線に沿った大規模工業化が必要なんだ、つまり物質的な発展が必要だと考えていた人です。他方でこのパテールは、資本家の人たちと仲がよくて、左と右みたいな感じだったわけです。乱暴に言えば。ガンディーはこの2人の手綱をしっかりと握って、独立インドを築いていこうと考えていったところがあるんです。

さてガンディーは、その生きていた時代をどのように見ていたのか。ガンディーは1869年に生まれまして、1948年に暗殺されています。ちょうどガンディーが生きた時代というのは、イギリスがインドを支配していたわけですけれども、まさにイギリスは、自分の国の工業発展のために世界中の植民地を持っていて、世界中から資源を本国に持ち帰っては、そこで製品を作って、それをまた海外に売るということで経済を大きくし、自分の国を中心として世界経済を再編成していったわけです。その頃、グローバル化という言葉は聞かれなかったと思いますが、まさにイギリス経済を中心とするグローバル化が進行していたということだと思います。

ガンディーは、近代文明というのを非常に悪いものとして見ていました。近代文明というと物質的な豊かさを追求するそんな文明であり、そして人々が拜金主義に走る、そんな文明だったわけです。そのときに、彼が厳しく批判したのが、機械です。機械によって一部の人たちが多くの人たちを搾取しているというふうに思っていました。一部の人の動機というのは、人間性や愛とかではなく、貪欲であると。インドが実際に貧困になったのはマン彻スターの機械のせいだと。ちょうど産業革命が起こった場所がマン彻スターですね。

機械によってイギリスを中心にして経済発展が進められる。経済発展には資源が必要になる。

そうすると植民地を支配する必要がある。しかし植民地だって無数にあるわけありませんから、イギリスだけではない、フランスも出てくる、ドイツもロシアも出てくるとなってくると、植民地を競争しあうようになるわけですね。豊かな国同士が。そうするとどうなるのですか。世界戦争へと突入していくわけですね。その時代をガンディーは見ていましたので、インドが工業化することに対しては反対でした。当時でさえ、3億5,000万人の人がいたんですけども、その人たちをそういう形で食べさせるとすれば必ずインドは、外国を支配するようになっていくだろうと思っていました。だから、なにしろアメリカやイギリスのようになってはいけないと言うのが、ガンディーの考え方だったのですね。

ガンディーは機械についてこう言いました。機械は近代文明の主たる象徴である。それは大きな罪を代表している。本当の意味での文明というのは、必要物を拡大していくのではなくて、それを慎重に自発的に削減することだ、と言いました。物質文明を特徴とする近代文明ではなくて、必要物をできるだけ削減していく。これはどうですか？ 私たちの生活を見渡してみたときに、思い当たるふしはありませんか？ 私たちは必要以上に物を欲しているか、知らず知らずのうちに欲しいと思わされてしまっているか分かりませんけど、たくさんの中を持っていたりするのではないか？

今、切り忘れて、慌てて携帯電話を切りましたけれども、つい3年くらい前はですね、私も携帯電話を持たないという主義を貫き、ガンディーの側に立っていたんです。携帯電話なんてさほど必要無いですね。本当に緊急の時以外は無くても済むわけですよね。歩いていても電話をかけなきゃいけない、かかるてくる、つまり人間の時間という領域にまで、資本の論理が入ってきているということです。もし電話関係の会社の方がいらして気を悪くしたらすいません

ん。いらっしゃるんですか？

電話に限らず、いろんなところに資本の論理、ビジネスの論理が入ってきていて、私たちの心の中にもともとなかった必要が生み出されていくというプロセスなんだと思うんですね。携帯電話、非常に便利ですよね。（笑）

そのようなわけでガンディーは、必要物の削減ということが真の意味での文明だと言っています。これは西洋の経済学者の考えとは大きく違います。経済学者たちは、おそらく、利己心、機械、大量生産、大量消費、ちょっと堅苦しい言葉ですけれども資本蓄積、それから自由貿易などを疑うことなく良いこととして受け止めています。2つの国が貿易しますと豊かになりますよ、そういうメッセージですね。

そして、アダム・スミスの時代から、さらに時代が過ぎていきますと、これもまた専門用語のように堅苦しい言葉ですけれども、帝国主義。

これは国内で余った資本が海外に輸出される、そのためにインドの鉄道などが建設されてきました。こうしたことは基本的には、経済学者たちが歓迎した事柄ですけれども、ガンディー自身は経済学者ではありませんでしたので、アダム・スミスや、ジョン・スチュアート・ミルといった有名な経済学者の本をどれだけ深く勉強していたかは分かりませんが、やっぱりその時代の雰囲気を感じていた人だったんですね。ガンディーは近代文明についてこのように書きました。経済学についてこのように書きました。

「近代文明に酔っている人は、それに対して反対のことは書かない。一国が他国を支配することを許す経済学は非道徳である。」

経済学を勉強している先生が読んだら、カンカンに怒るでしょうね。強烈な批判で、一言で片付けられてしまうわけですから、非道徳であるということですね。

そんなふうにガンディーは近代文明を見ていました。では、近代文明を批判して、どういう

ふうに国を作っていくとしていたのかというのが、次のお話です。

レジュメのチャルカーラ運動についてお話しします。チャルカーラというのは何か。糸紡ぎの車、手紡ぎ車と言いますが、これがチャルカーラです。

私たちが身にまとう衣服というのはいろんな行程があるわけですけれども、非常に重要な行程が二つあって、一つは綿から糸を紡ぐプロセス。これが一つですね。そして、糸が紡がれた糸を縦糸と横糸に組み込んで布を織るというこの二つが非常に重要ですね。このチャルカーラで紡いだ手紡ぎの糸を用いて作られた綿布が実はここにあります。

なぜこれが重要なのか？ チャルカーラは昔からインドにあったけれども、イギリスの産業革命以降、安い機械製の綿布が入ってきて、この伝統的な手織りが廃れてきました。それがゆえに、インドの人は貧しくなったとガンディーは、考えました。だからこそこれを復活させて、織物の工程を全て手作業にすることによって、労働の機会を広く貧しい人たちに分配しようということを考えたわけですね。

全インド紡ぎ工協会というものを作ってですね、1920年代から40年代にかけてこのチャルカーラを普及、復活させる運動を大々的に行ってきました。

このチャルカーラ運動は、外国製の衣服を首尾よく排除することに成功しましたけれども、同時にすでにインド人の豊かな資本家が生まれてきて、彼らが国内に工場を作っていくことになって、そのインド人による工場製の機械製の綿布と、市場で闘わなければならなくなったり。機械製の綿布が市場を席巻してゆくということです。そこに掲げられている表には、1930年前後の工場と、全インド紡ぎ工協会の二つの組織が、どれくらいの綿布を生産し、どれくらいの人たちを雇っていたかという数字を書いておきました。1%にも満たないすごく少ない量しか生産できなかった。

皆さんもし経済政策の立案者だったら、どちらを応援しますか？やっぱりガンディーの経済思想は無理ですかね？無理だと皆思っていたわけです。だからガンディーは皆から非難されました。でも彼は48年に暗殺されるまで、決してこのチャルカーラ運動をやめると言ったことはないんですね。

皆さんに実験してもらった、力をもって打ち碎くというやり方は、ガンディーの政治思想にかかわる部分です。政治的な手法にかかわる部分です。今私がお話している部分は経済思想にかかわる部分です。政治運動は、ガンディーはしばしば中断しています。大きな非暴力抵抗運動は2回ほどあったわけですが、途中で運動が大きく盛り上がるところで、皆の期待を裏切って、やめてしまうということがしばしばあったんです。

チャルカーラ運動に関しては、20年代から40年代にかけて決してあきらめることはありませんでした。何故なのでしょうか。こんな非合理的なことが。大して大きな生産量があるわけでもなく、雇った人もたかだか12万人弱。

そのことを私も20年の間ずっと考えてきましたけれども、一つの答えが15年経ってから見つかった気がします。というのはその表の一一番下の行、数字が入っていません。百万ヤードあたりの雇用者数を、今ここで計算してください、とお願いしたいところなんですが、時間的な制約もありますのでその中に入る数字を申しあげます。工場の方が159人。対してAISAの方はなんと1万63人。

一般にこの手紡ぎ手織りは、生産性が低い、品質も悪いということで否定的評価されて、とくに経済学者はその手紡ぎ手織りに対して、良いという人はいなかった。しかし、この最後の一行、皆さんに記入していただいた数字を見るとなるほどガンディーはそこに経済的な合理性を見いだしていたんだな、というふうに了解していただけるのではないかと思います。堅苦し

い言葉ですけれども、非常に高い労働集約度を誇っていたということですね。

労働集約というのは、経済学の堅苦しい用語ですけれども、そこに労働がぎゅっと詰め込まれている、そんなイメージですね。もしインドが必要とする綿布を全部、先ほどのチャルカーラで作ったら、ガンディーは5000万人の人を雇うことができると計算していました。この計算を今日は紹介しませんが、私も確認しましたが、決して無理な数字ではありませんでした。しかしそうは言っても、現実にはどうなんでしょうか？現実には、そこに示されているように、綿布工場が市場を席巻していて、たかだか40万人の人々を雇って、多額の富を独占していたというのが國の現状だったんですね。

20世紀は資本主義と社会主義の対立の時代だったと言いましたけれども、マルクス主義者だったらどうしたでしょうか？おそらく私有財産を没収して、工場を没収して、それを国家の所有として、國家で運営していくということをしたのではないでしょうか。ガンディーはそういう考え方をとりませんでした。なぜか？資本家の意に反して、工場を没収することは非暴力の精神に反するからですね。そうではなく、ガンディーは、住む人たちの生活を同胞が助けていくことを求めていたんですね。

工場製が質がよくて値段が安かったとしても、皆でカーディーを買っていこう。それはあたかも稼ぎのない年老いた親や、子供を養うことが私たちにとっては恵みであるはずだ。それと同じように同胞を助けていこうというのが、インドの人に呼びかけたガンディーのメッセージだったんですね。つまり、権力や暴力によって社会を変えていこうというのではなく、人々の心を変えることによって社会を変えていこうというふうにガンディーは考えていた節があります。

初代首相のネルーは、ロシア革命に心打たれた、と言いましたけれども、村落を遅れたもの

だと見ていきました。

時代は違いますが、カール・マルクスも同じように考えていました。インドの村落を半野蛮的、半開明的と見ていきました。そしてインドの人たちは、下劣で不活動的だとマルクスは言っていた。そしてイギリスが、インドの村落共同体を破壊したことは、インド社会の一つの進歩であるとマルクスは考えていたんです。

ネルーは村落を遅れたものとして見ていました。社会主义の路線に沿った大工業がインドのとるべき道だと考えていました。場合によつたら、暴力革命、階級闘争、虐げられている労働者階級が資本家階級を武力で打倒する。そのことによって、社会は一つの進歩を成し遂げることができると考えるのがネルーだったわけですね。

それに対してガンディーはどうかと言うと、それとは全く考え方方が違っていました。ガンディーは、逆に村落工場が中心になるべきだと考えていました。それこそ、手紡ぎ手織りを中心とするような、そういう社会を考えていました。村落中心の社会建設を目指していたわけですね。階級間の対立に関しては社会主义者たちは財産を没収してしまう国家管理の下におこうとする。

これに対してガンディーは、こういうふうに言います。「私は小銃を突き付けて人間の心から悪を控除できるということを信じない」。これはマルクス主義による暴力革命を批判したガンディーの言説ですね。では、国内の貧富の格差はどうするのか。資本家と労働者の間の経済的な格差はどうするのか。搾取の問題はどうするのか。社会主义者の考え方に対してガンディーが唱えたのは、受託者制度理論。資本家はたくさん財産を持っていますね。財産は自分のものではなくて神様がその管理を資本家に任せた。資本家に信託したというふうにみなしなさいと。その財産は貧者のために使うものと考えなさい。自分のものとして使うのではなくて、

社会の良いことのために使いなさいと言うのがガンディーの受託者理論ですね。トラストされた人という意味ですね。

資本家たちは、「私はガンディーの通りに受託者として振るまっていますよ」と言うと、ガンディーを味方につけることができるような気がするわけです。そうすると、社会主义者の側から見て、ガンディーは資本家の味方、ブルジョアジーの手先である、というふうに批判されるんですね。

実際にマルクス主義的な観点からガンディーを研究していた先生方は、そうした目でガンディーを見ていました。『何だ、ガンディーはやっぱり、豊かな人たちの味方だったのか、ずいぶん私も悩みました。ガンディーを何とか再評価したいと思って、研究を始めたのに。何か月も悩んだのを覚えています。やっぱりマルクス主義者が言うように、ガンディーは資本家の味方だったのか。半年ぐらい経つてから、気が付いた事が一つありました。ガンディーは、本当に資本家の味方をしようとしていたのか、という問いを立てると、私は即座にYESとは答えられなかったんです。やっぱり彼は貧者を救済しようとしていたのではないか？ 受託者制度理論を展開して社会主义者たちと抵抗していたのか？ 考えると、ここは彼が賢かった点だと思います。

資本家の財力を使ってそれを先ほどのチャルカ運動に回すということです。一方では、資本家たちに受託者として振る舞いなさいという。そして資本家たちから多額の資金援助を受けて、それをチャルカ運動に投下していく。運動を通じて貧者を救済するというそういういわば車の両輪のような働きをしていたのではないでしょうか。受託者制度理論を一方において、チャルカ運動を他方に置く。たしかに受託者制度理論だけを切り取ると、なんとなく社会主义者たちが、批判するのも妥当性を持つように聞こえるんですけども。

そうではなくて、ガンディーの意図はそこにあったのではなくて、貧者を救済する方にあつたのだと、そういうふうに考えたら、ちょっとガンディーに有利な解釈というのが成り立つのではないかと思います。別にガンディーを救済するための論理構成をしようと思ったわけではありませんけれども、そんなふうに見えて來た。そうすると資本家たちにとってはチャルカーニ運動を支援するという負担が生まれてくるわけですよ。そうすると、彼は、富裕階級の擁護よりも貧者救済に力点があったのだというふうに考えるならば、やっぱりこの受託者制度理論はですね、インド社会が抱えていた問題を非暴力の方法で解決しようとしたということなのではないでしょうか。

そういう意味で言うと、やっぱりそれも、一つのゆっくりとしたペースではあったけれども、社会改革の理論だったというふうに積極的に解釈し直すことができるのではないかというふうに思ったのです。しかし今、一言で言ってしましましたが、その一言に半年ほどかかるんですね。気がついたときは嬉しいものですね。何か一つ自分で小さな新しい発見があったとき、これは言葉には表せない喜びがにじみ出でてくるものです。

マルクス主義者たちが批判した受託者制度理論と、これによって資金的に支えられていたチャルカーニ運動というのは、ガンディー運動の二つの大きな柱だと見ることができます。ガンディーはいったいどういう社会を作ろうとしていたんでしょうか。

それが次のところですね。理想の社会経済像ということですが、結局のところ彼は、インドに当時存在していた70万の村落、村々、これを中心にして社会を築こうとしていたわけです。理想の村落像ですね。衛生が管理していること。十分な光と換気があること。そして自家消費用の野菜を植え、家畜を育て、村には共同で利用できる井戸がある。礼拝場、集会所があって、

村の共有地があり、共同組合型の牧場があって、小学校や中学校があって、そして村落はそれ自体の穀物や野菜やカーディーを生産する…うんぬん…と説明されていきます。

これは、言ってみれば、人間の身の丈にあつた自然の中での簡素な生活、共同組合型の社会をガンディーは理想としていた。東京やニューヨークのような摩天楼が林立するような社会ではなくて、人々が住んでいる村を中心とするインド社会というのをガンディーは考えていたんですね。

だからこそレジュメにも示していますように、ガンディーはこのように言います。「独立インドが泣きうめく世界に対してその役割を果たせるのは、その何千という村落を発展させ、世界と平和を保ちつつ簡素で気高い生活を採用することによってである」。こういうふうに見ていきますと、ガンディーの思想というのは、どういうことなんでしょうか。

20世紀は、資本主義と社会主義が対立する時代でした。どちらも物質的に高度な、物のあふれた社会を目指していました。これとは違う、どちらとも異なるオルターナティブとしてガンディー思想というのは考えられるのではないかと思うわけですね。資本主義・社会主義とガンディー思想の間には、物質主義を目指すのか、目指さないのか、という大きな違いがあると思います。第三項としてみなしてもいいと思います。

もちろん全く物なしで生活することはできませんので、そんなことを言っているわけではありません。ただどこかにラインがあって、人間の生活を支えていく上で必要な物にできるだけとどまっていくことを理想とする考え方だと思います。

このガンディーの考え方には、のちにシューマッハー、この人は経済学者だったのですが、西洋の主流の経済学とは一線を画してですね、「スマート・イズ・ビューティフル」というベスト

セラーになった本を書いて、この人の思想に受け継がれていきます。実際に、世界の開発の領域でも、シューマッハーの思想がそんなに大きなウェートを占めているわけではありませんけど、一定の影響力を持って今日でも世界のNGOや草の根の開発を行っている人たちに影響を与えているんですね。

ガンディーのインドの文脈に戻ってお話を続けたいと思いますが、当時、ガンディーと同時代の詩人で、ラビンドラナート・タゴールという人がいました。インドが世界に誇る詩人ですね。ノーベル文学賞を取った人です。小学校もろくに出なかったわけですけれども、そのタゴールの目にはこのガンディーのチャルカ運動は非常にばかげたものと見えたわけですね。タゴールとガンディーは互いに敬愛し合っています。例えばマハトマ・ガンディーと言うときのマハトマとはガンディーの称号なんですが、「偉大な魂」という意味なんです。ガンディーをマハトマと名付けたのは、実はタゴールだと言われています。

その互いに敬愛し合っていたタゴールとガンディーですけれども、ことチャルカ運動に関してはタゴールは激しくガンディーを批判いたします。レジュメに記してある通りですが、「現代は西洋の力強い支配を受けてきた。それが可能だったのは、人類のために果たすべき大きな役割を西洋が有していたからである」つまり植民地支配を西洋の使命だったとタゴールは肯定しているわけです。西洋との協力を保つことが悪いというのは、田舎気質の最悪の形式を奨励するものであり、つまりガンディーの事を言っているわけですね。外国製の衣服を買ってくるのではなくて、自分たちで紡ごう、と言っているわけですよ。それは知的窮屈を生むにすぎない。これに対してガンディーはですね、反論をいたします。この反論は詩的な響きがあって、私は好きなのですが、詩人に対してガンディーがこのメッセージを返したというところに、何

か意味があると思うんです。

「私は自分の家に垣をめぐらし、窓を閉めることを望みやしない。私はすべての国々の文化的な息吹ができるだけ自由に家の中を流れることを願う。しかし私はその風に足をさらわれることを拒む」

外国との文化交流は大変結構ですけれども、だからと言って自分の同胞を貧困に追いやってまで、外国製の衣服を輸入するというのは間違いでいるという意味ですね。ガンディーはこのメッセージを返した直後、ポンペイにおいて、外国製の衣服を焼き払うという運動を開始します。

焼き払うと言っても、外国製の衣服を売っているお店を焼き打ちするという意味ではありません。人々に呼びかけて、私たちが着ている外国製の衣服に火をつけようと呼びかけるわけです。ガンディーのメッセージに共鳴した人々は、自分たちが持っている外国製の衣服を提供します。なんと15万着の外国製の衣服が高く積み上げられて、そこに厳かに火をつけるわけですね。

これはインドの人たちの民族意識に火をつけたという意味があったでしょう。ガンディーがそれをやったあと、インドの各地で同じような試みがなされるようになりました。このことの持つ意味というのは、大きいですよね。イギリス人はまさか、インド人がそんなことすると思っていない。

各地で衣服が焼きはらわれて、そして同時に、インド人は自分たちの衣服をチャルカで紡ぎ、そしてカーディーを着ると。少なくとも建前として。実際に機械製で作られた綿布がカーディーと偽られて売られていたということも報告されていますが、それもそれだけブームになっていたということの証だと思いますね。ガンディーは、ポンペイで外国製衣服を焼きはらう。タゴールは、各地でそれが行われる光景を見て、「それは知識と教養に鍵をかけることだ」

と嘆くわけですね。ガンディーは、糸を紡げ、布を織れと言うけれども、そのメッセージは果たして、新しい時代の新しい創造への呼びかけであろうか？」タゴールはそうではないと思っているわけです。

もし大機械が西洋の精神に危険であるなら、小さな機械は私たちにとってもっと悪い危険ではないかと、タゴールはガンディーに囁みつくわけですね。これに対するガンディーの反応は、非常に感情のこもった、最大限こもったものだと言つていいと思います。

少し長いものを最大限短くしましたが、それでもこれだけの長さになります。読んでいきます。

「私のまわりの人々が、食物がないために餓死しつつあるときに、私に許される唯一の仕事は飢えた人たちを養うことである……チャルカーこそ幾百万の瀕死の人々にとっては生命である。……詩人は明日のために生きる、そして、私たちも彼と同じようにすることを望むであろう。……飢えた人たちの苦しみを、カビールの歌で和らげるとは不可能なのを見た……。食うために働く必要のない私がなぜ紡ぐのかと人は尋ねる。それは、私は自分に属していないものを食べているからである。私は同胞をかすめて生きている。あなたの懷中に入ってくる全ての貨幣の跡を探ってごらんなさい。……糸を紡がねばならない。何人も紡ぐべきである！ タゴールも紡ぐがいい、他の人々と同じように！」

「彼も外国製衣服を焼くがいい！ ……それが今日の義務である」と言つんですね。

ものすごい反論です。これに対しタゴールは黙ってしまいます。もうそれ以上の反論をタゴールはやめにしました。なぜやめたんでしょうか。本当のところは分かりません。タゴールはガンディーの言うのが正しかった、というふうには思えないですね。ガンディー研究の大先輩である森本達夫先生は、そうではなくてタゴールはやはり詩人としての自分の分をわきまえた

のではないとおっしゃいます。政治運動はガンディーに任せるということだったのではないかというふうに説明していますが、多分そうだろうと私も思います。

タゴールとガンディーはお互いに敬愛しあっていましたので、ここだけを切り取ると、非常に仲が悪かったように見えててしまうのですが、それは、二人の関係の中では、ほんの一部分だったんですね。人間関係というのはそうでありたいなとしみじみと思うものです。

タゴールよりもしばらくあとの人で、元気で活躍されている人ですが、アマルティア・センという人がいます。この人はインドが現在、世界に誇っている大経済学者です。タゴールがノーベル文学賞を取りましたが、アマルティア・センはその教え子であって、実はアマルティアの名付け親はタゴールだと言われています。アマルティア・センは、インド人で初めて、アジア人で初めてノーベル経済学賞を受賞した経済学者ですね。

アマルティア・センは、貧者にやさしい経済学者としても語られる部分がありますし、センの経済学を少し勉強させていただいて、ガンディー思想とも通じるところがあると思ったので、尊敬の念を込めて勉強してきました。しかし、チャルカーラ運動に至っては、センはタゴールの側に立って、チャルカーラ運動を見ているということですね。

タゴールの方が経済的判断は正しかったというふうにセンは見ています。センは、1960年にチャルカーラの発展形で、アンバル・チャルカーラというのを研究するのですが、いくつもの紡錘のついた、まるで一見機械のような代物なんですが、それでもやっぱり手動で回すという意味では、動力機械と異なるもので、チャルカーラの発展形なのです。この技術的可能性について研究したことがあります。結局、センの結果は、どんどん費用がかさんでしまうインフレ的で、資本蓄積にはマイナスに働いてしまうとい

うことでした。つまり、やっても無駄だということを言外に含んでいるわけですね。あまり多くを提供するように見えないとセンは言います。

大経済学者のセン先生がそうおっしゃるのだから、やっぱりチャルカーモーションは無理なのかな？ 私はまた、ここで打ちひしがれます。何度もなく。しばらく悩むのですけれども、どうもそこで頑張ってみようとなります。ガンディーは、本当に資本蓄積を目指していたんでしょうか？ おそらくそうではないと思います。

むしろ小さな経済において、大規模な経済発展ではなくて、小さな経済において、みんなが暮らしていくこと。貧者を救済すること。それを求めていたのであって、経済発展に寄与しないからといって、チャルカーモーションを批判するというセンの議論というのはどうも否定的に見えてきました。資本蓄積にマイナスであっても、さほど支障がないと言うのがガンディーの考え方ですね、おそらく。

そういう議論を彼と交わしたわけではないので。もう彼は亡くなっていますので、難しいのですが。後の時代から振り返ってみるとそんなふうにも見えてくるということですね。

さて、ガンディー思想も非常に乱暴ですけれどもお話をしましたし、それに対するタゴールやセンの批判も紹介しました。いよいよ現代の文脈に時間的に戻って、お話をまとめていかないといけないと思います。このグローバル化時代において、ガンディー思想というのは、どういう意味があるのかを考えたいと思います。今紹介したセンによる批判も踏まえて考えてみると、21世紀のこのグローバル化という時代は、未曾有の物質的な発展を遂げて、空前の規模と速さで地球の資源を消費し、環境を破壊するプロセスなのです。1981年に、エーリックという人が、『絶滅』という本を書いていますが、この段階で存在した生物種の20%が20世紀の最後の20年間に消滅するだろうという予測を紹介し

ています。その通りになったかどうかを確認していませんけれども、人間生活が相変わらなかったとするならば、おそらくその予測は正しかったか、あるいはそれ以上の速さで他の生物種が絶滅に追いやられている可能性があると思います。

そのまま21世紀に私たちは突入したわけですけれども、人類を含めた生態系が危機にさらされている時代です。その大元は何なのでしょうか。私たちを含めた人間の生き方であって、他ならぬ経済発展の結果だと言っても言い過ぎではないですね。

こうしたグローバル化。これはロータリーの精神などが世界中に共有されていくという面で見るならば、このグローバル化というのは必ずしも悪いことではないと一方では思います。しかし、経済の側面から見ると、あまり近代化の波の及んでいない社会が次々と近代の市場の社会に包摂されていく。チベットの秘境で、お坊さんたちがウォークマンを聞いている写真が、写真コンテストで大賞を取ったりするのを何年か前に見たことがあります、どんどん人間の欲望が、素朴な生き方をしていた人たちの社会においても、拡大されていくというプロセスですよね。それが本当に良いことなのかどうか。

そのグローバル化に関して、センは、それは良いことだと考えている節があります。グローバル化は数千年にわたって、旅行、貿易、移民を通じて、世界の進歩に貢献をしてきた。世界の貧者から現代技術や国際貿易を取り上げて、その経済的苦しみを改善することはできない。ですからグローバル化の中で貧困は解決されていくというシナリオをセンは描いていたということです。ガンディーのチャルカーモーションに対しては、タゴールが「田舎気質の最悪の形式」と言って批判しましたけれども、センの立場は、こうしたタゴールの立場に非常に近いものがあるように思います。

ですからチャルカーモーションを復活させようというガ

ンディーの考え方には、おそらくセンの目には世界の進歩に反するものとみなされるでしょう。

センは、「従来の経済発展とは異なって、人間の開発の目標というのは、経済発展そのものではないのだ。人間の自由の拡大、これが大事なのだ」と言います。「所得の上昇よりも、人間の自由の拡大の方が重要なのだ」と言います。

しかしながら、この人間の自由の拡大のために、所得の上昇も決して否定することはない。つまりこれ自体が、究極的な目標ではないけれども、人間の自由を拡大していくうえでは、所得の上昇も必要だと考えるし、そのためには市場も大事であるし、これを支える利己心だって重要なのだとセンは考えていくわけですね。そう考えると従来の経済学者とあまり変わらないんですね。

ガンディーの側から見るとどうかと言いますと、先ほどのチャルカーブ批判、タゴールの批判をセンは評価するわけですけれども、タゴールと並んでチャルカーブを批判するセンはで、シンプルな技術の利点を見ようとしているわけですね。化石燃料を使わない。そして、人間の力を使って物を作っていく技術の良さを軽視しています。一般に技術が高度化していくと化石燃料の消費は飛躍的に増えていくはずです。今、移動の手段がどんどん発達して、私も今日、これが終わったあと、1時の船で、高松に行くのですが、35分に高松港に着いたら友達にこの荷物を預けて、5分でマリンライナーに乗り換えないといけないんですね。

それでこのあと山梨の山中湖畔のある大学のセミナーハウスで次の研究会に参加することになっているですが、それに乗れないといけないんですね。こういう講義をさせていただいている、なんと自分は矛盾に満ちた人間だろうとつくづく思いますが、そうしたテクノロジーが発達することによって、人気は限られた時間の中でたくさんのイベントに参加することができですから、その分、化石燃料を消費するというこ

とになっているわけです。

私が、他の仲間が山中湖で仕事することができれば、おそらく山中湖のセミナーハウスは夜に電気を付けないで済むわけなんですね。そうすると、どんどん人間の活動が活発化すればするほど、テクノロジーの発達に合わせて化石燃料が消費されていくということです。

それからセンは、「貧者は、最も豊かな人々が手にしている社会的、経済的チャンスから遠ざけられている」と言います。センは、貧者に対して非常に優しい目を持った経済学者と見えてくる。ところが他方で、ヨーロッパ、アメリカ、日本、東アジアで起こったことは、他の全ての地域に重要なメッセージを持つといいます。つまりヨーロッパ、東アジア、アメリカ、日本で起こった経済発展は、まだ経済発展していない地域に対してお手本を示していますよ、とセンは言うわけですね。このときに私は、こんなふうにして違った見方をしてしまうんですが、皆さんどうでしょうか？

センはこの伝説を提示したときに、もっとも豊かな人々が、現在手にしている社会的、経済的なチャンス、こちらを疑うということはしていないわけですね。貧者が、そうしたチャンスから排除されていると言ったときに、そうしたチャンスを享受している我々の側の生活のあり方を客観的に、あるいは批判的に見ようすることはしていないわけです。すでに、高度に発達した文明社会を所与のものとし、これをそれ以外の国々が到達する目標として掲げているところがあります。

ですから一方で、貧困について語りながら、他方では富裕については語らない。もしかしたらですよ、もしかしたら貧困と富裕というのは、関連性があるのかもしれないですか。最初にエチオピアの話をしましたけれども、もしかしたらエチオピアの貧困と私たちの豊かさというのは関連があるかもしれない。合衆国とブルンジ、日本とブルンジの一人あたり所得が

400倍も違うというときに、彼らは私たちと同じように、400倍飛行機に乗れる時代がくるとは、おそらく思えないわけですね。そうすると、一方の貧困を語るときに、他方の富裕も一緒に考えなければいけないはずです。それこそが南北問題の意味だと思うのですが、センは一方の貧困については語るけれども、他方の富裕については語らない。

ですから人間の自由の拡大ということをセンが言うのであれば、貧しい国の人々の自由の拡大をする時に、豊かな国の人たちの自由が著しく削減されていくというシナリオをセンは考えているように思えないわけですね。私たちの最も幅の広い自由をそのままにしておいて、残りの85%の人たちが、同じだけの自由の幅を享受できると思いますか？そのためには今の何倍もの資源が必要になるし、破壊されるべき環境が数倍必要なってくるということになると思います。

地球が、資源が無尽蔵に取れるところだったらよいのです。環境をいくら破壊してもへっちゃらだったらいいのですが、そうではないですよね。そういうふうに考えてみると、他方にあるガンディー思想というのはセンの考え方とは違って、簡素な社会を理想として貧困というものを他方の富裕と一緒に考える傾向があります。一部の人々の富の是正をマルクス主義者のような強制力を働かせようとしないけれど、人々の心を変えることによって、やっぱり是正して貧者を救済しようとする。

もし社会ができるだけ長く持続的にしようとするならば、最も豊かな人たちが、自分たちが必要とするものを少しずつ、難しいことですが自発的に削減していく、諦めていくということが必要なのではないでしょうか。

貧者の自由の拡大と言うのは、それと同時に囮られる必要があるわけです。そういうふうに考えていきますと、グローバル化の流れを反転させる契機は、おそらくセンではなくて、ガン

ディーの思想の中に見出すことが出来るのではないかと思います。

今日の話の結論にいきたいと思いますが、「発展と平和」という大きなタイトルを掲げました。これらはグローバル社会が追求している二つの大きな目標です。これについては、二つの考え方があります。一つは、貧困は平和を脅かすので、経済発展こそが平和への道である。こうした考え方に基づいて、多くの知性が、経済学者を含めた多くの研究者たちが、貧しい国々の発展をいかに遂げるかということを考えきました。どうやったら、貧しい国々の所得水準をあげることができるかということを考えました。西洋の社会は18世紀の産業革命以来、めざましい経済発展を遂げてきました。その発展の波というのは、日本や東アジア、それからソ連や中国やインドも含めて、正にグローバルな範囲に及ぼうとしています。これが一つの考え方ですね。

もう一つの考え方は、いやいや資源というのは限られているので、やみくもな経済発展というのは平和を脅かしてしまう。このヨーロッパに始まったグローバルな規模で進んでいる経済発展は、実はますます少なくなっていく資源をより多くの社会が、そしてより多くの人々が、奪い合うという状況を生み出しています。

近代の戦争が、たぶんに市場や資源をお互いに獲得することを目的として行われてきましたが、そのことを思いますと、21世紀というのは、紛争の火種がいっそう大きくなっていく可能性があると思います。もう人間は2回も大きな戦争をしているので、もう第3次世界大戦はありえないと思う人もあると思いますが、最近ではアフガニスタンやイラクでもいまだに戦争が続いているわけですね。

日本もだんだん不穏な社会になってきていると思いますが、比較的穏やかな社会で、かつての私もそうでしたが、一見あまり世界のことに関心を持たずとも十分生きていける社会かもし

れません。しかし、資源がますます激しく奪われていくことを考えると、紛争の火種を実は大きく抱えたまま、人類は21世紀に突入したんだな、と思うわけですね。

貧困を克服しようと思って始める経済発展が、結局、平和を脅かしてしまうという構図がそこにはあるわけですね。そうだとすると、一つの矛盾がそこに潜んでいることになるでしょう。

今日は、堅苦しい話をしましたけれど、一つだけ覚えて帰ってください。それはですね、次に掲げているガンディーの言葉です。強烈なメッセージです。読んでみます。「地球はすべての人々の必要を満たすのに十分なものを提供するが、すべての人の貪欲を満たすほどのものは提供しない」。

人類の現在世代は、私たちを含めた、ますます少なくなっていく資源をお互いに奪い合っています。実はそれだけではないんです。将来生まれてくる世代からもそれを奪っているということです。21世紀はグローバル化と、よく言われますけれども、その美名の元にますます多くの人たちが資源の争奪戦に参加するのか、それともこれから生まれてくる世代のことも考えて、よりシンプルな生活に満足をみいだすのかの選択を、迫られるということだと思います。

もし、後者の道を選ぶとすると、シンプルな生活に満足する、それはまず最初に現在最も豊かな生活をしている人々が、その豊かさを諦めしていくということを意味するでしょう。しかしそうした社会に生きている私自身、携帯電話を持っている私、そしてこれから新幹線に乗って山梨に行こうとしている私にとっても、決して簡単なことではないと感じるわけですね。こういう話をしながらいつも矛盾を感じて生きているんですね。この苦しみ、お分かりいただけますか？ 私自身は、やっぱり二つの選択肢があって、こうした自分を前提として、人間っていうのは利己的なんだと。だから利己心に任せて、

みんなが行動すればみんなハッピーになりますよと、こういう経済学はいっぱいあるんですね。そういうのをやろうとすれば出来るわけですよね。

しかしそうではなくって、自分自身も批判の対象の中に含めながら、やっぱり学問的な細やかな営みをやっていく方を自分は選択しているんだなと思います。ですから矛盾を抱えながらいつも歩いているという感じですね。

ここで非常に悩むわけですね。人間の可能性について。人間というのは、多くの経済学者が言うように、あるいはネルーが考えていたように、多くの社会主義者たちも考えるようやけに利己的なんでしょうか？ ガンディーの考え方方はやっぱり理想で終わってしまうのでしょうか？ 現実的ではないのか？ やっぱりダメなのか？ センが言うようにチャルカ運動はダメ？ タゴールが言うようにダメ？ やっぱりガンディー思想というのは、絵に描いた餅なんだろうか？ というような悩みに襲われるんですね。

しかし、そこでふと立ち止まるのは、ガンディー自身はどうだったかというと、彼はけっして人間に対する信頼を失わなかったということなんですね。彼が生きていた時代というのは、けっして生ぬるい社会ではなかった。彼が目にしていたのはヒンドゥー教徒とイスラム教徒が血で血を洗う、争いごとを繰りかえしていた社会です。これはイギリスの分断政策の結果でもあるんですが、ガンディーは二つの大きな宗派が手と手を取り合って、仲良く独立インドを作っていく、イギリス人から一つの国として、民族として、独立していくことを悲願としていたわけです。けれども、結局、パキスタンとインドに分かれて独立してしまったわけですね。

皮肉なことに、独立運動の第一の後継者であったガンディーはインド独立式典には参加せずに、一人自分の家で断食をして、祈りの日としたんですね。新生インドの最大の悲劇というか、

皮肉の一つだったわけですね。そうした血で血を洗う抗争を両宗派が繰り返していました。またインドにおいては、不可触民制度というのがありました。カースト制度と並んで、触ると汚れると言われた差別を受けていた人たちがいたわけです。ガンディーはそれに非常に心を痛めて、運動をしていました。非常にひどいことですよね。

どれだけ人々が殺しあっても、どれだけ差別しあっても、ガンディーはそれでもなお、インドの向上を感じていた。必ずそうした悪は是正されると信じて運動を続けていました。そして、何よりも長い間、イギリス人から支配されてきたわけじょ。そのイギリス人を友人として送り出すということをモットーとしていたわけですね。人間に対する信頼を失わなかった、ということを考えると、簡単に人間は利己心に満ちたものなのだから、と切り捨てるともできないと思います。

最後ですね。ロータリーのセミナーですので、私もサイトを開いて勉強させていただいたのは、超我の精神というのがロータリーの標語にもなっているわけですね。英語では Service Above self と書かれていますが、言い換えると分かち合いの心であって、こうした精神が21世紀にも求められていると言えるわけです。別にご機嫌を取るつもりは全くありませんが、そういうことなのだと思いますね。ですから必ずしも悲観的になる必要はないと思い直すわけですね。どこか可能性を信じて、これからも学問的な営みをしていきたいと思うし、皆さんと平和と発展について考える機会があれば、またじっくりお話しをしたい、私自身は、そしたら奉仕活動に参加するということが難しくて、余裕が全くありませんけれども、皆さんの活動には心から敬意を表しております、端で拝見して応援したいというふうに思っています。

今日はまだまだ本当はお話したいこともたく

さんあるんですけども、時間もおしてまいりましたので、ひとまずこれにてお話を終えさせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

○司会・日野 山梨に行かなければならない時間ですけども、一つか二つかどなたかにご質問をいただきたいのですけども、どうでしょうか？

○受講生 ネルーとガンディー一族の人たちが少なくとも、ガンディーが言っていたことと、ずいぶん違った結果をもたらしているような印象を受けるのですけども、そのへんはいかがでしょうか？

○石井 うまく答えられるかどうか分かりませんが、なにしろ、インドが独立したのは1947年で、ガンディーは翌年の1月には暗殺されて亡くなっているんですね。

初代の首相がネルーでした。ガンディーはもう、文字通り世には存在していませんでしたので、ネルーが政権をとつてからというもの、ネルー主義というようなものが国の政策の特徴になっていきます。それは社会主義的な色彩を一つに持っていましたけれども、大規模工業化を推進するという政策だったんですね。

ですから、ガンディーのような小さな経済というのとは大きく異なる考え方だったわけです。ネルーのあとは、インディラ・ガンディー。これはよく誤解されるのですが、インディラ・ガンディーは、もともとは、ネルーの娘で、インディラ・ネルーだったのが、たまたま結婚した相手がガンディーという姓だったのですから、インディラ・ガンディーと言われるようになっただけです。誤解のないようにお願いします。

ネルー、インディラ・ガンディー、これは親子だったわけですね。間に短い政権があります

けれど、息子のラジブ・ガンディーと、ネルーの血を継いだ人がずっと首相を務めてきた国です。ですから全体として見てみると社会主義の色彩をもった大規模工業化というのが国全体のあり方だった。インディラ・ガンディーにいたっては、原子力開発を進めていくことにもなったし、ラジブ・ガンディーも後半になると社会主義的な色彩から市場経済に転換しますけれども、それも物質的な発展をいかに遂げるかという目標を掲げてのことです。ガンディー思想というのは、国全体の政策で見ると、余り色濃く反映されているとは言えないですね。

ただ市民運動のレベルで言うと、ガンディーの思想を引き継いだ人たちが現在でも活躍をしています。それは経済的な規模から見たら小さいですけれども、まだ残っている。全体的なウエイトは小さいというイメージで私はとらえています。

**○受講生** 今まで経済について説明されたのですが、医療の発展から見たガンディーの考え方というはどうなんでしょうか？

医療にはいろいろな発展があって欠かせないものですが、それに対して、ガンディーの考え方はちょっと合わないかな、ということがあるんですけども。

**○石井** ガンディーは近代文明を批判しましたので、近代的な医療技術も全部批判していたかというと、時代によって違うんですね。一般には、お医者さんが増えると病人が増えるというふうに考えて、お医者さんは要らないと言っていたときもあるんですが、そうではなくて、のちにはもっと柔軟になって、たとえばインドは、衣服は自分たちで作るけども、注射針などは自分たちでは作れないで、これはイギリスから輸入するべきだと考えます。ですから近代文明批判も、あとでは少し柔軟になってきます。

そういう細かいガンディー思想の変化については、今日は語る時間がなかったので、たぶんそういう質問が出てきたんだと思うんですね。人間の生活に必要な医療というものを彼が否定していたわけではないと考えていただいていいと思います。

### ○受講生 質問内容（調べる必要）

**○石井** イギリスに行って弁護士の資格を得て南アフリカで活動し、独立運動を指導した。そのインドが貧困になっていった原因の一つに、言葉も非常に関係していたわけですね。なぜ自分たちの言葉を捨てて、外国語で勉強しなければいけないのか。イギリスの言葉を使うことによって、イギリス人の考え方を叩き込むというのが、植民地における教育の目的だったわけですね。近代的な教育制度をインドに敷いたのは、イギリス政府です。イギリス政府の目的というのは、英語を通じてイギリス的な思考をインド人に吹き込んでいくことだった。それに対してガンディーは、反対しようとしていたということです。ですから、長男にもそれを求めたんですね。

**○渡部** 遅れて質問して申し訳ないですが、神戸から来ました渡部と申します。それを達成するために個人の道徳心に依存するしかないのか、それとも制度的に何かもっと改善できる点はあるのか、という点と、あと先生はいろんなことを知っていますが、今後の世の中を楽観的に先生は見ておられるのか、今後はどういう世界になると先生はお考えになるのか、そのへんをちょっとお聞かせください。

**○石井** 非常に本質的な質問ですよね。一つめ、ガンディー思想というのは、人間の心を変えることによって社会を良くしていこうということだと思うんですが、同時に、それによって

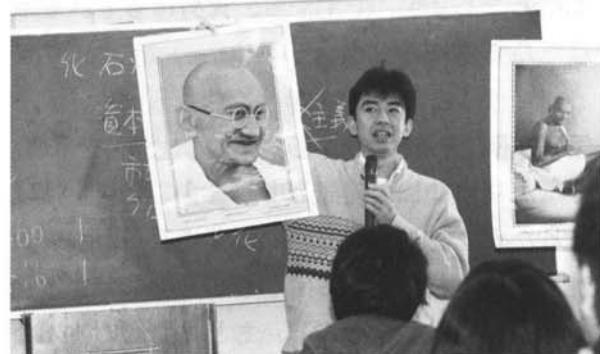
支えられていく社会の変化のあり方があるんだろうと思うのです。けれども私自身も運動をしてるわけでもないし、ガンディーのことを勉強するのが仕事なので、よくわからないところありますが、マルクス主義者たちは人間の心を前提として社会を変えていく、人間の性悪説に立つて社会が強制力を働かせて変えてかなければいけないという立場だったと思いますが、それと比べるとガンディーは、もっと人間の可能性を信じていたということだと思いますね。人の心と社会が歩調合わせながら変わっていくというシナリオだったろうと思います。

私自身が今後の世の行く末をどう見てるか、さっきお話したことに若干戻るかもしれません、一瞬悲観的になってしまふんですね。石油だってあと50年くらいしか持たないんですよ。それを考えると、多くの国々がますます資源を欲するようになってくるだろうなと。世界が一瞬にしてハイブリッド車にはならないでしょ、おそらく。最も所得持ってる国からハイブリッ

ド車が使われるようになっていって、まだ中所得の国々は日本が10年20年前に使ってた車を乗って、それを乗り終えてからハイブリッド車に移行するわけですね。ますます多くの人たちが石油に依存する社会になってくると、ちょっと悲観的ですね。一人ひとり考えていかなければいけないと思うんですね。みなさんが携帯電話やめると言ったら、私も「はい、やめます」と言うんですが、なかなかこういう社会にいると、携帯電話も一旦持ってしまうと捨てられないし、新しい欲求が開発されて、それを保証するテクノロジー生まれると逆戻りするのが難しい。すると、悲観的になってしまいます。しかしながら、方向転換できないものかと思ってます。

○司会・日野 じゃ、これで今日の講義は終わりたいと思います。どうも、ありがとうございました。

#### Ⅰ. 第2680地区RYLA連宮委員会





## 私たちと社会

フォーラムリーダー  
深川 純一 氏



○司会・日野 集まりましたでしょうか。では、フォーラムを始めたいと思います。今からの進行とご指導は、深川先生と安行さんにお願いしたいと思います。

○安行英文 それでは各グループ発表の順の抽選を行いたいと思いますので、各班代表の方、前に出てきていただけますか。A、B、C、D、ジャンケンで勝った方から好きな順を選べるのにしますか。……では、順番は、A、B、D、Cの順で行います。では、ここで、深川先生の方からお話を伺いたいと思います。

○深川純一 では、今からフォーラム始めたいと思います。A、B、D、Cと発表していきますが、まずAが発表して、それについてわかりにくい点があればご質問ください。「こういうこと書いてあるけど、どういう意味ですか」とか、それだけです。それについての議論は、待ってください。ディスカッションは全部の意見が揃った後で入りますから、最初の発表の時はわかりにくい点への質問だけ確かめてください。それだけ、心得ておいてください。ではA班、どうぞ発表してください。

## バズセッション報告 A班



○A班（妹尾健裕） これからA班の発表を始めます、よろしくお願ひします。社会についての話し合いの中で、様々な意見・考え方が出てきました。どの内容も大事なことなので、どれを選ぶでなく、すべての意見・考え方を4つにまとめました。そのまとめた内容を、これから発表していきます。

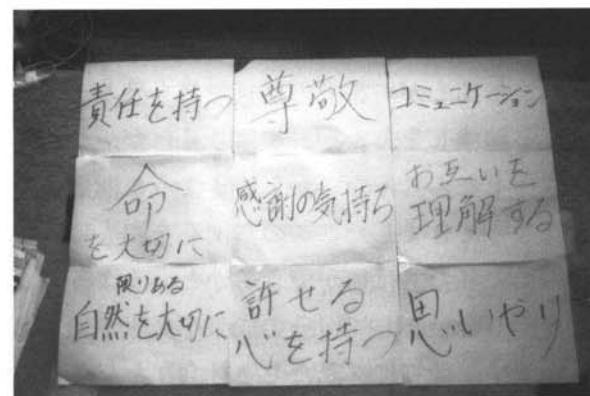
まず社会についてまとめたことは、いろいろな価値観を持った人が互いに生活する空間や場所が社会であり、人と人とのつながり、役割、ルールがある世界のことだと思います。その中には自由もあり、歴史もあります。身近な見ている範囲、たとえば家族、会社、地域、また昨日の高山先生や本日の石井先生の話にあったような世界情勢も含め、幅広いものが社会であると思います。また赤ちゃんの時から子どもも含め社会の構成員であるため、生まれ、この世に生を受けた時から社会の一員であると考えています。

次に、現状と問題について発表します。社会の問題として出てきた意見として、自己中心的、お金、利益中心的な社会、過剰物質的な豊かさの追求、差別のある社会、ミスを許さない社会、ラベルを貼り決めつける世界、愛国心を持っている人が少ないという問題点が出てきました。またコミュニケーション能力が低下し、人間関係のトラブルが起こったり、豊かになり過ぎてすることでモノを大切にする意識が薄れてきています。特に最近ではニュースなどで悲しい事

件が毎日のように報道されており、人の命の重みが軽視化されているように思います。社会全体が自分中心になり、それ以外のことについて無関心になっていると考えます。このように、たくさんの問題点が出てきました。これらの問題点を解決する方法がないか、僕たちにできることはいかをみんなで話し合いました。

まずはコミュニケーションが重要だと考え、人に关心や興味を持つことで人とのつながりを増やす必要があります。そのためには感謝の気持ちを忘れず、寛容な気持ちが重要だと考えました。また個人が自立できるようになるための教育として、日本の文化や伝統、歴史を受け継ぐ人材が必要だと思います。先ほどの問題と解決を踏まえて、社会と共に存していくためのキーワードとして、次の意見を求めていきたいと思います。コミュニケーション、お互いを理解する、思いやり、尊敬、感謝の気持ち、許せる心を持つ、責任を持つ、命を大切に、限りある自然を大切に、リサイクルなどが挙がりました。様々な意見を交換する中で、私たちは社会の中で生かされている、それぞれの役割を持って生きているということを感じるようになり、私たちが社会の中でできることって何だろうと考えるようになりました。

その中で出てきた一つの答えは、より多くの役割を持って居心地のいい社会を作るということです。小さなつながりが大きなつながりになるので、少しでも仲間を増やすことが大切だと



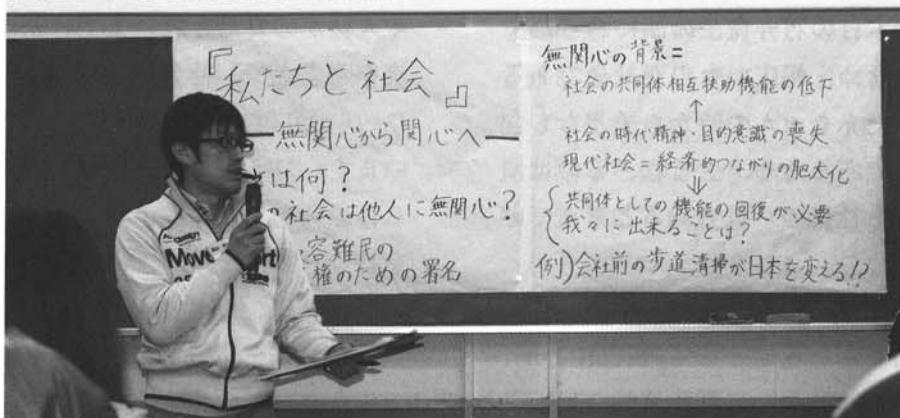
思いました。私たちが明日からすぐにでも実行できることは、様々な配慮をしながらお互いに関心を持ち、お互いを知り、認め合い、結びついていくことだと感じました。以上でA班の発表を終了します、ありがとうございました。

○深川純一 今A班発表ありましたが、何かわからない点あつたらご質問してください。なければ次の班に移りますが、よろしい？ じゃ次の班、B班の人、お願ひします、発表してください。

## バズセッション報告 B班

### 第32回 RYLAセミナー

2010.3.25～3.28 於.神戸YMCA余島野外活動センター  
主催：R.I.第2670地区・R.I.第2680地区RYLA運営



○B班（植田杏奈）では、私たちと社会、無関心から関心へと題しまして、私たちB班のまとめた内容を話したいと思います。よろしくお願ひします。

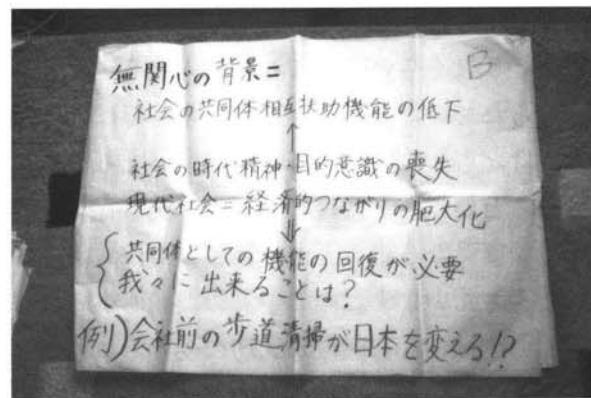
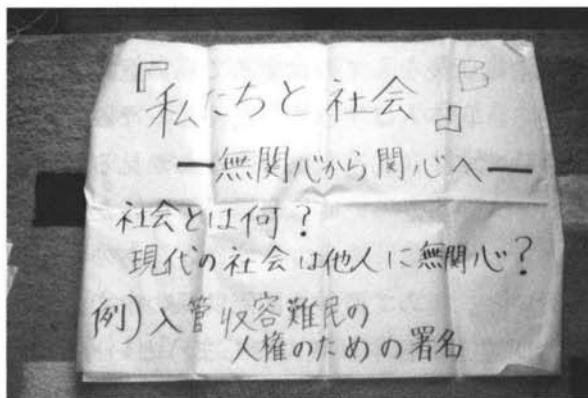
○B班（福山太一）この“私たちと社会”というのを考えるに当たって、無関心というのがキーワードなんじゃないかという話が出てきました。ちょうど、昨日のマザーテレサの話ですね。無関心が一番愛の反対で最も恐るべきことだと勉強しましたが、やはりそれが一つのキーワードなんじゃないかというような問題意識が深まってきた。この無関心を関心に変えるために私たちは何ができるかというようなことを話し合いまして、その成果を発表させてもらいます。最初に“私たちと社会”と与えられ

ましたけども、これは問い合わせないと。「私たちと社会とは何ですか」であれば「こういうもんです」と言うんですが、問い合わせても何でもなくお題が出されている。じゃあまず解題していくということで、まずは社会という意味は何だろうかってことから話し始めました。いろいろあるんですが、社会というものは一体何だと思われますか？

×× 私たちが生きる上で関わるもの全て？

○B班（福山太一）なるほど、一つの意見かもしれません。では、社会とは？

×× 私たち周りのもの全てです。



○B班（福山太一） ありがとうございました。我々もいろいろ考えたんですけど、ちょっとズルをしてしまって、フロントの方に新明解国語辞典というのがございましてカンニングをいたしました。そこには何て書いてあったか……。

○深川純一 ちょっと待ってください。今もうディスカッションしかけたんですが、そうじやなしに意見だけ発表してください。ディスカッションは、その後。最初申し上げたように、ここでは発表するだけですので。

○B班（福山太一） 了解しました、続けさせていただきます。フロントで新明解国語辞典確認したんですけども、その中には広い意味で共同生活を営む人の集団、狭義では特定仲間意識を持つ人々の集団を指すという具合に書いてました。

つまり社会とは、共同体であるということで簡単にまとめられると思います。人間、私ではなく私たち、人間というのは結局集団を作らざるを得ない宿命を背負っていると思うんですけども、そういうものが社会であると。共同する本質的なものであるという考えが出てきました。そういう社会で何を成すべきかという行動倫理も生まれるでしょうし、いろんな社会ルールに沿ったものが生まれてくるというようなことはないかと考えました。

けれども現代の社会は、共同体であるはずな

のに他人に対して無関心じゃないかという話が出てきました。こういう、無関心じゃないかと思わせる経験が我々にはある。それについて、ちょっと説明してもらえますか。

○B班（植田杏奈） 無関心というキーワードで一例しか挙げられませんが、私が日々関わっているボランティア活動のことを話したいと思います。

私は大阪大学に通っているんですけども、その近くに西日本入国管理局外国人収容センターという所があります。そこには日本の入国管理办法に違反した人、日本でビザが取れなくてオーバーステイで不法に滞在しているということで収容されている外国人の方々がいます。

この中には、政治的あるいは宗教的理由から逃げてきた難民の人たちも収容されています。日本は世界の難民条約というものに加入してまして、難民が国に入ってきたら保護する責任があることがあります。しかし日本は、その難民を認定する基準がとても厳しくて、一昨年の例で言いますと 1,500人ほどの難民申請者の中からたったの60人という人たちしか難民と認められませんでした。残りの人たちは強制送還や、ホントに帰れないということであれば収容者となります。

私たちがボランティア活動してた内容の一つに、署名活動というのが去年末にありました。これはあまりにも酷い収容環境に対して、たと

えば宗教のことも考えられない食事の問題であったり9畳くらいのところに10人くらいが押し込められていたり、長い人は1年2年になるんですけども太陽の光も浴びずにずっと収容されているということに対してです。拘禁状態が出て鬱状態になったりとか、体に異変が現れる人もたくさんいます。国の予算の問題もあると思うんですけども、医療が適切に受けられない人がたくさんいます。これらの人権侵害から彼らを守ろうとしたのが、署名活動です。

大阪で、スピーカーを持って入管問題のことを話しながらしました。しかし今軽く話そうと思ってもこれだけ時間かかってしまうし、通行人が足を止めて署名してくださることはホント少なかったです。3時間ほどいて、集まったのは20筆くらいでした。このことこそ無関心の証であると思ったんですけども、この話をすると、たくさん的人が署名したいということでした。

日本人は日本にいる外国人と会わなくとも生きていけますし、自分の生活に直接関わってくれる問題でなければ積極的でないんだと思いました。

**○B班（藤川義之）** 我々はこのような意見を聞いて、無関心は確かにありました。他人に対しての意識が低ければ、他人を助けようという気持ちも起こりませんよね。じゃあそもそもそういう状態になったのは何なんだということを、次の段階で話し合いました。

一つは、今日僕たちが何をして生きていけばいいのかという目的意識が持ちにくいことです。何のために仕事してる？ 何のために生きてる？ 即答できないんですね。確かに今の生活は豊かだし楽しいし幸せに思えるけど、じゃあなんのために生きてるかと言われて答えられない。これは、特異じゃないかと思ったわけです。

ここに社会の時代精神、目的意識の喪失とか書いてますけど、我々の祖先はそうじゃなかつ

たと思うんですよね。特に日本が劇的に変わった明治維新後なんてのは極めて高い意識を持ちながら、日本人は生きていたんじゃないかと思うわけです。司馬遼太郎の本なんか見ると、最も日本人が賢かった時は日露戦争の時だと。いま“坂の上の雲”やってますけど、あの時が一番賢いと。極めて微妙な国際関係の中で、ちょっと間違えば日本は滅んでしまうという中で、弱小の日本が生き残るためにはどうしたらいいかと日本国民全員が目的意識を持って乗り切っていたと。

じゃ、我々はそういう目的意識を持ち得るのか。そこが一つ問題じゃないかという論点が挙がってきました。僕たちはこういうこと考えなくていいことが幸せかもしれない、けれども同時に不幸かもしれないという考えになってきたわけです。社会のあり方は変質したんじゃないかという話になってきました。社会は共同体でしたよね、本質的に助け合うもの。日本社会は基本的に農耕文化でしたから、助け合わねば何一つできなかった。川から水を引くにも、貴重なものだから裏で話し合って初めて農耕生活できたと。助け合わなければ生きていけないのに、それをする必要なくなってきたんだということは、一種共存意識の低下。だけど経済発展遂げた中で、経済的なつながりだけは残ってしまっていると。そうしたところに、全てではないけれど一つの原因があるんじゃないかと。

我々は非常に豊かな生活してるけれども、マンションの隣の人の顔知らないことがあります。僕が大学生の時にも、隣の人と話したかというとしてないですね。よくテレビとかで昔は隣近所で醤油や味噌を貸し合ったという話を聞くけど、僕たちの世代にはリアリティがない話なんです。でも、目的意識ない中でも、私たちは何かやりたいと思ってはいるんです。今仕事は一生懸命してるけど、昨日みたいな話を聞いて、高山さんみたいに素晴らしい生活したいと思うけどなかなかできない自分たちがいて

非常にもどかしいと。自分たちの働いてる意味を見いだせなくて葛藤している。そうしてもがき苦しんでるという意味では、不幸だなと思うわけです。でも、現在与えられた状況ってのは甘受しなければいけない。その中で何ができるかっていうことを、私たちは最後のテーマとして話し合わねばなりませんでした。

共同体社会ってのは、本質的に助け合わねばならないと。そうやって助け合うことは、他人に対して関心を持たねばならない。無関心から関心へと動かす。我々は大きなことはできないけども、小さなことならできるんじゃないかと。そうしたことから社会を少しずつ変える可能性があるんじゃないかということが、一つ、班の実体験から出てきました。そのことについて、ちょっと説明してもらいます。

○深川純一 お名前を言ってからしゃべるようにしてもらえますか。すいませんが、よろしくお願ひ申し上げます。

○B班（藤川義之） 姫路から来ました、建設会社で働いている藤川です。自分たちに現在できることは限られています。大学生であれ何であれ仕事がありますから、最初は小さなことしかできないと思うんです。でも、小さなことでも一人ひとりが目的意識を持ってすることで、無関心から関心へと変えることができると思います。

自分の会社前の清掃が日本を変える。大げさですがこれは何かと言うと、ウチの会社は朝8時前から始まります。けど7時10分にはみんな集まり、まず会社内を清掃し、その後で社外に出て左右にだいたい100～200mずつ、行ける時は500mくらいまで清掃します。最初に始めたのは、ウチの社長です。ある日社長が会社の前のゴミを、タバコの吸殻一つ拾いました。次の日も、次の日も。しかし、一人では拾いきれない。そこで社員に、「ちょっとお前ら手伝え」

と。その輪が広がって、今ではほぼ全員が清掃に参加しています。朝早いので、いろんな人たちが通ってゆく中をやってますと、オジさんオバサンなどは「この人たち何でこんなとこ掃除してるんだろう」という顔をしてます。たまに目が合ったりすると、「ご苦労さまです」と声かけられることもあります。しかし近くの工場に通勤してくる若者たちの中には、舌打ちをして通り過ぎる者もいます。歩道上をたくさんの社員が清掃してるから、邪魔だと言うんでしょうね。そんな時、僕は「あ、こいつはわかっていないな」と思います。要するに、無関心だからわからないんですね。

すると最近、姫路駅近くのとある銀行が同じようなことを始めました。朝、銀行員がみんなで一帯を掃除してる。気になったので、聞いてみました。すると、どうもウチに触発されて始めたようなんですね。自分たちが始めたことで、その輪が広がっていった。もしかしたら、まだまだ出てくるかもしれません。こうしたことを続けていくと、無関心から関心へと変えることはできるんじゃないかと思ったんですね。だから、ウチらの結論としては、まず自ら、小さなことからやってみようということです。最後は、代表に。

○B班（福山太一） 以上でB班の発表を終わります、ありがとうございました。

○深川純一 ありがとうございました。わかりにくい点があれば、確認してください。

○C班（細川美和） C班の細川です。“社会の時代精神”っていう言葉の説明と、無関心から関心に移すため他にできることは何かをできましたらお答えいただければと思います。

○B班（福山太一） 時代精神というのは、その国なり民族なりが共通して持ち得る目標と

いうふうに考えてもらつたらいいと思います。哲学的用語なので、簡単に言うとそんな感じです。

○B班 他にやれる小さなこととして出た例では、これまでニュースで戦争などを知つても何もしなかったのが、実際こうした場でカンボ

ジアの話など身近に聞いたりすると地元に帰つた時に多くの人に伝えていきたいとか、そういう声はありました。

○安行英文 ありがとうございます、では次のD班よろしくお願ひします。

## バスセッション報告 D班

10.3.25～3.28 於.神戸Y.M.C.A余島野外活動センター  
催：R.I.第2670地区・R.I.第2680地区RYLA運営会議



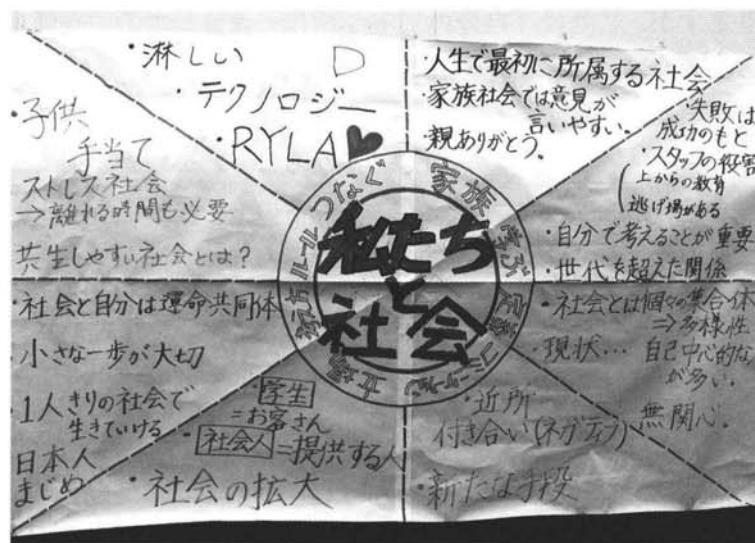
○D班（小林弘樹） D班の、姫路南から来させていただいてる小林弘樹です。

○D班（塙本優香子） 神戸ロータリークラブから推薦いただきました塙本優香子です、よろしくお願ひします。

○D班（小林弘樹） 僕たちの班は“私たちと社会”を考える上で、まず8つのカテゴリーに分けようということで、家族、学ぶ、定義、コミュニケーション、立場、考え方、ルール、つなぐという8つから考えていきました。社会にはいろんな枠組みがあって、いろとこでの社会があると思うんです。このライラセミナーだって、一つの社会と考えられます。

そんないろんな社会の中で、人が初めて所属するのが家族。両親がいて、兄弟がいてという家族社会の中ではまずは生きていくと。家族社会というのは幼い頃からその中で育つてるので意見が言いやすかったり、悩みも相談できたりする感じですね。

次は学校社会。失敗は成功のもとと書いてますが、個人的に僕は今奈良県で不登校とか引きこもりとか、そういう子どもたちと一緒に共同生活で過ごしてます。そこに来る子どもたちは社会とつながれてない、社会に出てない子どもたちで、何が多いかって言うと失敗経験ほとんどしてないんですよ。失敗する前に、親が手を出してたりする。失敗するのが怖い、だからいろいろなことにチャレンジできない。失敗



経験がないから、いざ失敗したら凄く言い訳するんですよ。あいつが悪いとか環境が悪いとか言うんですけど、そうじゃないやろうと。結局、問題は自分の中にあるんだろうって。日々自分と向き合うと言うか、問題は常に自分の中にある。イジメが原因で不登校になった子でも、イジメられる原因ってのが何かしらあります。スタッフとしてはそういうことに「逃げずに向かいなさい」とか言って励ましたり、逆にスタッフ同士フォローし合って逃げ場を作ってあげたり。あと、自分で考えることが重要なのに、他人任せってのも多いです。なかなか自分で考えて行動するっていうことが少ないですね。そういう子どもたちには、世代を越えて上の人が教えてあげる。失敗する経験を提供するっていうのが大事なんじゃないかと思います。

次、今更なんですけど定義。さっきも言いましたけど社会には多様な形があって、家族社会、学校社会、ライラ社会といろいろある。じゃ、今の社会ってどうなのかなって言うと、自己中心的な人が多い。みなさんも感じてるはずですが、誰もが余裕なくなったら相手の立場に立って考えられなくなったり、自分の考えを優先させてしまう。度合いの違いこそあれ、みんなジコチューじゃないかと思うんです。だから、今朝や昨日の講義の先生方が実践されているのは凄い

ことだなあと感銘を受けます。先ほどのB班の発表にもあった、無関心な人も多い。そんな感じが、現状です。

**○D班（塚本優香子）** 次に、コミュニケーション。社会は個々の集団であって、個々のつながりが大事なんですけど、一方でご近所コミュニケーションなどのつながりが減ってきてまして、それが全体での団結力とか関わりを減少させてます。

でもコミュニティ、地域社会っていうものは、つながりなければ発展できないものです。技術の発展などによりインターネットや携帯電話、様々なコミュニケーション手段が新たに出てきましたが、イイ面と悪い面、両方あると考えてまして、悪い面では直接会話ができなくなるとか、気持ちが伝わりにくいというのがあると思います。いい面としては、たとえば社会で何か問題起きたとして居場所を見つけられないような場合に、友だちを見つけられたり同じ考えを持ってる人を探せると思います。

次に、立場。まず、学生と社会人では全然立場が違います。接し方が変わってくると思うんです。学生なら自分の時間をどのように使おうが自由なんですが、社会人には責任もありますし自分の時間も削ってストレスを受けたりしま

す。社会の拡大とありますが、これは「自分の立ち位置はここだ」と決めつけずに、視野を広げて社会を広げることが大切という意見からです。

次に、考え方。さっきも言ったように、自分の見方で社会の見方は変わりますし、たとえ今のは自分社会の中で行き詰ったとしても違う社会に視点を移してみるとかできます。小さな一歩が大切。私たちは日本という恵まれた環境にあっても、たまたま恵まれない環境に生まれた人たちを助けられるか。何かを援助するというのではなくとも、たとえば平和っていう遠いゴールに小さな一歩を記すくらいは誰にもできて、それがたとえ100円の募金でもいいじゃないかということです。人は、一人だけで社会の中で生きていけるんでしょうか？ 生きていくためとしても、幸せじゃない気がする。嘘や欺瞞、係争があったとしても、誰かとの関わりの中で生きていくことを選択しそうな気がします。いくら仕事の効率化に躍起になったとしても、その先で仕事やめたらボケちゃう人だっていますし。

**○D班（塚本優香子）** そして、ルール。民主党の目玉政策である子ども手当は一種お母さんが社会に出る手助けの一助に作られたルールですが、一方でストレス社会ってのがある。

常にセカセカするのが仕事のような感じ。今日の思索の時間、1時間一人でボーッとして、「あれは結構良かったよね」という意見が多くて、なるほど、つながるのも大事やけど、パッと離れるのも時には必要なんじゃないかと。みんながみんなそう感じて行動できたら、それは素晴らしい社会になりそうだと意見が出て採用しました。

**○D班（塚本優香子）** 最後に、つなぐ。これは今回のライラのテーマでもあります、その中でもキーワードを探すなら寂しさではないかなあと私たちは感じました。寂しさがあって初めて絆を深めたいとか誰かと接してみたいとか社会に存在したいとかあるんであって、コミュニティは結成される。テクノロジーは、それを助ける一種の手段ですよね。ライラ。お互いの利害関係を越えて話せるこういう場は、もっと必要じゃないかと思います。そういう場があることで、もっと人間同士のつながりを深められると、そういう結論になりました。

**○安行英文** さて、では用語などについてご質問とかありましたら……よろしいですか？ はい、じゃあ、ありがとうございました。では最後のC班、よろしくお願ひします。

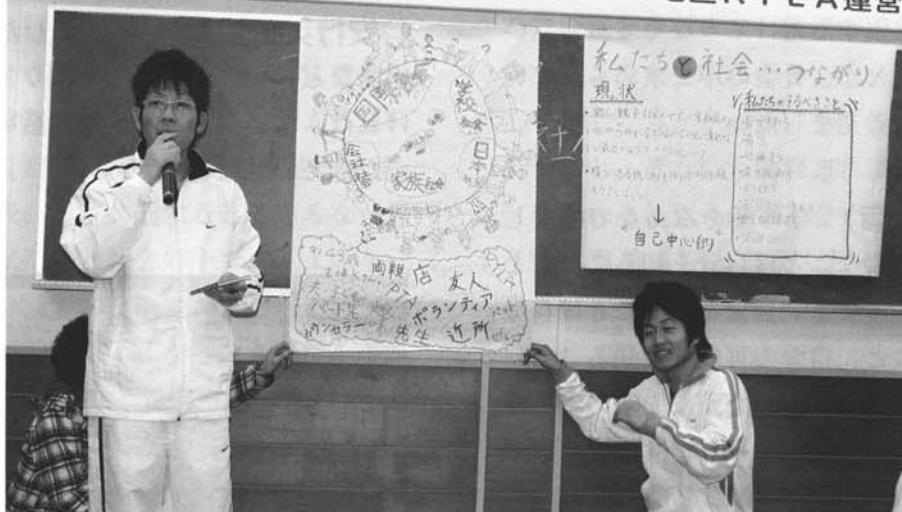
## バスセッション報告 C班

**○C班（綾政彦）** こんばんは。坂出から來ました綾と申します、よろしくお願ひ申し上げます。それでは、私たちC班の発表をさせていただきます。私たちC班は、私たちと社会についてつながりであるという結論を導くことができました。

まず初めに、こちらのイメージ図をご覧ください。ここでは私たちと社会は、家族、社会、

学校、国々など様々なつながりから成り立っている様子を表しています。小さくて見にくいでありますが、いろんな人種の方、性別、様々な違いを越えて昨日のキャンプファイアで行われたように、手に手をつないで一つになっているのがよくわかると思います。また、この下の方、43歳主婦のKさんの例が出ています。夫、子どもがいて、パート先、カウンセラー、趣味といろ

2010.3.25～3.28 於.神戸Y.M.C.A余島野外活動センター  
主催：R.I.第2670地区・R.I.第2680地区RYLA運営



いろいろんですけども、この一人の主婦のKさんにもこれだけ様々なつながりがあるということです。

続きまして、こちらでは私たちの社会について、なぜつながりという言葉が重要なキーワードになったかを簡潔に表しています。現在の日本国内の状況に対して、私たちがすべきこと、できることの二つを書いています。この現状というのは、私たちが検討を始めて最初に出た課題というか議題です。

今の日本では表向き平等と言われてて、法律上もそうであるとされています。しかし現実は全然違って、社会では激しい競争を余儀なくされています。一度社会のレールから外れると、いわゆるニート、ワーキングプアなどのレッテルを貼られ、また完全なる格差社会において持つ者が利権を離さず継承する風潮が確立されていくように思われます。親は子どもに「いい大学、いい会社に入れ」と、「それが一番お前にとつて幸せや」ということを教え、それらがブランド化されて重宝されるといった感じになっていくという意見が出ました。

○C班（西岡まや） 神戸から来ました西岡と申します。

続きまして私たちがすべきことなんですが、まず社会で認められるには自分自身をシッカリ知るということ。次に、行動を起こすために一步踏み出す勇気。そして、お互いに意見を出し合ってしっかり協議すること。それから、違いを認めること。文化や障害など人それぞれいろんな違いがあると思うが、それを認めた上でお互いに助け合うことが必要であるということになりました。

さらに、コミュニケーションを取るということ。コミュニケーションを取り合って、お互い



に理解し合うことが必要です。同様に、自分を表現するということ。自分の考えていること思ってることを主張するだけじゃなくて、お互いに協調し合うことが、社会の中で求められているというふうに考えました。

○C班（綾政彦） 今の話をみんなで検討した結果、最も重要なことは自分を知ることだという結論に達しています。自分を知ることは自分を大切にすること、自分の可能性を知ることにつながり、社会と自分のつながりを改めて認識することになるという意見からです。

すると社会での自分の役割を自ずと考えられ、引いては世界の中で日本が求められていることは何かという大きな視点で世界を見る力が養われるのでは？ という意見でした。以上が

C班の発表です。ありがとうございました。

○安行英文 ご苦労さまでした。では、語句用語などについての質問はありませんか？ なければ、深川先生から少しお話を切り出してくださいたいと思います。



## フォーラムディスカッション



○深川純一 今みなさんの意見それぞれについて、詳しい開陳がございました。素晴らしい論点が満載であります。この論点一つひとつについてディスカッションしてると夜が明けてしまいますので、この中から私たちの独断と偏見によりまして、いくつかだけ取り上げて、議論したいと思います。取り上げられなかったことは、それぞれ自分の地域に持つて帰つていろいろ考えてください。



最初に申し上げましたように、別にこれは決議機関じゃございません。いろんな意見を交換する会でございますから、意見の取捨選択はみなさんの自由であります。私なども、この意見聞いて随分勉強になります。お互いに習うべき事あれば謙虚に取り入れて、自分の心の糧にしていただくというのが、このフォーラムの目的なんであります。あと1時間半くらいしかありませんが、ホントいくつかのポイントだけやり

たいと思います。じゃ、これからはチーフコンダクターの安行さんに任せますので、どんな意見でもおっしゃってください。

○**安行英文** ではまず、この4つの意見の中で、これだけは言っておきたいという人いなですか？ そしたら、僕が少し問題提起します。この4つの発表、割と共通するところあるなと思ったんです。私たちと社会の中でコミュニケーション必要やと、ずっと出てきましたよね。非常に大きな問題なんです。なぜコミュニケーションは必要なんですか？

○**B班（福山太一）** 神戸から来ました、B班の福山太一と申します。仕事は、高校の教師です。コミュニケーションがなぜ必要かと言うと、私の意見では、自分と他人が違うからやだと思います。全く同質の存在であればコミュニケーションしなくとも同じ考えのはずで、ところが違うから共生するには調整する必要がある。だからコミュニケーションする必要性にかられるんじゃないかなと、僕はそう思います。

○**B班（山口真）** B班の山口です。僕としては、コミュニケーション取ることで相手のことを知ることができますし、それによってまた自分を知ることもできる。お互いが幸せになろうと思ったら、相手と自分のことを知ると。幸せになるために、コミュニケーションは必要だと思います。

○**A班（和田拓自）** A班の、愛媛から来ました和田と申します。僕も高校の教員なんですが、今学校現場大変で、鬱とか精神を病んで休職される先生が多いんです。その大半の原因が、生徒や保護者がしんどいとかでなく、教師間の人間関係とかコミュニケーショントラブルなんですね。社会で働いていく中で、同僚とどうつきあっていくかが大問題だと。だから、コミュニケーションの大切さを感じます。

○**A班（渡部裕介）** A班で、神戸から来ました渡部と申します。僕はですね、コミュニケーションをなぜ取るかというよりも、相手に关心を示したりとか心遣いをするという気持ちを持つこと。そういう動機あればコミュニケーション取れると思うので、なぜというよりは、そういう気持ちが大事なんじゃないかと思います。

○**D班（金岡友美子）** D班の松山から来ました金岡と申します、よろしくお願ひします。私は、一人きりでは生きていけないからコミュニケーション取るんではないかと思います。一人で生きることはできても幸せにはなれないとD班の発表ありましたが、だからコミュニケーション取って会話したり自分を認めてもらったりすることで幸せになっていこうとするから必要なんだと思います。

○**安行英文** みんな、非常にいいこと言っていただいてます。全て大事だと思う。ソクラテスという哲学者が、「嘘をついてはいけない」と言った。なぜなら、「社会が成り立たないから」と。嘘をつくと、人を信じなくなる。信じなくなると、社会は成り立たなくなる。だから、「正直であれ」と。ついでいい嘘もあるけど、それさえソクラテスは「嘘はいけない」と言った。

ここまでコミュニケーションは大事で、社会というものは大事なんだと。それが、コミュニケーションを持つということの一番の重要性だと言ったのね。だから、この4班は非常にいいところを突いてる。もう一つ。B班が挙げた部分で、なぜ集団でなければならないのか？ これについては、どうでしょう。

○**B班（藤川義之）** 姫路から来た藤川です。これはもう簡単ですね。僕だけの意見ですが、一人では答え出すこと絶対できません。合って

るかどうかわかりませんし、全員が集まって共同体と化しても答えが出るとは限りません。そういうところから人間は一人でなく共同体として集まって考えること、これが大事やと思いますね。

○B班（吉村真一） B班の、高知県からきました吉村と言います。僕が思うに、先ほどB班のプレゼンでもありましたけど人が一人でできることは限られてきます。従って自分がより大きなことをするためには、一人の力じゃなくみんなの力が必要になってきます。なのでやっぱり、人はみんなで集まらないといけないのではないかと思います。

○B班（植田杏奈） 兵庫県の西明石市からきました植田杏奈と申します。まず親から生まれた時点で家族という集団に含まれるのですから、それは人間にとて運命的なものとして必要なんだと思います。

○D班（間嶋章裕） 香川からきました間嶋です。たとえば環境が凄く良くて、周りに何でもあるっていう状況に置かれた場合、たぶんその人は人間的にダメになってしまうと思うんですね。だから、みんなで生きてるんじゃないかなと思います。

○A班（玉越亞由美） A班の、神戸からきました玉越です。D班の発表時に気づいたんですが、思索の時間で一人になってホッとしたという話。実際、私もそれは感じました。それはやはり、帰れる場所があるからホッとしたんじゃないかなと。一人になっても、帰れる場所がある。集団ってのはそういう気持ちをわかり合えて幸せも感じられるから大切なんじゃないかと、私はそう思います。

○C班（佐藤聖也） C班の兵庫県から来ま

した佐藤聖也です。人が生まれて最初に感じるのは、お母さんの愛情なんですよ。感情がなかったら集団では生きていけないと思うんですが、お母さんから愛情という感情をもらってするために、成長して一人になっても愛を感じたいと自然に求めてるんじゃないかと僕は思います。

○C班（大古殿幸憲） 神戸からきました大古殿です。かぶってしまったんですけど、僕はロマンチストじゃないですが、愛をもらって愛を与えるためだと思います。

○安行英文 僕は、愛をあげるため、家内にピアスをあげようと思ってネット見てて、ベビーカステラの機械を買ってしまいました。大変怒られました。(笑)

なぜ集団でなくてはならないか、前にも言いましたが生物学的にいきますと人は所属を外れちゃうとダメんですよ。集団で生きるのは、アリとハチと人間くらいなんですね。人はオギヤーと生まれた時に脳はほとんど90%以上でてる。後は遅れて成長する。能力を発達させるために、聞こうとするし動こうとするんです。それは、集団の中でないとできない。集団じゃないとダメだから、分業していく。それが、生きていくために必要なシステムなんですよ。

もう一つの問題として、みんな“命”とかいっぱい言ってましたよね。共生してゆくとか……B班が共同体ってのを挙げてましたが、なぜ生きていくのかってのもどこかありました。ではなぜ、命は大切にしなきゃならないんですか？

○B班（吉村真一） 吉村と言います。僕の考えでは、自分が一人ではないからだと思います。自分の周りには家族もいますし、友人もいますし、恋人や社会や、そういうつながりがあるからこそ生きようとするんだと思います。

○B班（畠瀬勇樹） 愛媛県の松山市からきました畠瀬勇樹と言います。難しい問題ですが、私の考えとしては誰かが亡くなってしまうと悲しむ人がいる。たくさん亡くなると、悲しむもそれだけ増える。それでは希望のない、暗い世界になってしまうからだと思います。

○C班（綾政彦） 坂出から来た綾です。私の考えは、まだ死ぬ時ではないから。人が悲しむからって言ったら一人ぼっちの人もいるわけで、その人は死んでいいのかと問われたらそうではないので、そう思います。

○B班（畠瀬勇樹） 確かにそうですが、自ら命を絶ってしまう人の中には一人ぼっちだからという理由でそうする人もいる。それでも悲しむ人はその後でいたという話を聞いたことがあります。たとえホームレスの人が孤独に亡くなつたとしても、同じような境遇にあった人は悲しむと思います。

○A班（佐藤友美） 加古川市からきました佐藤です。私は死ぬことも別に悪いことじゃないと思いますが、自ら命を絶つのはいいと思わないし、人は生きることも死ぬことも与えられた運命だと思うし、その与えられた時間の中で何か大切なことを学ぶために生きているのかなあと思います。

○B班（福山太一） 神戸から來た福山です。生命について考へるのはたぶん人間くらいしかいなくて、こういう難しい問題考へる時に僕はもっとシンプルに考えようと、さきほど話にもありました、生物学的な面と文化的な面と二つあると思うんですね。どんな生き物も、種の保存のために繁殖しなきゃならない。大事なのは、いろんな多様性を持たせて種の繁栄を図ることだと思うんです。死ぬことでさえも、いろ

んな多様性の一つではないかと。文化的にも同様なことで、いろんな人たちがいてそれぞれの命を全うすることで社会の多様性ができるくると。こうした一つひとつを社会の中に構成してくれることで、我々が幸せに、豊かになれる可能性があると。だから、どんな苦しかろうと辛かろうと自分の命は全うしなきゃならないんだろうと、僕は最近そう思うようになってます。

○安行英文 すみません、ありがとうございます。少し論点が外れていくので、これ以上進みませんので。僕の質問が難し過ぎたので。ごめんなさい。

もう少し進めましょう。C班のつながりの話の中で、自分を表現することと協調し合うということが相反するように私は思うんですけど。どうでしょうか。

○C班（綾政彦） C班の綾です。確かに相反すると思うけど、結局はその兼ね合いやと思うんです。日本やアメリカや、いろいろ習慣とかあるけど、どこまで自己主張すべきか、どこまで協調すべきか、状況に応じて適切な判断ができるいいんじゃないかなと考えています。

○安行英文 ありがとうございます。バランスの問題だと。先生、何か？

○深川純一 大変いいご意見あって勉強になるんですが、先ほど安行さんから命はなぜ大切にしなければならないかという問い合わせがございました。ちょっと、私の考え方を。

この命ってのはですね、お母さんとお父さんの魂が結合して生まれてくるわけで、両親の命も、その前の祖父母の命も引き継いで伝わってきてる。これはずっと遡っていくと猿の世界、魚の世界、アメーバのような世界にも行く。そういう無限の彼方からずーっと引き継いできた、それが命なんですよ。一回も断ち切ること

なく、しかもそれは未来永劫に伝わっていくもの。命ってのは今までずっと何億年と続いてきて、様々な知恵を授かりながら生きてきたもの。ホントに尊い、命は知恵の結晶。だから、生きる死ぬとは別の問題で考えないといけないということですね。

こういうこと言ってる人もおられる。人が生まれてから15歳に育つまでは、200万人の人々の世話になってるんだと。服を作ってくれた人、お米を作ってくれた人、魚を釣ってくれた人……そして両親、先生、同級生。だから、自殺なんてとんでもない話でね。もし自殺するなら、その全員にお礼を言ってからにしろと。これも一つの意見でしょう。

それから、もう一つ前にコミュニケーションの話が出てきました。なぜコミュニケーションが必要かという話ですが、これは二人以上を前提とした話なんあります。コミュニケーションを英和大辞典で引くと、だいたいは情報伝達以外の意味でもう一つ、キリスト教用語で“聖体”とあります。キリスト教は一神教ですから、一つの神をみんなで仰いでおる。そうしてつながっておるところに情報の伝達が行われて、一つの重要なキリスト教社会をつくっていくんだと。その社会に属していない人を、幸せになるために引き入れてきて、そして教化しなきゃならないと説くわけであります。それについては、ドイツのヤスパースという人が「そんなバカな」と大激論やっています。今から50～60年前に、イタリアのマルタ島で世界宗教者会議ってのが行われましてね。その時に、こういう議論があったわけです。ヤスパースはそれを西洋の論理だろうと、ロジカルなコミュニケーションだと、だけども西洋だけが世界じゃないよと、東洋ってのがある。東洋は仁の国だと、仁とは何か、人が二人いるってこと。先ほどどっかで支え合っていう意見出てましたが、まさに二人の人が支え合ってる姿、これが仁なんだと。たとえばAさんが今いるのはBさんのおかげだと考

る、BさんがいるのはAさんのおかげだと考える、二人の人がお互いに支え合い助け合ってる、これが仁の意味だと、東洋のコミュニケーションとはそういう意味だと。西洋がロジカルコミュニケーションなら、東洋はエコロジカルコミュニケーション、生体のコミュニケーションだと言てるわけです。

それから、農耕社会という問題もさっき出てきましたね。これも一つの考え方でありまして、日本はまさに何をするにも一人ではできない。共同してやる。農耕社会の日本では田植えをする、茅葺き屋根を葺き替える、植林をする、何でも必ずみんなの共同です。そのかわり権利として、山のものを自由に切ったり刈ったり栗を拾ったり、それらは村の人なら誰でもできる。入会っていう一つの慣習でありますが、そういうのも独特的なコミュニケーションの一つだらうと思う。これに対して、西洋は狩猟社会。一人ひとりが獲物を追っかけていって、「これは俺のもんだ」と、自分のものということをハッキリ確立することは、個人という意識が非常に強かった社会。それに対して日本などの農耕社会はみんなで何かをやりますから、個人という考え方方が非常に薄い。個人という言葉自体がでてきたのが明治維新の時で、福沢諭吉という大先生がインディビデュアルという英語をどう訳したらいいかと考えて、個人という訳でいいだらうと落ち着いたらしいです。ですから、農耕社会に個人って概念が生まれてきたのは明治以降と新しいんですね。

実は一昨日オープニングパーティが終った後で、ロータリアンのみなさんに対してロータリーとは何かという説明のためにそんな話をしまして、こんな考え方もあるということをちょっと心に留めておいてもらえば。ご参考になったかどうかわかりませんが、これは私個人の意見であります。

○安行英文 ありがとうございます。ヤスパ

ースは生に対して凄く強い訴えをした哲学者で、限界状況においてこそ生というものは浮かび上がってくると言いました。海の中に一本の木が浮かんでて、それには一人しかしがみつけない。難破船から二人投げ出されたら、一人は助かるけど二人は助からない。二人ともその木をつかまいで死ぬのか、一人だけ助かるのかという限界状況を説いて、そうした時に初めて人間は生に対する非常に強い感覚を持つと、そういう生の哲学を説いた人ですね。

では、次へ行きます。みなさんから現状の社会に対してもいろいろ問題点を挙げていただきましたが、この社会は他にどんな問題を抱えているんですか？ 他にあります？

**○B班（藤川義之）** 姫路の藤川です、何度もすみません。ここ最近、親が生まれた子をすぐ殺したり、同級生を殺したり、簡単に人をやめる事件が多いですね。それを、どんな感じで見てるのかなと。それに対処する人間は、おらへんのかなと。一昔前ならば親が子を殺したというと「えっ」となってたところが、今はもう「またか」ですから。人の命を軽く見てるんちゃうかなと、最近自分は思いますね。こうしてあやめられる人の命は、なんとか救えないもんかなと思ったりします。

**○A班（渡部裕介）** 神戸の渡部と申します。今の命の大切さで言うと、インフルエンザで何人死んだと聞く一方で、ニュースにもならない自殺者が一年に3万人という話も聞きます。そうやって亡くなる人にもそれぞれ縊やつながりがあって、社会の中でやはり一定の役割は果してきた。そういうことを考えると、凄く悲しい気持ちを覚えます。

**○D班（村田洋平）** D班、神戸から来ました村田と申します。あまりこれのせいにしちゃいけないと思うんですが、単純に今は不況だか

らという問題もあるかと思います。

**○C班（細川美和）** C班の細川です。自己中心的な人が多くなった原因の一つには、社会に帰属できる場所が少なくなってきたこともあるのかなあと思います。仕事がなくなってきた現状で、自分たちの街に若い人がいなくなってきた。いろんな関係団体を築きにくくなってきた。どうしてもそれぞれ個々だけで頑張らねばならない現状がある。そういうことを一緒に考える仲間がそばにいなかつたりとか、地縁血縁も薄れてきてる。高齢の方だけで生活しなきゃいけない、若者が孤立していってる。私たちの日本は、そういう形でいいのかという問題があると思います。

**○D班（渡辺多喜）** 高知県から参りました、D班の渡辺です。私が考える現状の問題に、近所づきあいがなくなったことがあります。世界平和のことまで私の頭は回りませんが、隣の家で虐待が起こってても気づかないとか、隣の独り暮らしのおばあさんが動けなくなってても気づかないとかっていうのは問題ではないかと。

**○D班（小林弘樹）** D班の小林です。いろんな事件が多くなった原因の一つに、つながりが薄くなったことがあるかと思います。その虐待の例にしても、子育てで悩んで誰にも相談できなくて、それが子どもに向いてしまうとか。自殺だって、自分の悩みを誰にも打ち明けられないからだろうし。親友とかの深いつながりでなくとも、もっと浅い、軽いつながりもあっていいと思うんですよ。おせっかいな近所のおじさんがいたりとかあっていいのに、そういうつながりさえ少なくなってるのが、いろんな原因なのではないかなと思います。

**○A班（伊藤大輔）** A班の、伊丹から来ました伊藤と申します。確かに社会のつながりに

集団化は大事なんでしょうが、集団にならないと非難されてしまうみたいのが凄い不思議というか、違和感を感じます。

○深川純一 今、自己中心的な人が多くなったと問題になってましたし、姫路の人でしたか、上の人がもっとしっかりしてほしいという意見もありました。ただね、上に頼るんでなく、結局は一人ひとりの心が大切だろうと思います。同じく姫路の方おっしゃったように、タバコの吸殻拾う運動ですね。あれにしても、ロータリアンにはそういうことやってる人たくさんおられるんです。それで街はきれいになっていきます。

しかし、ロータリーの考え方を一つご紹介しておきますが、タバコの吸殻拾うこと自体にロータリーの本願はないとするんです。それも避けて通れない話ですが、めざしてるのは、タバコの吸殻を捨てない人を育てること。ここに、ロータリーの本願があるわけです。捨うからいい、捨わない奴はけしからんというのではなくて、社会にはいろんな人がいるんです。自分の思うようにならないのも社会です。こういうのを仏教では、娑婆の世界と言うんですね。思うようにならない。それはそれとして、じゃあどうするかと言ったら、結局一人ひとりの意識問題で、一人ひとりの意識を変えていく。それがやがては大きく社会を変える。これが、ロータリーの論理なのであります。ですから、そんな考え方も一つあるということを心に留めていただきたい。

実はノートルダム清心女子大学長をやつとられた渡辺和子さんって2・26事件でお父様を亡くされた方がいて、その方が200人くらい入る食堂でナイフ・フォーク・お皿をセットしていく仕事をなさってた時に、先輩のシスターが先生に「あなたは今、何を考えてますか」とお聞きになります。先生は、「何も考えていません」とおっしゃった。すると先輩シスターは非常に

厳しい顔になって、「あなたは時間を無駄にしてますよ」と。先生はそれまで、部下を10人くらい使ってる外資系の会社でエリートの立場におられたなんですが、そこでは本当に効率一辺倒の仕事ばかりを一生懸命にやってきた。先生はびっくりして、「なぜ」と聞き返した。すると先輩シスターが、「同じ並べるんであれば、やがてその席にお座りになる人のために心の中で『お幸せに』とどうして祈らないんですか。何も考えないでただ並べるというのは、時間は無駄にしておりますよ」と、こういうふうに教えられたそうであります。

それで先生は、今まで自分が雑用だと思ってたつまらない仕事が、実は雑用ではなくて、何事をするにも一つひとつに心を込めて、相手を思いやってね、祈りを持ってやる、そういうことが必要なんだということに気づいたとおっしゃってます。

ですから、タバコの吸殻拾うのもつまらないことかもしれません。共感する人もいるし、舌打ちをする人もいる。いろんな人がいるのが社会で、でも渡辺和子先生みたいに人の幸せを祈りながら行動する生き方も大切じゃないかと思います。ロータリーも、そういう心を作ることをめざしております。困っておる人にお金を出したり、財團を作ったりしてやるのも大事なことでありますが、一番根源的に大事なのは人の心を育てること。全ての行動に愛を込めていくこと。これがやがてロータリアンの会社も繁栄させるだろうし、みんなが隆々と栄えていくことになると、こういう哲学をロータリーは持っております。そういうことも一つご披露しておきますから、ご参考になれば心に留めておいていただければと思います。

○安行英文 ありがとうございます。社会には規則があって、それぞれ人の役割があって、人とのつながりを作っていくにはいろんな気持ちのツールが必要だと。ルールと、ロールと、ツ

ールという、いわゆるルル3条（錠）を持ってたらええねんな。

ということで、D班の逆のことを言ったわけやね。社会は必要なんや、せやけど社会の中ではめっちゃストレス感じるから離れてることも必要なんや、こりゃ全く逆の論理なんや。説明では、ストレスある社会から離れることで存在感を取り戻すという話でしたよね？ これ、もうちょっと説明してほしいんやけど。

○口班（衣川卓志） 伊丹から来ました衣川です。自分を表現してやっと相手のことがわかつて、協調して妥協することによって数人から成る団体ができ、イライラもせずスムーズに動くことができる。でもそれは、お金を得るために妥協することでストレスは少しづつでも溜まっていくわけじゃないですか。それをたとえば自分の趣味の世界で発散するとかいう、そういうのもアリなんじゃないかなあと思いましたね。

○安行英文 ありがとう。要するに社会から逃れるんじゃないくて、息抜きみたいなんも必要やと。そうしないと生きてくの大変なんやと、そういう意味よね？

“ロンドンを作る”っていう本があるんです。ある精神分析医の所に患者が来てこう言う。「ロンドンはない、あらへんと思う」と。すると医者が、「そんなことないやん、ロンドンは実際にあるやろ？ 新聞とかにも載ってて、あなたも知ってるやろ」って。「いや違う、絶対ないと思う。あれはたぶん、そう思った時点でできてるんや」と患者は食い下がる。医者は、「ほなお前、いっぺん行って確かめてみんかい」と。患者は、「いや、僕が確かめに行こうとする時にロンドンはできるんや」って。医者が、「そんなこと、誰が何のためにすんねん」という話で終わる。たとえば我々が車を駐車場に停めてる時、その車を持ってるのかどうかという意

識。実際あると思ってんやけど、それを確かめるわけではないねん。確かめるには見に行って、「おお、あるある」と。

つまり我々の社会ってのは、目に見えてるものをずっと意識してるわけよ。ずっと見続けにやならんしんどさがある。でないと、そうあるべきもんやと信じ込んでしまってるんやね。僕が幸福なんてあらへんよって言って、そう思い続けてんのは嘘やと。それは心のあり方、心の持ち方やと。ジェファーソンはアメリカ独立宣言に自由と平等と幸福を保証する権利があるんやと言って、じゃ幸福って何か。確かに経済発展はできたかもしれないけど、幸福にならなアカン言ういろいろなもん買おうとする強迫観念だけが残ったんかもしれん。でも、そんなんちゃう。心のあり方の問題や。社会の大切さはみんなの指摘のとおりやし、A班はツールを一生懸命書いていただきました。B班は何事にも関心を持ってほしいと言っていた。D班は問題点いろいろあるけど社会と共に生きていくぞと言ってくれた。C班はつながりを大切にしようといろいろ挙げていただきました。

僕は、ここでみなさんに論争してもらうとは全然思ってなくて、10時までということなのでそろそろまとめをしたいと思います。この気持ちを持って帰って、今夜はキャビンで続きを話し合っていただきたいと思います。出会いがあると、考えが変わる。考え変わると、行動が変わる。行動が変わると、性格が変わる。性格が変わると、恐らく自分の人生が変わる。人生変われば、出会いも変わると。あなたたちは、この三日間で、たぶんそういう出会いをしたと、自分たちのサークル社会を作ってくれたと思う。それを大切にしていってほしいと思います。

○深川純一 先ほど安行先生が、目に見えてるもの的位置づけとかしんどさということをおっしゃいました。その時ふつと思ったんだけど、本当にものが見えてんのかということも一つ問

題だと思うんです。たとえば犬を鏡の前に置きますと、ワンと吠えます。犬は鏡に映ってるのが自分と認識できないから吠える。今度は、チンパンジーを鏡の前に置きます。チンパンジーは賢いですから、鏡の裏に回った。何かおるだろうと。じゃ人間はどうかというと、瞬時に「これは自分だ」と認識できます。しかしその人間も、ホントの自分は何かとか、人間とは何かってのはわからない。難しい問題で、禅の修行道場で修行なさった安行禅師の専門分野ですから、また次もあればゆっくり聞くことにしますね。

1912年にノーベル物理学賞を取ったアレクシス・カレルという人がいるんです。その人の本に“人間この未知なるもの”というのがあって、これは今井先生の愛読書らしいです。この人の話を私もしようと思ったんですが、思った途端に頭から消えてしまうんです。これ、年のせいなんです。今、思い出したんで、言っておきます。1912年に偉大なる学者が「自分もわからない」と言ってることが、このフォーラムで先ほどから出でると、そのためには持ち出した犬やチンパンジーの話でした。後は、よろしくお願ひします。

○今井鎮雄 大変大事なものを提起していただき、ありがとうございました。みなさん方のお話を伺っていて、それぞれに“私”をどのように理解するか一生懸命に考えられたように思うんですね。一人になって、自分っていうのは何だろうかと考えた。私もちょっとかっこよくしようと、このシャツを着てきました。これ何かと言うと、ロータリーの世界大会がスコットランドであった時のタータンチェック……これ、家紋と一緒になんですね。その時に、せっかくだからロータリーファミリーのタータンチェックを作ってもらおうと言った。それで作ってもらったのが、このシャツです。ここにいる間は「私たちロータリーはファミリーです」と示すために、家紋を着て出てきました。たいしたものでしょ？

さて、今生きてる社会、世界の中で自分とは

何だろうかというみなさんの話を聞いてまして、どれもこれも素晴らしい、そのことにはお礼を申し上げたい。ただ、私たちは社会と直接関わっているかということがある。つまり、コミュニケーションの問題ですね。直接関わることは、人と人が顔見合させて互いに意見言って、様々に考えられるようなコミュニケーション。そういうコミュニケーションができる社会を、私たちはコミュニティと言うんですね。コミュニティを日本語で言うと、地域社会。小学校区や中学校区で「コミュニティを作りましょう」と言う。これが、相手が見えないようなものであるならば、それはコミュニティにはなり得ない。

そうした、阻害されたコミュニティの中でどう生きるか？ 掃除してくれる姫路の会社の諸君たちも、通りがかりに「ありがとう」と言う人もいるでしょ？ その時はお互い顔を見合わせニコッとする。そういうことから一つ一つつながりができるわけですね。私たちは、こうした行動や言葉を通して互いがつながっていく。これはインター・アクションと言って、互いに育つということ。ところが、だんだん時代が変わってきて、顔と顔を合わさなくてもやっていけるようになってきた。インターネットや携帯電話ですね。互いの顔を見ないから、温かさがわからない。言葉だけが行き来してることはできるけど、感じることはできない。これが、IT革命が持つ大きな問題点なんです。安行さん言われたように、ITというのは大変いいツールなんです。しかしそれはツールでしかなくて、本当の社会を作ることにはならない。そこに錯覚があるんですね。

深川さんと私は32年間ご一緒ですが、「私80になったから、あなた90でしょ」などと余計なことを言う。でも、互いに顔見てから笑って過ごせる。そういう人ととのふれあいがあつて初めて、関係が深くなる。もう一つの社会にソサエティというものがありますが、これは便宜上、何かのために必要なもの。ソサエティとコミュニティの違いは、顔を見合わせるかどうか。たとえば地域名のような単なる社会がソサ

エティで、それがコミュニティになるには、互いが深く関わらねばならない。友情とか、愛情とか。お母さんの愛は、自分を犠牲にしても後の人たちにという崇高なもの。フランスで「プラスラブ」って本を書いたエリザベート・バルティールって人が、母親の愛は自分を愛することと深く関わってると言ってた。対して、宇宙に抱き抱えられるような見返りを求めない愛もあるだろうと。それを、私たちは神の愛と呼ぶ。とてもそれには到達できませんけど、そういうふうに愛そのものもいろいろ違ってる。

みなさんが明日卒業すると、ライラリアンというライラで勉強した仲間となる。ロータリアンと一緒にになって、世界をもう一度考え直そうとする。今日はみんなで“私たちと社会”を考えましたが、私たちロータリアンは世界をイメージして考えます。特にロータリーではワールドコミュニティという、世界中の人たちが同じ人間として平和や友情などを見つめ、みんなで努力していくじゃないかとする。地域社会、家族社会から発展して、国家間の問題も考える。核爆弾や地雷などをなくさないと、平和な世界はできないだろうとする。世界の人たちのこと考えるのは、大事な問題です。

情報化社会になってまだ20年くらいしか経たないかもしれません、私はこれでも兵隊に行ってました。私がフィリピンまで飛ぼうとした時に、アメリカ軍がフィリピンを制圧して制空権を奪われて、私は台湾で待機してた。すると、「お前の部隊は全滅した」と。私は、部隊から4日ほど遅れてたんですね。だから助かった。それで今度は、上海にある海軍航空隊に見張りの指揮官として行く。どんどん爆撃されるけど、ここでも死ななかった。……あ、こんな話してると明日話すことがなくなっちゃうから止めましょう。

ですから、“私たちと社会”を考えていくと、世界の人たちと一緒に生きていくんだということに到達して、そこでは文化の違いがあります。チンパンジーと人間くらい違ってる。アフリカ行った時に内陸部の人と話して、「カニって何や」と目を丸くしてた。僕らの知らない

ことだって、いっぱいある。そういう多文化の中でこれだけコミュニケーションが発達していくと、いろんなこともわかり合えるようになります。

どうすれば平和に生きれるか、今日の石井先生の話でもガンジーの理想主義から得ることもたくさんある。効率の問題じゃなくて、人の問題として考える。みなさんも、これからライラリアンになったら、単なる地域社会でなく、日本社会だけでなく、世界の中で私たちは何ができるかというここまで成長してほしい。昨日のキャンプファイアーでも言いましたが、今までに戦争したりした大人が悪かった。今は、みんなが一番先におる。そうした自覚も身につけていただいて、これからは進んでいってもらえたと想います。後は、明日の私の話とさせていただき、ごめんなさい。

○安行英文 ありがとうございました。そういう先生の、私は26年前の受講生です。

ピーター・ドラッガーっていうマネジメント学者が書いてる本の中に、「なぜ生きるか」の一つの答えとして、「誰かの記憶に残るために生きてる」とあります。以上、終わります。

深川 ありがとうございました、これでフォーラム終了します。これからは、みなさんがお酒飲んだりおしゃべりしたり楽しむ時間です。充分に楽しんでください。ただ明日は今井先生の大変な話がありますから、飲み過ぎて二日酔いにならないようお気を付けてください。以上、ありがとうございました。



## いのちを受け継ぐ

### 今井 鎮雄 氏

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー  
(神戸西RC)



■ 1920 年生 同志社大学経済学部卒業

■ロータリー略歴

1980-81 RI 第 268 地区ガバナー

1982 年 5 月、1983 年 5 月 国際協議会グループリーダー

1984-89 国際ロータリー青少年委員

1995-87 国際ロータリー理事

1999-2000 国際ロータリー RYLA 委員

2003-08 ポリオ・プラス・パートナーグループ委員長補佐メジャー・ドナー、米山功労者

■主な役職 兵庫県青少年愛護審議会会長、神戸市青少年育成協議会会長、(社福)神戸市社会福祉協議会理事長、(財)兵庫県青少年本部顧問、(学)啓明学院理事長、(財)PHD 協会理事長、等を勤める。

○司会・日野 みなさん、おはようございます。4日目の朝になって、定刻に集まれなかつたのは非常に残念です。昨日、石井先生が「定刻主義でいきましょう」と言ったんですけど、全員集まるのに5分も超過してしまっちゃあ、せっかくセミナー受けて人間的に成長したと思われるあなた方なのに、最後に味噌を付けましたね。今井先生は海軍に従軍しておられたんですけど、海軍では5分前精神というのがありますし、5分前には必ず集合するというのが決まりだったんですね。みなさん、気をつけてくださいね。では今日は最後の日で、今井先生が深いお話をなさいます。例年4日目には今井先生がとてもいいお話をなさるので、そのためだけにやってくるロータリアンもおるくらいなんですから。(笑) みなさん、笑っちゃいけません。では、今井先生よろしくお願ひいたします。

○今井鎮雄 おはようございます。この私の時間は、今まで聞いていただいた先生方の話を振り返り、それがこの R Y L A とどう関係しているのか、なぜ私たちは R Y L A をやっているのかと一緒に考えていただきます。

ロータリアンの願いは、地域のリーダーシップを担う優秀な人材を育てること。どんな人をライラリアンにしたいかということは、重要です。そのことを踏まえて、それぞれのクラブが地域の中で探し出した人に「R Y L A に行ってみないか」と声をかけているのです。そのようにしてここに集まってこられた皆さんは、新しい世界を作るためにこれから共に協力していただきたい。視野を広くして生きることを考えほしいというのが、私の願いです。

#### 講義を振り返って

一昨日は、高山先生がカンボジアのことを話してくださいました。地雷が埋まっているかも

しれない畑を耕さなきゃならない。ここなら大丈夫だろうという所で爆発して亡くなった人もいる。そんな危険な状況の中で、種を蒔く前に地雷を取り除く、あるいはそこで育てた芋で焼酎を造ろうと、酒蔵会社の篠原さんが行く。その焼酎はいくら飲んでも頭が痛くならない。画期的なお酒ができたと皆が喜ぶ。どうしてそんな命がけの苦労をするのかと聞かれると、それが彼のヒューマニズム、ということなんです。それでカンボジアの人たちは日本人を信頼してくれる。人と人の交流とは、そういうところから始まるのです。

これからマグロが食べられなくなると言つて、先日、皆大騒ぎしました。先進国のはほとんどはマグロを取ったり売ったりするのを規制しようと言う。開発途上国の人たちは、いろいろ利害関係はあるけれど基本的に日本を応援した。そんなことが新聞に大きく出ていました。日本の提案は詳しく、資源の状況はこう、近畿大学などはどれだけマグロを養殖できるようになったかも報告している。それを見て開発途上国の人たちも、「日本がそう言うなら」と言って、先進国の意見が崩れた。これまでG7と言われる国が決めていた世界の方向づけが、G20になって違った方向性が出るようになりました。アメリカやロシアのような大国が動かしていた世界の潮流が、多くの国々が一緒に動かす時代へと変わろうとしています。今回、日本の意見が支持されることになったのも、時代の流れの転換点のようなもの。そういうことを皆さんに考えていただきたい。篠原さんの活躍でカンボジアの人たちから信頼されるようになり、ベトナムでも一生懸命やってくださって、ベトナムの人たちからも信頼を得られるようになった。そうしたことが、アジアの中でどれほど大きな日本の財産になっているかわかりません。

時代は二つの次元で動いています。一つは現実問題。もう一つは私たちが国や世界の未来を

どう考えるのかということ。私たちはどちらかというと、目の前の問題を中心に考える傾向があります。たとえば、2008年にアメリカのリーマン・ブラザースが経営破綻しました。日本のある経済学者は、「大手証券会社が倒産したといつても、私たちには直接関係はない。当座はお金が回らなくなつて大変だろけど、日本は何も心配ありません」と言っていましたが、見当外れでした。企業は規模を縮小し、責任を問われずに人員整理ができると安易に派遣社員を採用して、正社員をどんどん少なくしている。基本的に経済は間違った方向へ行ってるんじゃないかな。これからどうなるんでしょう。

石川先生はガンジーの話をされましたね。ガンジーは、「経済は、インド人みんなのものだ」と言いました。決して効率的ではないにしても、多くのインドの人たちが幸福に生きる方法は必ずあると指導しました。

経済学は、今から2世紀くらい前、産業革命が起り資本主義社会になった頃に生まれたものです。資金を集め、労働力と資源を使って効率的に製品を生産する。経済は利益をどれだけ生むかということを中心に動き始め、いつの間にか私たちは、効率的かどうかということが人間が生きるうえで一番大事だと考えるようになってしまったのではないか。

人々は口を揃えて「時代は変わった」と言います。20世紀後半から情報技術が急速に発展し、IT革命で金融資本主義、グローバリゼーションなどが一気に進みました。核ミサイルを作ることもできれば、携帯電話ひとつでいろんなことができるようになりました。ただ、資本主義社会は金融資本主義になって、あまりにも原資の消耗が激しい。効率はよくなつたかもしれないけれど、大気中のCO<sub>2</sub>の増加で地球全体の環境が今までと違う状況へ急速に進んでいます。

地球は45億年前にできて、6500万年前は恐竜がいました。私が子どもの頃、恐竜は空想の产

物だと思っていました。でも、篠山から恐竜の骨の化石が出てきた。本当にいたんですね。ところが地球の環境が急変して、絶滅してしまった。人類だって同じ道を辿るかもしれない。天災が続いたり、空気の成分が変わって呼吸できなくなったら、人間の歴史はそれで終わり。神様は「人間の次は、そういう環境に耐えられる生物が生き残ればいい」と考えているかもしれません。そんな危機的な状況にあるのが、この21世紀なんです。互いに殺し合うための核ミサイルの開発に人間の知恵や金をつぎ込むではなく、どうすれば皆が生きていくのかを人類全体で考えなければならない時代になったということです。

では、果たして経済学はこのままでいいのだろうか。もう一度、経済学を考え直そうという声が大きくなってきました。最近は雑誌でも「経済学は有効か」という特集を組んで、経済学は変わらなきゃいけないと主張しています。しかし、どう変わるかは誰にもわからないのです。

アメリカの新古典派の経済学者ミルトン・フリードマンは、効率を高めることを追求してノーベル経済学賞を受賞しましたが、昨日の石川先生のお話では、アマルティア・センがそれを批判したということでした。アマルティア・センは、アジアではじめてノーベル経済学賞を受賞した人で、インドの出身です。センは、みんなが幸福になるための学問が経済学だと言い、フリードマンは、より効率的であることが経済学だと言いました。ひょっとしたらこれは、核を平和利用に使うか、兵器として使うかくらい大きく違う問題かもしれないのです。現実を見れば格差はどんどん広がり、職につけない人が増えています。世界で子どもたちが毎日何万人も死んでいる。人間が苦しんでいる。ならば、私たちが頭を切り換えるしかない。どうしたら平和が保てるのか。今をどう乗り切って、新しい時代を迎えるのか。今、ロータリアンとしての資質が、私たちに問われています。

効率優先を掲げて新古典派経済学をリードしてきた人々を、センは「賢いけれど、愚かな人々だ」と言いました。なぜか。「人間」を忘れてしまっているから。私たちは往々にしてそういうことがある。会社でも仕事に一生懸命取り組むのはいいが、基本をないがしろにすると本末転倒になる。大事なのは人間か、お金か。やっぱりお金って言う人が多い。豊かになるのはいいのですが、豊かになるほどゴミは増えるし資源も消費する。しかし、時代は変わりつつあります。いま私たちはそういう状況のただ中にいるから、かえって見えないだけ。後世になってこの時代が「歴史」になればよくわかるでしょう。そのことを自覚しながら、これからの経済を人間に焦点をあてて考える必要があります。経済、政治、人間の幸福、これらは決して両立できないものではありません。私たちロータリアーが、ポリオを世界からなくそうと努力しているのも、その一つの例ですね。しかし、目標を見誤った大変なことになる。

昨日、石川さんは「21世紀は、はっきりとは言えないけど、暗いですね」とおっしゃいました。確かに21世紀を生きていくあなた方が、新しい時代についての明確なビジョンを持たないと、暗い。しかし、頭を切り換えて世界の人々と共に生きるために新しいルール作りを考えるなら、未来を切り開いていくことができるでしょう。

今やグローバリゼーションの時代ですから、世界を一つとして考えないといけない。でも私たちは、まだその構図を描けていない。昔の国家資本主義と同じようにグローバリゼーションを進めるから、摩擦が起きている。何かあれば戦争さえ起こりかねない、そういう時代の屈折点にある。ですから皆さんには、時代の舵取りを誤らないよう、お願いします。

第二次世界大戦は、帝国主義的考え方を持つ国と民主主義的な考え方を持つ国の戦争と言われました。日本では太平洋戦争とも15年戦争とも

呼ばれ、アメリカもずいぶん国力を消耗したけれど、日本も大変な犠牲を払いました。私は戦争末期に海軍航空隊にいました。あるとき不意の爆撃を受け、竹林に逃げ込んだ仲間がやられて肉片が竹やぶ中に飛び散りました。そういう地獄図を見てしまうと、人間がいかに愚かかよくわかります。仲間が次々と死んでいくのを見て、一体何のための戦争かと思いました。自分たちの欲望を満たすために利権を肥やすために、理屈をつけて戦争を始める。知恵を備えた人間が大勢いるはずなのに、なぜ別の方向を考えられなかったのかと、つくづく思いました。

いま、沖縄問題への関心が高まっていますね。終戦時、アメリカは沖縄を占領し、軍事基地にした。中国やロシアに対して最も近い基地です。占領から30年経って日本は沖縄を返還してもらいましたが、その前に、アメリカは沖縄の人たちに聞いたのです。「アメリカの51番目の州になりたいか、日本に戻りたいか」。返還前の沖縄へ苦労して（パスポートが必要でした。）友人に会いに行くと、「僕らは、どちらが幸福になれるかな」と真剣に尋ねられたくらいです。私はつくづく考えるのですが、日本は敗戦のしこりを沖縄という日本の隅に残したまま、何ごともなかったかのように過ごしている。それでいいのか。アメリカは戦略上ここに基地を置かざるを得ないから、昨今のようにあっちへ行けこっちへ行けといわれても、聞かないでしょうね。ただ、アメリカも計算外だったのは、兵士が騒いだり、女性に乱暴したり、盗みに入ったりと勝手なことをしてかして、沖縄の人たちはずっとそういう被害に遭ってきた。航空機も爆撃機・戦闘機だから、音も2倍3倍、飛んでいる間は何も聞こえない。基地を撤去してほしいというのは、人間として当然の要求でしょう。鳩山さんは「五月末までには決着させる。トラスト・ミー」と言いましたが、これは大変難しい。私たちはこれからそういう課題に真摯に取り組んでいかなければいけない。

昨日は皆さんと“私たちと社会”について考えました。誰もが、身近にある一つの価値観に依って生きていると思っていました。日本で生活している人は、日本の文化に依って生きている。当然です。けれど、異なる文化を持つ人もいる。それを理解することが、多文化共生の社会では必要です。皆さんはグループとして3日間と一緒に過ごしました。それぞれ違ったアプローチをとり、違った意見を発表しました。それもまた、小さな多文化社会です。世界で英語が一番下手な国はどこかというと、日本ですよ。中国からの留学生の多くは英語ができます。インドはもちろん、韓国も。なぜ日本人は英語が上手くならないのか。それは、世界の文化の中で日本文化はかなり異質だと、私たちが思っているからです。自らの文化に対する誇りもあるでしょうけれど、世界を相手に何かしようと思ったら、昨日のあなたのように、何でもシェアできるようにならないとダメです。外国から来ている人は、日本の文化を理解しようと一生懸命です。外国人だからといってチヤホヤされるのは最初だけ。実際に生活するとなると大変ですよ。

ロータリー米山記念奨学会をご存じですか？ ロータリーを日本に紹介してくれた米山梅吉さんの名を冠した、日本の民間で一番大きな来日留学生を支援する奨学金制度です。中国にロータリーはないけれど、この奨学金を有効に使っています。去年、中国でエリートになった元奨学生が集まって、これだけ日本のロータリーにお世話になったんだからと、米山記念奨学会に感謝する会を北京で開きました。20何名かが遠い所から集まり、奨学会の理事長をしている板橋元国際ロータリー理事が行くと、政府高官まで来てくれたそうです。経済などの現実問題に注意を払うのは当然として、「今」という枠組をはみ出しても、将来に向けて進まねばならないときがある。何を、どう頑張らないといけ

ないのかは、誰にもわからないことです。

### これからの世界を考えるために

参考として、少し本を紹介します。一つは今年一月に出た岩波現代文庫の「トランス・クリティック」。著者は、柄谷行人さん。“トランス”は“交流する”。“クリティック”は“批判”。交流しながら批判するってどういうことか。もう一つは、「atプラス」という雑誌の“21世紀の市民社会”という特集。いろんな人がいろんな角度から、21世紀はこうなるだろう、こうなるべきだと書いていて、いいチャレンジ要素を含んでいます。それにアマルティア・センが「危機を越える資本主義」を書いています。大きな問題を起こしている今の経済システムには未来がない、それを乗り越えて初めてこれらの経済はスタートできる。21世紀はよほど工夫しなきゃいけない。もう1冊は、慶應大学教授、金子勝さんの「新・反グローバリズム」。これまでの経済では日本はもたないという内容。つまり、「今」を読んで「次」を考えるということです。それが大事なんです。金子さんは経済学者で、国の政策作りにも関わり、データも豊富に持っていて、この本はグローバリゼーションという観点から経済の構造をもう一度見直そう、経済学はこのように変わらなければならぬというので、具体的でわかりやすい内容です。

先日、ロータリーのグループ・スタディ・エクスチェンジ・プログラムで、台湾から5人のメンバーが来日し、神戸を中心に4週間の交流プログラムを持ちました。中に福祉を専門とする人がいたので、新しい福祉社会を考える勉強会を用意して、意見を交換しました。台湾のメンバーから、日本は少子高齢化と言われているが、2050年の日本像をどう描いてますか、と尋ねられた。日本では5年先、10年先はともかく、そんな先の計画はまだ十分に練られていない。福祉に従事する方はここにも何人かおられます

ね。今は混乱の中になりますから、福祉の将来は極めて政治的問題であり、社会的問題です。門外漢でも、なかなかうまくいってないということはわかります。でも、台湾ではそういうことをずっと先まで考えているそうです。日本にも新たな指標が必要ですね。新たな学説、新たな潮流がなかなか出てこない。昔のように、これとこれを勉強したからこんな仕事ができる、というわけにはいかない。時代はどんどん変わりますから、いつも「その先」への訓練をしておかないといけないです。

アマルティア・センの「危機を越える資本主義」は、こんな書き出しだす。「2008年は危機の年だった。一昨年、食料危機は特にアフリカの人を襲った。記録的な原油価格上昇が起き、石油輸入国は大変驚き、秋には世界経済の悪化が発表された」。いわゆるリーマン・ショックです。アメリカ政府が公的資金をゼネラル・モーターズに出さないといけなくなったり、大問題がつぎつぎ起きて世界の経済が落ち込み、回復には4~5年かかると言われています。そういう景気の悪化の中で、最も影響を受けるのは、不況以前から弱い立場に置かれていた人たち。派遣社員とかホームレスの人が増えたという現実があります。お金をより多く儲けようとするのが経済構造の本質なのか、資本主義が変わらぬきやならないのか、それが問題だと、アマルティア・センが書いています。私がさきほどから、皆さんはこれまでとは違う社会の責任を担うんですよと言っているのは、のことなんですね。

新しい資本主義というコンセプトのもとで、フランス、イギリス、ドイツは、昨年1月「新しい世界、新しい資本主義」というシンポジウムを開いて社会構造がどうあるべきか議論をしています。影響力のある国の政治のトップが集まり、真剣に考えようとしたことは何を意味するのか。この問題を乗り越えないかぎり、新しい世界がやってこないと誰もが感じているので

す。ドイツのメルケル首相は、ドイツに古くからある社会的市場経済という考え方を紹介し、これが新しい資本主義の青写真になるのではと提案したそうです。

日本は新しい政府を作りました。保守派勢力から民主党勢力へ。国民は、新しい政府はこの事態に対応できるのかと、興味を持って見ていました。たとえば、「子ども手当」。先進国中、最も出生率の低い国の一ひとつ、日本で、国が子どもの養育費として毎月1万3千円を支給するというアイデアはいいのですが、今のように経済が衰弱している状況では、その財源を捻出するために他の予算を削らないといけない。まだまだ一つの思想になりきれてないところに、問題があると思います。

センは、長期的観点から社会機構変革を考えることだと思います。21世紀の世界の方向を考えるなら、そういうことを考えてください。当面の危機にどう取り組むかということとは別。それはそれで方法を考え乗り越えながら、新しい世界の構造を考えないといけない。次に、長期的に見た時に新しい構造になるかどうか、そこを押さえないといけないと言います。ある種の資本主義を本当に必要としているのだろうか。過渡期においては少し柔軟に対応する方法を探ろう。そして、どのような長期的変革が必要とされているかを吟味し、どうすれば現在の危機を最小限の損害で乗り切れるかを早急に考えること。彼はその後に、学者として経済論を繰り広げています。

柄谷さんの「トランス・クリティック」は、あるものを好意的に批判し、批判した部分を補足して新しい論理を作り上げようという考え方なんですが、この意味を巡ってトルコの哲学者が研究会を開いたそうです。この本、読んだことのある人は？後ろの方にいますね。難しいですよね。“クリティック”という言葉を使った有名な哲学者カントと、「資本論」を書いたマルクスが出てきます。マルクスは、資本が誰か

に集中するより、みんなに公平にやがて世界中に行くようにと考えた。カントが見たら現在の構造をどう批判するだろう、マルクスから見たら今の分配方法は正しいだろうかと検証しながら、柄谷さんは本を書いた。

少し抜粋すると、カントから経済学への批判がなぜ必要か。マルクス的批判にとってはカントの考え方、倫理の必要性がないと、単なる下からの分配主義、互いに分け合うだけのものになる。その中に思想を込めるには、カントからの批判が必要だ。カント的批判から再出発しないなら、マルクス主義あるいは社会主義運動の蘇生はありえない。要するに社会主義、共産主義の考え方そのままでは新しい時代を生きられない。皆で平等に分け合うという考え方は正しいかもしれないが、根底にカント的批判が必要だ、というのが彼の主張です。では、カントなら現代をどう批判するか。カントは「純粹理性批判」を書いた。それは考え方や思想をもう一度整えなきゃいけないということ。皆、「理想主義」と言うけれど、本当はそうじゃない。純粹な「場」においてでないと、あらゆるものはただの空論になってしまうのです。哲学や思想というものは、実践的なものの再建でなくてはならない。実践的とは道徳的なもの。それがないと再建はできない。コミュニケーションは何よりも道徳的なもの。それを再建するためにこそ、共産主義への批判が必要なのです。

ポスト・モダニズムの中であらゆるもののが規制されてしまったが、そうなったのは共産主義に責任がある。とはいえた共産主義という理念を再確立しなければ、われわれは新しい社会を作ることができない。皆で分かち合って生きようというその考え方は、活かされなければならない。しかし、かつて共産主義者が唱えた共産主義は大事な点、すなわち「道徳的」なところが抜け落ちている。柄谷さんはこれを取り上げて、だからカント的批判がなくてはならないと思うと書いています。時代が変わったことを理解す

るために大事な本だと、私は思いました。

経済学は倫理学と区別されて考えるべきだと言われてきました。効率を追求することと人の幸福を考えることは別の次元の問題で、それを一緒にするのはおかしい、と。どうすればもっとも効率が上がり、経済が活性化するのかと考えるのが新古典派経済学で、欲望やニーズに合わせてモノを効率よく作ることを分析してきました。今、そういう考え方でいいのかと反省の声があがっています。資本主義経済は終わり、経済学はいらなくなつたのでしょうか。あるいは、新しい経済倫理が生まれるのでしょうか。アマルティア・センは、経済学を人間の幸福学として考えます。

国家の財は、国民へ、教育とか医療とか福祉とか安全とか多くの公共財にして還元する、たとえ税金が高くて月給が少なくなつても、国家はこういう課題に取り組むんだという方向、考え方ですね。どれだけお金が注入できるかなど、難しいのですが。

アメリカの社会保障は、最も貧しく困っている人たちを助けるけれど、後のは自力でやってください、そのかわり月給は少し多めに払いますよと自由裁量の部分を大きくしています。それに対して、北欧諸国は公共財を大きくして豊かにします、そのかわり月給は少なくともいいでしょう。だから北欧では、収入の多い芸術家やプロのスポーツ選手の人たちは税金が高いと言って、国籍を別の国に移す人がいますね。

日本人の商社マンがストックホルムのアパートを借りて生活を始めた。奥さんが近所に挨拶に行くと、どの人も親切で、買い物はあそこでここでとアドバイスしてくれて、スウェーデン人は親切だと喜んだ。ある日、隣の奥さんが足をケガしたので、日本人の奥さんは、かわりに買い物に行きましょうと申し出た。隣の奥さんは怪訝な顔をしたけれど、その時は理由がわからなかった。1週間買い物に行ったら、隣の奥さんが「私、あなたにいくらさしあげたらいい

の」と聞く。日本人の奥さんは驚いて「好意でしたことだから、お金はいらない」と言うと、「ここでは、こんな時は電話を役所にかければ、買い物ヘルパーが来てくれるの」。スウェーデンではヘルパーへの報酬は税金でまかなわれる。そういうことまで公共財の中で対応するシステムです。お金を公共財に使うか、自由に使うか。この違いは大きくて、大事なことです。この考え方方がいいかどうかは、検証が必要です。時代はどんどん変わります。検証し、コンセンサスを得るという手順をとらないと、次の段階へうまく進めないでしょう。

### 共に生きるということ

いまから百年前の1909年、賀川豊彦という21歳の青年が、社会的に弱い立場の人と共に生きることを決意し、新川と呼ばれた神戸のスラム地区に移り住みました。彼は1888年（明治21）に神戸で生まれ、スラムに生きる人たちと一緒に生活した経験をもとに1920年（大正9）、「死線を越えて」という小説を出すと、大正時代にミリオンセラーになり、1930年代には、世界の三聖人の一人と言われるほどになりました。

新川で暮らすようになった頃、賀川は、貧しさゆえに満足に食べられない人のために「天国屋」と名づけた一膳飯屋を、医療が必要な人のために診療所を開くなど、人間のあらゆる生活場面に対処しようとした。スラムで生まれた子ども達は、男の子はヤクザに、女の子なら置屋に売られる。本物のヤクザから「商売の邪魔すんな」と脅されながらも、賀川は「この人たちを救うには」と考え、彼等と共に住むところから活動を始めました。すると、今までして世の中を変えようとする人がいるのかと、共鳴する人がたくさん現れ、また賀川の才能、考え方、着想が次第に認められて、賀川にもう少し勉強させようということになり、1914年、アメリカへ留学します。プリンストン大学の神学校で学び、ニューヨークでは労働者がプラカ

ードを立ててデモ行進をするのを見ています。1917年に帰国、新川に戻り、労働運動に参加してその指導者となります。労働者には「私たちはこれだけ必要です」と言いなさいと指導し、資本家は「そんなに困ってるなら、賃金を上げよう」ということになれば、運動は成り立つ。これを友愛の労働運動という言い方をした。ところが、当時ソビエトから来た運動を見た人たちから、そのやり方は生ぬるい、賀川は夢みたいな話ばかりするといわれるようになり、いつしか運動が武力闘争に変わっていくと、賀川はそれについてはついていけず、最後は労働運動から離れていきます。

また賀川は1920年、神戸に生活協同組合を作りました。後に彼は招かれてアメリカで“Brotherhood Economics”（友愛の経済学）と題した英語の講演で、協同組合の思想を語ります。それが評判となり、各国語に訳されて出版されました。けれど日本では、あれは素人の経済学だと長い間、相手にされなかった。近年、賀川の考え方方が再評価されるようになり、この“Brotherhood Economics”は新しい社会のあり方を考えるうえで大切な経済と倫理の問題を取り上げられているということで日本語に訳され、昨年、「友愛の政治経済学」というタイトルで出版されました。

新しい時代が来る時は、単に夢見るだけではなく、実行し、検証していくことが必要です。賀川が取り組んだ福祉や医療、教育、労働運動、協同組合、平和、共生といった幅広い活動の中でも、それができたものは今日まで存続し、十分でなかったものは、消えていった。戦前、「お前のやっていることは資本主義で、日本の国体に沿わない」と言われ、何度も留置場に入れられた。入れられてすぐは看守に呼び捨てにされたが、最後は“賀川先生”と呼ばれていたらしく。それほど苦労をして社会運動をやったのに、戦後、社会党が日本にできた時、彼は「政治はやりたくない」と言い、「あなたの考えを実行

するから」と請われて、発足の際の万歳は賀川さんの発声でした。

第二次大戦後、日本に連合軍が進駐して来た時、マッカーサー元帥に日本について、天皇制について、家族社会のあり方について説明し、「こうしなきゃダメだ」と堂々と意見を述べた。東久邇内閣に入るように頼まれたけれど辞退して、内閣参与という肩書をもらいました。牢屋に入れられようと、内閣参与になろうと、賀川さんは自分のやるべき仕事を、やった。その今日的意味を新しい時代の変革点で考えるために、去年1年は「賀川豊彦献身100年」を記念して様々なプログラムを行いました。

最後にもう一度、皆さんにお願いします。新しい世代を担うあなた方は、変化する世界の状況の中で日本はどのように変わっていけばいいのか、遠くを視野に捉え、一方で今できることは何かを考え、そこから新しい世界を作っていたい。世界のロータリアン・ライラリアンが手をつなげば、きっと大きな力になるはずです。

○司会・日野 先生、どうもありがとうございました。深い話を2時間半、先生は90歳で立って話される。私の憧れの人です。いつか、こういう人になろうと思います。次は、閉講式です。ちょっと休憩します。





## 閉講のあいさつ

中村 尚義

国際ロータリー第2680地区ガバナー  
(洲本RC)



○中村 おはようございます。昨日、うちの芦屋ロータリークラブで50周年式典ございました、私服で行って、今日は制服で来ました。これが私のユニフォームでございまして、もう一つの理由は、見事に4日間このスケジュールをこなされて、自分のものにして帰ることへの敬意を表しまして、私が持ってるいいものを全て付けてまいりました。

先ほど今井先生の話にもあったんですけど、私は長崎で生まれました。原爆の話ありましたか、ちょうど2歳の時に原爆に遭ったわけです。5~6km先に落ちましたから、直接なら当然被爆してるんですが、山の向こうということで助かりました。でも一応は被爆者となっているので、病院に行くとタダで済む。なので、今日は1,000円くらいかかるかてるかと思ったらこれを貯めることにして、それをボリオの方に持つて行こうという気持ちはあるんですが、途中でお金なくなったりすることがあります。

それから淡路島に行きました、淡路では大震災と大水害に遭いました。ほとんどの大災害を私は経験してるんですけど、こんなに元気で素直に育つります。なぜかと言うと、私の家内ほど怖いものはない。あれ以上のものはないですから、それ以外のものはだいたい耐えられる。

兵庫県が生んだ偉大な教育者で戸井先生の方が、「本物は続く」と。統けば本物になるという話があります。今まで4日間をあなたの方のものにされれば、あなた方は本物である。ロータリーも、本物になるためには30年かかる。

私が今25年ですから、あと5年も経つともっとマシな人間になれるのかも。その戸井先生が、人生を72で区切ってこれを3で割ると24時間、1日になります。ということは、30歳の人は午前10時。私は66ですから、午後10時。あと2時間しかない人生。10時っていうともう寝る前ですけど、この数日間は宴たけなわの10時でしたけど、今井先生は90ですから朝の6時。一旦パタッといった人がまた起き返って2時間半もおしゃべりになる。朝の6時だからですよ。あなた方はだいたい10時ですから、これから的一日を考えたら人生であること間に違ひありません。

ですから、今日学ばれたことは何かの足しにしていただきたい。一つだけ僕が申し上げたいのは、日頃よく権利と義務と言われますが、たとえばみなさん通学通勤で駅まで行く時、公道を通って行くとして、その道を直接行けば早いけど、人の庭先まで通るわけにはいかんので公道を行くわけです。それは権利ですが、人の庭先を通っちゃいけないってのは義務なんです。“義”というのは、人の道って意味なんです。人の道を務めることが義務であって、強いられるものではありませんので、そのへんも解釈していただきたいと思います。

最後に一言。私の好きなカントリー・ミュージックに、ウイリー・ネルソンっていう歌手がいます、「ユー・アー・オールウェイズ・オン・マイ・マインド」。みなさんは、私の心です。またお会いするのを楽しみに、今日は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



# 閉講のあいさつ

岡内 紀雄

国際ロータリー第2670地区ガバナー  
(高知西RC)



○司会・日野 ありがとうございました。じゃ、2670地区の岡内ガバナー、よろしくお願ひします。

○岡内 この4日間、みなさんおつきあいいただきありがとうございました。今、中村ガバナーが原爆と地震災害に遭われたという話をされました。私は昭和16年生まれで、戦後の昭和21年に南海地震が起こりまして、経験しました。次の南海地震は今から25年後、2035年頃には必ず起こると、京大の元総長・小池さんは言っとります。この地震の恐ろしさもさることながら、5分後には大きな津波がやってきます。高知の沖合の海底の地盤、断層がズレて起こる地震ですから、今度の地震による津波は高知市内でも5mを越えるというふうに予想されてます。で、地震直後は、すぐ高い所へ逃げなければならない。特に、旧建築基準法で建てられた木造住宅の補強をしていただきたいということを強く言っとります。地震が来て2階建てがつぶれ、その下敷きになって逃げられない。津波来る。もう、助かりません。ですから、地震が来ても逃げれる状態にはしておいてほしいということを、常々地元では申しております。

食堂の前の部屋には、「人と出会い、神と交わり、愛の火の燃える所」とあります。この余島で4日間、怖いカミさんからも逃れ、非日常の生活と、静かで素晴らしい自然の中で過ごしまして、私4回目ですけど、今回も自分自身の

心と頭の中すっかり洗われて、とても清々しい気持ちになりました。きっとみなさんも同じように感じておられるんではないかと思います。

どうかこの4日間のライラ・セミナーに参加したからこそ得られた友だち、そして講師の先生方、またロータリアンの人たちのことを記憶に留めていただいて、大事にしていただければ幸いだと思います。受講生のみなさんの今後大いなるご活躍をお願いしまして、私の話を終わります。ありがとうございました。

○司会・日野 岡内ガバナー、ありがとうございました。これで閉講式を終わりたいと思います。中村ガバナーによると私は0時5分過ぎのディーンでした。みなさんのお世話しましたが、至らぬところがあったことを、どうぞお許しください。では、これをもって、このセミナーの閉講式といたします。





## A班



### ◆カウンセラー 森 廣一

今回、二回目のカウンセラーをさせていただきました。何も解らないで務めた一回目に比べて、カウンセラーの役目を今井先生や深川先生から御教授いただき、受講生と寝食を共にする中で、自分の言動を見ていただく、そして他者を気づかう姿勢を感じていただくことにより、セミナー前とセミナー修了後において、受講生が何にかを感じ、考えて成長（変化）してもらえることを期待して、A班、男子7名、女子6名、合計13名の受講生の名前、顔、性格を早く知ろうと努力しました。初めて出会った受講生同志が、そしてカウンセラー役が、二日目のレクレーション時からだんだんと打ちとけてきました。キャビンで、入浴の風呂場で、食堂で少しづつ、班の仲間意識が深まって行き、家族的な雰囲気が出来てきました。班全員が他者の事を気づかうという気持ちも自然に出来て来たように思います。最終日の記念植樹の前に思いがけず、受講生から手渡された短いながらも、気持ちのこもった感謝のメッセージを見た時、ジーンと心にこみ上げるものを感じ、受講生やおかあさん役の永田恵子さんに改めて感謝の気持

ちが涙として表われて来ました。

このセミナーに参加して3年目にして、初めてこのプログラムのすばらしさ、つまり、受講生も世話役のロータリアンも共に学び、成長できることを痛感しました。

主催者側の一ロータリアンとして、更なる微力を傾けることを再決意いたしました。ロータリアンでよかったと実感した4日間でした。感謝申し上げます。

### ◆カウンセラー 永田 恵子

新しい出会いの期待に胸をふくらませて、始まったセミナーも今無事終了いたしました。混沌をきわめる現社会の問題を色々な角度からとらえた3つの講義は、どれも私の心を強くとらえました。自分が何がしかの物を手にすれば、どこかの何かが減じている、そう考えるとともに今の経済システムを無条件に「可」とする訳にはいかない。人は人間として会社の中で生きていく以上、常にそうした事を想像しながら他を思はばかり、縁あって同時代にこの地球上に生まれ合わせた者が限りある地球からの恵みを等しく分かちあって生きていきたいものです。

四日間A班で寝食を共にし、楽しく世間話をしたり、レクリエーションで童心に帰って本気で汗を流したりしながら、深く自分と向き合い、高いレベルまで皆の「知」をまとめ上げたと言う自信がこれから的人生になんらかの力を与えてくれる事、又その力を持って次世代の社会を牽引していく人として育っていかれます事を、かたく信じエールをおくります。

本当に気持ちのよい清々しい4日間を過ごした事はA班の受講生の皆さんのがんばり、熱意のある取り組みと、いつも側で暖かいまなざしで見守って下さった森お父さんのおかげです。この様な素晴らしいセミナーを企画し、沢山の準備をして下さいました、ロータリーの皆様、有難うございました。

感謝をこめて。

## ● 和田 拓自

### 「RYLAセミナーに参加して」

この四日間、このセミナーに参加して、とても有意義な日々を過ごすことができました。最初は、どのような会なんだろう、どんなことをするのだろうと不安が多くあったけれど、すぐに班のメンバーとうちとけることができ、仲間の大切さ、協力することの大切さ、つながっていることの大切さを改めて感じることができました。様々な立場、職業の人と同じ時間を過ごし、話を深めることで、「こんな考え方があるんだ」とか、「そういう発想ができるんだ」と感じることができ、色々な意見の中で、その一つ一つを尊重し、認め合い互いに感じていくものだと再認識することができました。特に感動したことは、バスセッション、フォーラムで一つのテーマについて話し合い、発表したことです。班の中でのきずながさらに深りました。

この4日間、この余島で過ごしたことは、私の人生の中で、とても貴重なものになりました。このような会に参加する機会をくれた人々、また、この会でお世話をしてくれたお父さん、

お母さん、講師の先生、余島のスタッフ、ロータリーの方々すべてに感謝し、明日からの生活に生かしていきます。本当にありがとうございました。

## ● 廣末 匠哉

今回のRYLAセミナーへ参加させていただく事になった時は、正直不安でした。

でも、実際に始まってみると良いメンバーとお父さん、お母さんのおかげでとても充実した3泊4日がおくれました。

講義の内容も日頃聞くことのできない話だったので、難しい部分もありましたが、色々と考えさせられることが多かったです。一人で考えても分からぬ部分は、部屋へ帰り周りのメンバーに確認する。そのことによってメンバー間の理解、仲間意識の向上につながったような気がします。

私たちの班では、常にメンバーが一緒に行動していました。気がつくと朝・昼・夜の食事もメンバー全員がそろってから食べ始めました。そういうコミュニケーションの場が多かったメンバーだったので、バスセッションも良い物ができたんだと思います。

今回学んだ事を少しでも活かせるようにしていく事が大切だと思うので、帰ってからもセミナーで学んだ事を実践していこうと思います。

## ● 田村 順平

### 「RYLA セミナー」

この不安で始まった4日間、蓋を開けてみれば、とても充実して有意義なセミナーでした。1日目の高山良二さんの講義では「命」の大切さを学び、その夜は「キャンプファイヤー親睦の夕べ」で、火を通して一人一人が小さい力でも、力を合わせれば大きな力になり、それが大きな働きになる事を学びました。

2日目では、バスセッションで「私たちと社会」という大きなテーマについてみんなで熱く

語り合いました。お互い腹を割って話しあい、その結果強い絆が生まれました。そしてそのままその夜も色々な事を語りあい、カウンセラーの二人を交え世代を超えた交流ができた時に、「これがこのセミナーの大きな目的の一つなんだ」と実感する事ができました。やはりこの不況と言われている日本ではこのように世代を超えた人同士が手と手を取り合いお互い協力し合っていかなければ、いけないとひしひしと感じました。それを気づかせてくれたこのセミナーに参加できた事を誇りに思います。

### ● 越智 彩

#### 「RYLAセミナーに参加して」

RYLAセミナーに参加した4日間を振り返ってみると、思っていた以上にあつという間に時間が過ぎていたと思います。

初日、余島へ到着した頃は、4日間無事に生活出来るだろうか、友達はできるだろうか、得て帰れるものがあるのだろうかと、不安な気持ちばかりでした。最初は、慣れない共同生活で、皆どことなく遠慮している部分があったけれど、セミナー中は班単位での行動が多く、日を重ねていくごとに、皆が仲良くなっているということを実感していました。寝食を共にし、レクリエーション等楽しむところは思う存分楽しむけれど、真剣に話し合うことも出来るA班。様々な活動を通して、4日間という短期間だけど、素晴らしい友情を築くことが出来たと思います。

また、普段の生活では出会うことが出来ないであろう方々の交流はとても新鮮で、まだまだ知らない社会がたくさんあるということを痛感しました。

性別・年齢・出身地・職業等、全く異なる方が集まり、熱く語り合い笑い合った時間はとても有意義なものとなり、今後自身の人生を考える上でも、良い刺激をたくさん受けました。今回のテーマのように、“つなぐ”ということの

意味深さも同時に学び・感じていたと思います。

このセミナーに参加することが出来て、今は感謝の思い・充実感でいっぱいです。セミナーへの参加を勧めて下さった重松社長、RYLAセミナースタッフの皆様、ロータリアンの皆様、A班のパパ、ママ、みんな、セミナー参加者の皆様、本当にありがとうございました。

RYLAセミナーで学び得たことを、今後の生活に生かしていきたいと思います。

感謝・感激・感動!!

### ● 一宮 幸代

#### 「RYLAセミナーに参加して」

とてもステキな4日間でした。最初、私はこのセミナーに期待と不安をたくさん持ち込みました。余島に到着し、様々な方と言葉を交わすうちに、期待と不安はやがて、楽しみへと変化しました。チームのメンバーはとても個性的で優しくて、すばらしい人間性の持ち主ばかりで、私にとってすごく刺激的で大変勉強になりました。また、講義の内容は興味深く、まるで全く新しい世界に出会ったようなお話をしました。

様々な年代、様々な業種の方、様々な考えを持った人々と出会うことができたこの4日間は、本当にすばらしい日々でした。自分を見つめ他者とのつながりを感じ、様々な意見を交換する事ができました。今回のセミナーで感じた事、得た事を、明日から少しづつ行動に移し、またそれらを自分の成長へも活かしていくければ、と思っています。本当にありがとうございました。

### ● 妹尾 健裕

#### 「RYLAセミナーに参加して」

この度、RYLAセミナーに参加させて頂き、大変大きな経験を得る事ができました。

初日に感じていた不安感は最終日には日々の生活では得がたい満足感に変化していました。職業、年齢を越えた人達と3泊4日という短期

間に寝食を共にし、一切の偏見を捨てて裸一貫で語り合い、また、分かち合えた事で自分の持っている新たな可能性を知り、互いの価値観を理解する事の重要性を身を以て感じる事ができました。コミュニケーション、思いやる心を持つ、自尊心を持つと言うのは、人間として当然養っていかなければならない事ですが、日常生活の中では中々身に付くものではなく、自分から行動をおこさなければならぬものであると強く感じました。

また、このキャンプでまたと得がたい大切な仲間と出会う事ができました。RYLAで育んだ仲間と経験を大切にして、さらに自分に磨きをかけ、将来の生きる糧になると信じております。

## ● 伊藤 大輔

### 「4日間を通して」

今回、始めてこのRYLAセミナーに参加させて頂いたのですが、自分自身ロータリークラブというのは無知だったため、初めは不安や緊張でいっぱいでした。しかし、日が過ぎるにつれて、班のメンバーとも仲良くなり、とても楽しく過ごすことができました。

ロータリーは年齢や職業など、さまざまな方がおられ、本当に大きな組織だな、と思いました。また講義や、フォーラムなど、たくさんの人と話し合いをすることで、色々なことを学べた気がします。中でも驚いたのが、最終日の講義をして下さった今井先生は、3時間半ぶつ通しで、しかも全く原稿を使わずに語ることができるのがすごいと思いました。現在は20歳で、まだ一般社会というものに出たことはないので、今回のRYLAで学んだことを、就活や、そして今後の人生に活かせるよう、忘れることなく自分の胸に刻み続けたい。

## ● 狩野 由賀恵

### 「RYLAセミナーに参加して」

今回、RYLAセミナーに参加させて頂きたく



さんのものを得ることができました。

まず、一つ目に3人のすばらしい先生方の講義をお聴きできたことで、自分の知らなかったことに興味や関心を抱くことができました。二つ目に地域を越えた仲間と出逢いました。1日目は遠慮しながら接していたのに、最後の日はとても仲良くなりました。最後に三つ目に、自分を見つめ直すことができました。講義、思索の時間、バズセッション、フォーラムと、現状の生活では経験できないことが経験でき、今の自分と今後の自分について考えることができました。今後の自分、つまり、どうなりたいかと考えることで、自分が今後どうしていこうという想いを持つことができました。

今回、RYLAセミナーへの参加のきっかけは、前回に参加された方の影響だったのですが、本当に参加をして良かったと思います。テーマの「つなぐ」、本当にその言葉通り、私とたくさんのものをつないでくれたと思います。

今後は、今の気持ちを忘れないで、人とのつながりはもちろんのこと、全てのつながりを大切にしていきたいと思います。

最後になりましたが、4日間ありがとうございました。

## ● 鳥本 光照

### 「RYLAセミナーに参加して」

今回セミナーに参加させて頂きましたが、当初は期待よりは不安感ばかりを抱いていました。それは僕がRYLAは、もとよりロータリークラブについてても、何の知識も無く、このセミ

ナーでは年齢もさまざまで島での3泊4日の共同生活は、経験したことなく、恐ろしさも少しありました。

それが、島へ着き、ロータリアンの人々の気さくでユーモアにあふれた挨拶をしたり、カウンセラーのお2人の細やかな気配りと配慮のおかげで班の内の結束を深めるだけでなく、今回、参加されました多くのセミナー参加者の方々とも交流が出来ました。

僕の人生の中でも、これほど、さまざまな年代の方々との交流やディスカッションは初めての体験であり、非常に勉強になり、有意義に過ごせました。

このように何の不自由も感じず、セミナーのスムーズな進行が出来ていたのも、日野校長先生をはじめ、多くのスタッフやロータリアンの方々が裏で働いて下さっていたと思います。

そして今回、僕を推薦してくださいました篠山ロータリークラブのみなさんなどに感謝をしながら、僕自身が、これからは地域で貢献し、リーダーとなれる人材になりたいです。

## ● 渡部 裕介

### 「RYLAセミナー受講を終えて」

えっと開講式の時に後ろに控える先生方の多さにまずショックでした。これほど多くの方が現地で運営に関わっている人がいるのか。いったいこれからどのような四日間が始まるのだろうという好奇心が、また先生方の熱い情熱のようなものがどっと僕の心の中に入り込んできました。

受講日を重ねるごとに徐々にグループの中でつながりや団結が生まれ、1日目2日目の講義で学んだカンボジアの地雷の問題、ガンディー思想と富の分配と豊かさについての思想、3日のバズセッション、今井先生を始め、多くの先生方の講義を受けるうちに、今まで自分の中で別々の問題、自分の力なんて及ばないであろうと思っていたことが、すべて一本の線でつ

ながったような気持ちになりました。貧富の格差、コミュニティ精神の低下、国内問題と国外問題、友情、夢など、自分でバラバラの問題だったものが、実際は関心をもち、常に人類全体としての豊かさを追求する姿勢に帰結することができます。それには各個人がそれぞれ自覚をもって、さらに周囲とつながりや団結をもって一歩一歩進んでいくことができるのです。

現在の世の中は個々人が色々な考え方や思想をもっていますが、実際にはつながりがなくて協調して進めていくことができずにいる諸問題が多いことに気づかされます。

本セミナーは、一方通行のセミナーではなく、同世代、世代を超えた意見の相違に基づいたものでした。今回のセミナーも多くの先生方の様々な意見、情熱の集結なくしてできたものではないでしょうと思います。

本セミナーを受講できたことに感謝し、先生方の考えに共鳴し賛同、参加していきたい気持ちになりました。

本当にどうもありがとうございました。

## ● 佐藤 友美

### 「RYLAセミナー」

「なんですか？ RYLAって…。」

それが私の初めの印象でした。推薦して下された方からは、1人だけでの参加だと聞き、さらに不安や疑問は増しましたが、好奇心旺盛な私にとって、少し心惹かれるところもあり、参加することにしました。

この4日間で、印象にあるのは、バズセッションやフォーラムです。社会という広い幅の中からどう話し合うか、とても困りました。しかし、話し合いがスタートすると、自分の考えになかった意見も多く、それぞれの視線から、それぞれの思いを話すことができた。

また、全く違った職種や生きてきた環境の方と、この余島で出会い、考え方の違い、将来についての夢や希望などを知ることができ嬉しく

思いました。

カウンシルファイサーを行いにキャンプ場へ行く際、「友情」「希望」「愛」「つなぐ」と、書いてありました。今回のテーマである「つなぐ」とは、色々な事に対して言えることで、友情や愛に対しては、相手がいてこそつながる事ができるし、希望や夢も、憧れる相手や、ライバルとして意識できる相手がいてこそだと思う。のために、たくさんの人と会いたい。会うために、自分をもっと知り、相手を理解できるようになりたい。理解するために、声をかけたり、思いを伝えられる勇気を持ちたい。自分が、小さなことから、始めていくことで、すこしだけ大きな輪から、もっと大きな輪へつながっていくといいな。と、そんな気持ちになりました。

ありがとうございました。

## ● 玉越 亜由美

### 「RYLAセミナーを終えて」

この4日間こんなに人と話をした期間は、私の人生において一度もありませんでした。それも、初めて出会った人たち。まったく違う環境・職業・立場の人たちばかりなのに！普段私は、人と会う仕事をしている。また、ボランティア活動の中でキャンプリーダーを主として活動しています。だからこそ、このセミナーに参加して感じた、受講生みんなが、何か得て帰ろうとする姿、人と話をしようとする姿勢にこの活動を始めた頃の新鮮な気持ちになれ、心を開いて、話すことができました。また、日常生活では聞けないお話を3人の先生からお話を聞く事ができ、学生時代に感じた事のない、もっとお話を聞きたいと思いました。最後になりましたが、RYLAセミナーに参加させていただけた事を心から感謝いたします。またカウンセラーの森さん、永田さんA班のみんなありがとうございました。

## ● 兵頭 舞美

### 「RYLAセミナーに参加して」

今回、セミナーに参加した理由は、セミナー第1回目に参加した母の勧めでした。私は知っている人もおらず、「ロータリアン」の推薦で来たわけではないので、正直不安一杯でした。しかし、誰一人そのようなことは気にせず輪の中に入ってくれました。

今回参加して私の中で少し何かが変わった気がしました。そのきっかけは、「カンボジアにおける住民参加型地雷処理活動」でした。

私の知らない国、場所ではまだたくさんの地雷が埋まっており、その側では人が生活をしている。地雷処理を行っているのがその側に住んでいる住民ということに驚きました。

自分が処理を行っている最中、畑に行っている最中、いつ死んでしまうかわからない毎日。それでも住民は希望を捨てずに未来のために頑張っている姿に感動しました。私はいつも自分のことばかりで少しでも嫌なことがあれば頑張ろうと思っていたことも時に諦めてしまうことがありました。

しかし、この話を聞き、RYLAセミナーの集団生活で、たくさんのこと学ばせていただきました。

一つは、一人ではないこと。自分のことだけではなく、相手の意見をも聞き入れること。

私は、これからは常に笑顔で困っている人がいれば手を差し出せる人になりたいと思いました。そして「つなぐ」のテーマと一緒に次の世代にもこの気持ちをつなげて行こうと思いまます。



## B班



### ◆カウンセラー 久保山 洋一

ライラもライラカウンセラーも初めて。全ての先入観を持たず、白紙の状態で私はこの余島に来ました。

美しく青くきらめく海と桜の蕾が膨らみ、春待つ縁に囲まれたこの余島は、いつしか私の中で愛しい存在になってしまいました。

たった4日間という短い間でしたが、お互に「顔」も「名前」も知らない者同士が、寝食を共にし、共に飲み語り合う事で、こんなに胸襟を開く事ができる。更に互いを高め合う事ができる。本当にすごいセミナーだと思います。

若輩者の自分をフォローしてくれた吉岡お母さんはじめライラ委員の皆さんのおかげで、何とか役割を果たす事ができたと思います。

受講生の皆は、本当に不安に気持ちでこの島にやってきたのだと思いますが、この充実したプログラムの中で、4日後には「目の色」が変わり、物言の「考え方」「捉え方」まで変わったのではないでしょうか。今我々に必要な事は「考える事」「考え方を変える事」だと思います。性格は変わりません。しかし考え方を変える事はできます。講師の方々、B班メンバーの話の

中に、たくさんのヒントが散りばめられていたと思います。皆さんの社会に戻ってもう一度この4日間を思い出し、たくさんのヒントをベースに色々な事を考えてみて下さい。きっと何かが変わるはずです。

B班のメンバーは最高の人達です。君達なら何でもできる！自分の可能性信じ、色々な経験を積み、そして考え、一人一人の未来を輝かせて下さい。

君達と吉岡お母さんと出会いは、私にとって最高の財産です。ありがとう。

一回りも二回りも大きくなった君達に会える日を楽しみにしています。

### ◆カウンセラー 吉岡喜久子

#### 「ライラセミナーに参加して」

100年に一度と言われる不況の嵐が未だ吹きやまず、出口の見えない混沌とした時代が続いている。グローバリゼーションの負の部分のみが浮き彫りになり暗いニュースばかり耳にする昨今、21世紀を担う若者は如何に考え如何に生きるべきかを学び成長する場として第32回ライラセミナーが開講されました。「つなぐ」

というテーマのもと4日間本当に熱く語り深く交わりました。班分けで見た固い表情も1日のキャビンタイムではすっかり和み、旧知の友の如くの友情・信頼関係が生まれました。年齢、性別、職業、国籍の異なる13名がそれぞれしっかりした考えを持ち人生の目的に向かって着実に歩みを進めている姿に触れ、さすがRYLAの受講生だと感心しました。高山先生からはカンボジアの地雷処理の現状と平和の大切さを学び、豊かになりすぎたために忘れていた「他人を思いやる優しい心」を教えていただきました。石井先生からはガンジーの人生を通して“Small is beautiful”的精神を学び、人類が真に豊かに発展するには何が必要かを深く考える機会を得ました。カウンシルファイサーでは寒さも忘れ今井先生の話に聞き入り、思索の時間、バズセッションと体験したことのない時間の中で彼らが如何に深く考え方を語りあったかは、あの熱いフォーラムの発表にしっかりと表れていました。

経済が破綻し先が見えないと言われている現在こそ人間の本質は何かが問われています。

食堂で見たRespect・Caring・Responsibility・Honestの4つの言葉も忘れず、余島という大きく美しい自然の中で、人と出会い心を磨いたことを糧に、変わりゆく時代の正しい舵取りを担ってください。充実した4日間でB班の横の“つながり”はできました。次はそれぞれの地に戻りさらに横糸を広げ、未来に向かって縦の“つながり”的歩みを進めてください。日に日に輝きを増し大きく成長した若者の姿に21世紀の希望の光を見い出しました。多くの感動とパワーを下さった13名の皆様と良き若いパパにただただ感謝です。B班ファミリー最高！！そしてこの素晴らしいセミナーを開催していただいた全てのロータリアンに厚く御礼申し上げます。

● 畑瀬 勇樹



### 「RYLAセミナーに参加して」

この度のRYLAセミナーには勤務先の所長から声をかけて頂き、参加することができました。初日は、セミナーに対する期待と若干の不安を抱えて余島へと渡りました。

余島へ入ってからは、班員を始めとする参加者の方々と、日常生活では体験できないような濃密な時間を過ごすことができました。

4日間に渡って行われた、ユーモアを交えながら厳しい現在の社会の問題を聞かせて頂いた講義や、班員との夜の語らいは忘れる事のできない思い出となりました。

この3泊4日間で得た貴重な体験を今後の社会生活に生かし、可能な限り実践していきたいと思います。

また、このセミナーに参加していなければ知り合うことのできなかった人達と出会うことができ、思いきって参加して本当によかったと思います。

### ● 吉村 真一

#### 「第32回RYLAセミナーに参加して」

私は今まで国際ロータリークラブという団体があることをまったく知りませんでした。名前も聞いた事がなく、どのような活動を行っているのかさえ知りませんでした。そのため今回のRYLAセミナーというものは未知数でとても不安を抱えながらの参加になりました。しかし、そのような不安も、ロータリアンの方々や余島の自然、共に仲間達と過ごすうちに喜びへと変

わっていきました。

このRYLAセミナーを通して、平和や世の中に対して自分自身がいかに無力で、無知で無関心であったのかを痛感しました。しかし、RYLAセミナーに参加した仲間達と話し、議論をすることで、様々な考え方や生き方、人生観を知ることができました。のままではいけない、自分も何かしないといけないと強く感じました。しかし、今の自分に何ができるのかと考えた時に、まず小さな事から始めていく。その小さな事を大きな事へつなげていきたいと思いました。

最後に、このすばらしい仲間達と出会い、共に過ごし、自分自身の人生観を大きく変えられる機会を与えて下さった、ロータリアンの方々、余島のスタッフの方々、カウンセラーの方々、本当にありがとうございました。

## ● 石原 岳

### 「第32回青少年指導者育成セミナーを終えて」

正直、不安で、いつでも脱出できるよう、干潮時間を頭に叩き込み、余島に上陸しました。

年齢、性別、国籍の異なる初めて会う人達と寝食を共にし、皆で様々な意見を出し、時には、自分自身と静かに向き合い、議論する。日常生活では考えられないシチュエーションでの今回の体験は、自分自身を成長させ、前へ踏み出す勇気を得る事が出来ました。

今回の貴重な体験をこれから自分の社会生活を過ごしていきます。

最後に、セミナー受講生の皆、国際ロータリークラブの方々、施設スタッフの方々、4日間の有意義な時間、本当にありがとうございました。

## ● 濱田 麻里

### 「第32回青少年指導者育成セミナーを終えて」

「ロータリーって何?」「ライラって何を学ぶんだろう?」これが今回参加する時の私の最初

の正直な気持ちでした。船で余島に来た時は、「電気はあるの? 3泊4日もぶじやっていいのだろうか」と感じていました。3泊4日を終えた今、仲間との本当にいい出会い、いい思い出がたくさんあふれています。私が一番印象に残っているのは3日目の班ごとのバズセッションです。一人ひとりが「私たちと社会」のテーマにそって、意見を出し合い、深く討論しました。私の所属していたB班のメンバーは皆真剣に、そして熱く話しあいを進めていました。全体でのフォーラムのときはどの班も真剣に討論した様子がうかがわれ、とても自分にとって勉強になりましたし、とても良い機会になったと思います。最後の夜、B班の全員で乾杯をした後、一人ひとりの夢や目標、ロータリーに参加してみて等を話し合いました。私は今回のロータリーに参加し、一層自己の目標が明瞭になったように思います。これからもここ余島で学んだ貴重な経験を胸に、平和の精神をもちつづけ、地元松山でも日々精進していきたいと思います。

本当に貴重な体験の機会を与えて下さった多くの方に感謝しています。ありがとうございました。

## ● 谷口 麻美

### 「RYLAセミナーに参加して」

今回のセミナーのテーマは「つなぐ」でした。セミナーを終えた今、この「つなぐ」というテーマの意味が、やっと分かったような気がします。

私は、今年で社会人になって3年目です。学生時代は、ホームレス支援の活動をしたり今回、講師として来て頂いた高山さんの地雷処理活動を見学に行かせて頂いたりしており、「自分の知らない社会を知りたい、そしてそんな社会ともつながってみたい」という思いの元、行動できていたような気がします。しかし、社会人になってからは、時間も思うように取れず、日頃

の忙しさにかまけて社会に対して「無関心」になっていたと、今回のセミナーを通じて気づくことができました。

今回、直接ロータリークラブと関係のない私が、このセミナーに参加させて頂きましたが、偶然一日目の講師が、大学時代お世話になった高山さんであったこと、そして2日目講師の石井先生、3日目講師の今井先生が、私が卒業論文のテーマとしていた「アマルティア・セン」について講義で話されていたこと、そのようなことから、図々しくも、私は、ここに来るべくして来させて頂いたのかな…と感じ、このセミナーに参加出来たことを感謝しています。

このセミナーを通じて、『社会に対して関心を持ち、そして考え、行動できる、社会との「つながり」を大切にできる人』になろうという目標ができました。

## ● 福山 太一

世界の平和と発達に資する人間となり、奉職する。これが私の夢である。私が今回本セミナーに参加したのは、夢とは乖離した未熟な自己を少しでも磨き高めていきたいからである。

私がそのような夢を抱いたのは、学生時代に途上国を訪れた経験、留学時代に出会った同じく途上国からの研究生との触れ合いを通じて、彼らと彼らの国にほんの少しでもよいから力になりたいと考えたからである。現在私は、教師として幸運な事にI A Cの指導に関わり、様々なプロジェクトで国際理解と途上国支援の試みを行っている。しかし、常に自らの至らなさ、無力を痛感する。私は何をすべきか？どうすれば人のために生きる事ができるのか？その答えを求めて、余島に来たのである。

四日間の経験は、私の問い合わせに対して、多くの示唆を与えてくれるものであった。特にバズセッションおよびフォーラムで、「私たちと社会」について深く掘り下げていくことで、現代社会の根底にある問題を一部ではあるが認識でき

た。私は全くの一人で思索を深める事が多いのであるが、やはり、多くの友の血の通った意見と問題意識を共有する事で、一人では到達し難い高みに立つ事ができた。この経験は、何でも基本的に一人で仕事をしようとしてしまう自分にとって、新鮮なものであると共に、あらゆる社会においてそれが本質的に必要なものであると気付かされたのである。

また、今井先生の講義では、困難ではあるが我々の若い世代が革新を担わねばならない宿命を帯びることを理解し、自らの無能に再び不安を憶えると共に、なお一層勉強をし、自らを高め、その宿命を背負うという意を強くした。

大自然の中で、反省し、夢への想いをより確かにしていく。私にとってライラセミナーは、かけがえのない一生の宝となった。

## ● 番匠 一雅

### 「第32回RYLAセミナーに参加して」

今回RYLAセミナーに参加して今までに色々な研修を参加しましたが、たった4日という日でたくさんの友達ができたように思えます。今までの研修は、ローターアクト、職場と会が終わってもまた次の何かの機会で会えるという気持ちで会を終えますが今回の会はこの4日で後で会う機会がないメンバーでありますまた違った気持ちで参加をする事ができました。また他府県の人達と交流をする機会が今回初めてでどんな感じのかなと思う気持ちがありましたが県を越えてでも色々な面で共通点があるものだと感じました。私は以前からRYLAというものは言葉だけは知っていましたがこれだけの内容だとは知りませんでした。今後、後輩達にこのような経験ができるよう勧めていきたいと思います。今回の参加にあたって洲本ロータリークラブの皆様、ありがとうございました。

## ● 藤川 義之

### 「RYLAに参加して」

今回、学んだ事は書ききれない位、多々あります。その中でも一番だと思った事を挙げて置きます。それは人の考えを聞き、理解するという点なのですが、それらは、簡単な事ではなく難しいもので、それを自分の中で納得させる為には時間も必要ですし、その為の空間もいるのでは、と常に考えていました。

そういう中で今回の場はそれらの要素がそろっており、色々な事に関しての他人の考え方、意見等を聞け、ある程度、納得するまでに至りました。自分で物事に対しての答えというものは無数にあると日々、考えていますので、どれが正解かと問われればそれは答えられないものであり、全てが正解、という結論でも、良いと思っています。

自分はこのセミナーで人の考え方というものを大切にする、という気持ちを以前より高める事が出来、相手の考え方、思いをくみ取る、という事の重大性を学べたと、感じています。

今後も、それらの姿勢を崩さず、一歩一歩前進したいと思います。この場ではほんの一握りの事しか書けませんでしたが、学んだ事は数え切れない程、ありました。これらの事を自分の胸に置き、社会と接していく事をここに約束致します。

この度は貴重な体験をさせて頂いた事、誠に感謝しております。まだまだ未熟ゆえ、この程度の文しか書けませんが、その謝罪と共にここで筆を置かせて頂きます。

## ● 山口 真

### 「RYLAに参加して」

今回RYLAに参加して、本当に楽しく、出会い、いろんな話しを聞くことで、今まで漠然としていた目標ややりたい事が明確になりました。

高山先生、石井先生、今井先生の話しを聞きとても勉強になったのと、とても考えさせられました。もっと今まで以上に世界の平和を願い、

そして自分が何ができるかを常に考えていきたいたいです。その為にも、たくさんの本を読み参考にし21世紀が世界の人々にとって幸福になれるように役に立つ人間になりたいです。

現在介護職をしていますが、目標である館長も今から世界の福祉、50年後の福祉を考え勉強していくことで、最先端の施設を将来作り世界に貢献していきたいです。

又、今回出会った皆さんとこれからも友達であり世界の平和を考えていくようにつながっていきたいです。本当に良経験をすることができました。

## ● 松田 叶子

### 「RYLAセミナーを通して」

私はこのRYLAセミナーに参加することによって、多くの素晴らしい仲間に出会いそして貴重な体験をさせていただきました。

同じグループの仲間との語らいや講義、そしてフォーラムを通して「今の自分」と「これからの自分」について見つめ直すことができました。このセミナーに参加していなければ、ただ日常生活に追われて考えている余裕など、ほとんどなかったことだと思います。初めは3泊4日なんて長いなと思っていたが最終日を迎えた今日、振り返ると本当にあっという間の時間でした。

4日間で色々と体験することができましたが、その中でも一番心に残ったのは三日目の夜に行われたカウシルファイヤーです。

今井先生がお話しされている間にどんどんと小さくなっていた火が、一人一人の持っていた小さな松ぼっくりを投げ入れることによりみると再び燃え上りました。それはまさに小さな力が集まって、大きな力を作り上げていく様でした。私はそれを見て、小さなことでも、自分と同じ精神を持った人々と、社会のために何かし続けることを心に誓いました。

グローバル化が叫ばれている今日において私

は世界に関心を持って行動していきたいと思っています。

私自身、青少年交換留学に派遣していただいた経験から世界レベルで考えることができる様になったと実感しています。人種や宗教、性別、年齢が違う地球上の人すべての人が「人間」らしく生きる社会になれる様、大海の一滴でもいいのでROTEX活動や自分の職業、またはその他の活動を通して社会に還元していきたいと考えています。

最後になりましたがこのセミナーを実行するにあたって、お世話して下さったロータリアンの方々やそのご家族、そして出会った仲間達に心より感謝申し上げます。このセミナーが終わって全て終わりではなく、学んだ多くの経験を一人のライラリアンとして、これから的人生に活かしていこうと思っています。

本当にありがとうございました。

## ● 原田 梨沙

### 「RYLAセミナーを受講して」

始めこの話が来た時は4日間も知らない人と泊まりでうまくやっていけるだろうかと不安に思っていました。受講のことを先輩に聞いていてもいまひとつピンとこなくて不安はつのるばかりでした。当日移動中の車の中で“他の人と仲良くできなかつたらどうしよう”“どんなことをするんだろうか。私についていけるかな。”と不安を残しました。

講義は地雷の話・ガンジーの話でとても難しい内容でついていけず四苦八苦でした。B班のメンバーは頭の良い方が多くいたので後でキャビンタイム（討論）で話している時もただ聞くことしかできず“私は勉強不足である。”と改めて自覚しました。初日は“私は何のためにここに来たんだろう。もっと他の人がかわりに行つたほうが良かったんじゃないだろうか。”と思い一日ひたすら考えていました。しかしこのセミナーには他職種からの人もいて年上・年下

の方もおりキャビンタイムで色々な話をして視野が広くなった様に感じました。この経験を生かしこれからも一日一日大切に過ごせる様精進していきたいと思いました。

## ● 植田 杏奈

### 「ライラでの出会い」

第32回ライラセミナーに参加して私が得た一番大きなものは出会いです。大学生活では触れ合う機会のない私の少し上の世代の方々との出会いは衝撃的でした。私達B班は、初日の夜からすぐにうち解け、各々の過去の話は刺激的で勉強になることが多くあり、また初対面であるにも関わらず、私の悩みにも驚くほど真剣に皆さんが考え、答えを出すヒントを下さったことは、本当に有難く、嬉しかったです。同年代の友人よりもたくさん苦労も経験も重ねられた先輩方の意見は、説得力があり、最後には自分で自分の問題をどうするか決めることができました。

ライラの良いところは、『真面目』なプログラムも組み込まれているところです。班での『私たちと社会』発表も、午前のレクチャーも、それについて話し合ううちに、面白い意見をたくさん聞きました。同時に、私自身が理想を求めすぎているのかもしれない、と初めて感じもしました。ボランティアに興味を持ち共に活動する仲間とだけで、夢に溢れた意見を交換してきた私に、社会人の方の仕事のハードさ、毎日の精一杯さの話は衝撃的でボカーンと一発殴られたようでした。「大きな目標の前に目先の目標を決め、まずそれを達成しなければ大きな目標は成し遂げられない。」「しかし例え失敗したとしても、考えようではプラスになる。」という心に響く言葉が聞けたのも、真面目プログラムがあったからだと思います。

最後に、ライラセミナーに参加を勧め、推薦し、参加させてくださった皆さんと、ここで時間を共有してくださったB班のお父さんとお母

さんと皆さんに感謝したいです。今回の経験を家に、大学に、サークルに持つて帰つて伝え「ライラでの3泊4日が私の視野を広げ、私を大きくしてくれた」と断言できる自信が、私にはあります！

## ●朴 志熙

### 「RYLAセミナーを終えて」

まず、一番目に言いたいことはRYLAセミナーに参加できて本当によかったですということです。RYLAというすばらしい体験をすることができて本当にうれしいです。今回のチャンスを与えてくださったロータリアンのみなさんに感謝します。ありがとうございます。

RYLAのセミナーに参加するということは私にとっては大冒険でした。人見知りのひどい私は初対面ということだけで緊張してしまうのでみんなと上手にコミュニケーションできるかどうか不安でした。しかも、体調もとても悪くな

っていたので実は出発する当日の朝まで参加するのをやめようと何度も思いました。体調のことでみんなに心配もかけたし迷惑もかけてしまいましたが、参加してよかったです。

高山先生から生々しいカンボジアの現状を知り、改めて自分は幸せだと気づき、考えさせられました。石井先生や今井先生の講義からも得られるものが多く、できればもっと聞きたいと思いました。ありがとうございます。

今回最もよかったですのは同世代の日本人達の考え方や話しが聞けたことです。そして仲よくなれてとてもうれしく思っています。

RYLAのセミナーで得られたもの、気づかされたことを忘れずに生きたいと思います。仲よくなった人々ともこれからずっと連絡を取り続けていきたいと思います。

みなさん、おつかれさまでした。そして本当にありがとうございました。



## C班



◆カウンセラー 大森 英夫  
「ライラセミナーの思い」

平成15年から余島に来させて頂いて、今回で8回目のセミナー参加になりました。初めは肩に力が入っていて皆様を随分困らせました。

カウンセラーは第30回とで2回させて頂いたことになります。中々受講生の個性や考え方の特徴をつかむ事ができず、とても良いカウンセラーは出来ませんでした。医師は福祉関係の仕事に携わる事が少ないので受講生の方々のお話は大変勉強になりました。相手に対して見せかけでない本当の親切とは何か難しい問題です。毎年確認出来るのは、まだ経験は未熟でも人格のバランスの良い若者が多くいるという事でした。願わくば彼等が spoilt 被されたり、くじけてつぶされたりしないように応援団の一員であり続けたいものです。事情により暫く余島に参られませんが陰でエールを送ります。

3泊4日を共にした将来のリーダー達の冷静で節度ある態度に乾杯です。信頼関係を築く努力を忘れずに。

◆班カウンセラー 森田 康子

次の世代を担う若人と、「つなぐ」をテーマにここ余島に集いました。

この4日間、自然豊かな余島で、グループ活動することで、自由豁達な雰囲気の中、自分の言葉で自分の意見をしっかりと述べ、指導力を実践する貴重な機会が与えられ非日常的な体験と多くの思い出が出来ました。高山さんの講演では人間の本当の幸せとは何かと考えさせられましたし「心の風船」で、他人を思いやる優しい心を持つことが必要だと思いました。人ととのつながり。夭折した坂本龍馬に私淑していた人々のつながりは日本の国を大きく動かしました。人との縁を大切にする事のすばらしさを教えてくれます。そして、すべての人を包み込む、あたたかい社会をみんなで作ろうではありませんか。今こそ生命を「愛でる」視点が大切だと思います。このライラセミナーは、その種まきです。

人生に成功するコツはありません。自分が好きなことに挑戦し、努力するだけです。天職、適職は人生を振り返って初めて判ることです。大切なことは回りの価値観に合せるのではなく、自分らしく生きることです。

私のカウンセラーとしての務めは充分には出来ませんでしたが、大森カウンセラー、そしてみんなに助けていただきまして、12名全員が事故も無く無事にライラセミナーが終了できましたことは感謝に堪えません。

今井先生はじめ、委員の方々ありがとうございました。

## ● 大久保 雅司

自分を変えるということを目標に参加したRYLAセミナー。私は、集団生活というものを得意だと思っていた。しかし、大学入学を期に自分は得意なのではなく集団生活から逃げているのだとわかった。集団では発言をせず聞くばかりで自分の考え・意見を持っていなかったのである。そんな自分を変えたい、と今回のRYLAセミナーに参加したのだ。

RYLAセミナーが始まり、同じ班の仲間とのレクリエーション、キャンプファイヤー、バズセッション、夜中まで続いた夢語り合い、どの時間もとても勉強になり貴重な時間にもなった。高山さんの話の中に、「カンボジア人は井戸があれば使う、しかし壊れたら使わない。何度新しい井戸を作っても同じ。だから井戸を直すことを教えた。」とあった。私はその事が非常に印象に残っている。直すという新たな事を教えるという発想が私には思いつきそうにならないからだ。また、地雷処理に関するても、村人達が中心となるように手助けをする。カンボジア人の立場に立つことができるから、このような事が思いつくのだと感じた。今回のテーマである「つなぐ」まさにこのことだとわかった。

3泊4日は長いようで短い。それは、一日一日無駄なく過ごしてきたからではないのだろうか。私は今回のRYLAセミナーで胸を張って成長できたと言える。それくらいすばらしい仲間達がいたからだ。私の所属しているC班の仲間がいたからこそ短期間で成長できたのだろう。一人一人がしっかりした考え方を持ちながらも他

人の意見も聞き、自分も発言する。そして笑顔。そんなC班だからこそである。C班最高です。ありがとうございます。

## ● 綾 政彦

3月25日、天候はあいにくの雨でした。「RYLA」が何をするのかもよく分からぬまま、正直不安もありました。その後、オリエンテーション、オープニングパーティと進んでいくに従ってその不安はいつの間にかななくなっていました。2日目、高山良二先生の講義の後、レクリエーションをすることになっていました。このあたりから「C班」としての団結は強まり、楽しく計画することが出来ました。3日目、石井一也先生の講義の後、思索の時間、バズセッションを行うこととなったのですが、仲間達と意見を出し合い、交換しあい、練りあげた1つの作品を後のフォーラムで発表しあう。今回参加させていただいた中で一番印象に残るものとなりました。最後になりましたが、受講生の世話をして頂いた方々にお礼をいうと共に、偶然の決定で集まったC班の仲間でしたが、本当にかけがえのない最高の仲間と出会えたことに感謝し、感想とさせて頂きます。

## ● 九富 翔

### 「RYLAセミナー」

RYLAセミナーに参加して自分自身を見つめ直すきっかけを頂きました。また、私の想いや考え、同じグループの仲間の想いや考えを熱く話し合う、とてもいい経験をさせて頂きました。

このセミナーのテーマは「つなぐ」そしてバズセッションのテーマは「私たちと社会」一時間あった一人で考える思索の時間は自分と久しぶりに向き合えたと思います。自分のことをもっと知らなければいけないと思ったと同時に、カンボジアで地雷除去活動を行っている高山先生の話を聞いて、世界の状況を知らなさすぎる自分に少し腹立たしさもありました。



今回、このような機会をロータリアンの皆様から頂くことが出来、多くのことに気づかされました。大切な仲間との出会いも大切にていきたいと思います。ありがとうございました。

## ● 越智 伊豆美

### 「RYLAセミナーに参加して」

私は今回初めてロータリークラブ主催のセミナーに参加しました。ロータリークラブがどういうものかも分からぬままいきなり参加したので不安や心配もありましたが、グループで活動していくうちに打ち解けることができ、友達が増え、すぐに仲よくなれて楽しくなりました。まだまだたくさんの参加者がいて全員と仲よくなることができなかつたけど同じグループの人たちは、たくさん遊んで一緒にご飯を食べたり語り合ったり、貴重な時間を過ごすことができました。中でも、バズセッションの時間にフォーラムテーマ「私たちと社会」について真剣に話し合いをした時にみんなの思い考えを聞いて、また自分自身の考えも話し、様々なことを考えることができたと思います。そして、なにより新しい仲間に出会えたことが一番嬉しかったです。いろんな人と出会い交流をすることは、楽しいことだと思います。また、余島という自然たっぷりのこの島に来ることができて、自然との触れあいの中で3泊4日を過ごせて思い出深いセミナーになりました。「つながり」というテーマで行ったこのセミナーに、ここで出会った人たちとのつながりを大切に、また未来に

つながっていきたいと思いました。初めは長いと感じていた4日間が、本当にあっという間で、また来年も参加したいと思いました。小豆島にも遊びに行きたいです。最後に、C班のみんな、セミナーの参加者みんな、ロータリークラブの人たち、このような素敵なキャンプを作ってくれてありがとうございました。みんなに会えた感謝の気持ちでいっぱいです。セミナーが終わった後も、どこかでお会いしましょう。4日間、本当にお世話になりました。

## ● 福井 あおい

### 「ライラセミナーに参加して」

私は、高知県より、ロータリアンの方の推薦を受け、参加することとなりました。

期待や楽しみというより、少し不安な気持ちで余島にきました。年齢、土地、職種、異なる境遇の方たちとグループを組み、3泊4日を過ごすというのは、普段の生活からはかけ離れた環境になるからです。今思うことですが、「一人」というのがさびしかったんだと思います。

グループが決まり、緊張もしていましたが、そんな不安も自然となくなることができました。今回のテーマでもある「つながり」が自然にC班のメンバーの中であったからだと思います。フォーラムのテーマであった「私たちと社会」でディスカッションした、コミュニケーション、集団生活、協調性、思いやりの気持ち、関心を持つということ。私たちメンバーの中では初めから自然に、この人工的に与えられたセミナーの「社会」の中でつながりを持つよう歩めていたのだと思います。

講義やロータリアンの方たちからは、私の知らない広い社会を学び、とても良い経験をさせていただきました。

3泊4日間での出会いや学んだことは私の貴重な財産になると思います。

## ● 上野 謙

今回RYLAに参加させていただいて、日頃経験できないことばかりでした。そして、全く知らない人と4日間寝食を共にし、かけがえのないつながりができたと思います。しかし、余島に到着するまでは、全く知らない人と仲よくできるか不安でした。でも、キャビンタイム、レクリエーション、バズセッションなど、班全体一丸となって行っていく上につれ、みなが心をひらいていき、最後は非常に仲良くなりました。特にバズセッションでは、みなが同じ目標にむかい、話し合い、試行錯誤し、フォーラムで発表し成功できたことは、非常にいい思い出です。また、キャンプファイヤーでは、自分の願いを松ぼっくりにこめ、火に投下し、その火を見つめることは、特別に感じました。日常生活で、そのようなことをしませんし、我に返り自分を見つめ直すこともしないので、私にとって、貴重な体験ができました。また、これから社会に出て、たまには自分を見つめ直すことが必要だと感じました。また、3日間の講義は、とても勉強になりました。特に2日目のカンボジアでの地雷処理のお話は、心うたれました。常に危険を伴いながらもカンボジアの村人のため、平和のために地雷処理をし続け、また日本語教室、物やゴミに対しての意識改革など、あらゆることに力をいれておられ、見返りを求める、こういう仕事こそボランティアと感じました。

最後になりましたが、お世話してくださったカウンセラー、ロータリアンの皆様、YMCAの皆様、この様な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

そしてC班のみんな、この班で本当に良かったです。ありがとう。

## ● 佐藤 聖也

「聞こえない」ということで悩んでいる私と同じ難聴をもっている人達がいる。私は言語聴覚士になって、自分の体験を生かしながら障がいをもっている人が社会と関わっていく楽しさ

を伝えたいというのが目標である。しかし、私自身ひっかかっているところがあり、何かヒントを得られればと思いセミナーに参加したいと思った。この3泊4日で私の見方は180度、変わったことが二つある。

一つは障がいについてだ。私自身、聞こえないということに対して不安をもっていた。聞こえなかったらどうしよう。相手の言うことがわからなかったらどうしようと1日目のキャビンタイムで悩んでいた。聞こえないでこうして欲しいと伝えた時に、何故そんな面倒くさいことをしなくてはならないのだと言われた経験を今でもひきずっているからだ。しかし、初めて会う仲間達は違った。聞こえないということに対して、否定的にとらえず、どうしたら良いのかということに真剣に向き合ってくれた。私はそれだけでも嬉しかったし伝えたい、しゃべりたいという気持ちが燃え上がった。聞こえないものは聞こえない。聞こえないというコンプレックスだけで壁をつくる必要はないんだと改めて再認識できた。結局、怖がっていては何も始まらないのだ。障害のあるなしに関わらずコンプレックスは全ての人間がもっているのだ。そのスタートをきる「勇気」を与えてくれたのがC班に集まった仲間であった。本当に四日間ありがとうございました。

もう一つが社会に対してである。昔、私は社会を敵だと考えたことがある。しかし講義やバズセッションを通して、社会は私が生まれた時からつながっていて人間が支え合ってできているものだという見方に変えることができた。それを敵だということに考えることはできない。今日、問題になっている障害者差別に対して社会を敵だとするのではなく、ガンディーのように信じる心を持ち、人間の心を変えていくにはどうすれば良いのか考えなければならないと思う。本当に経済が過剰に発展してしまったことで人は機械的になって他人とのつながりが薄れている。私にとって障害と社会の問題は切り離

せないものである。RYLAセミナーで感じたことを生かして障害者と社会の架け橋になれるようこれから頑張っていきたい。

## ● 中野 翔

3泊4日という短い期間でしたが、オリーブの楽園“小豆島”的目の前に位置する“余島”で、最高の仲間と共に過ごしたこの経験は、一生の思い出になると確信しています。普段の生活環境とは全く違う、青い海と豊かな緑の中で、充実した講義、キャビンタイム、バズセッション、フォーラム、そして、レクリエーションを行い、多くのことを学びました。また、カウンセラーの方と同じキャビンで寝食を共にできたことも有益でした。

このセミナーを通しての一番の思い出は、今回のメインイベントだと言えるバズセッションと、フォーラムです。まず始めに、各個人が瞑想の時間として1時間一人で議題について考え、次に小グループを作り、意見をぶつけ合い、最後に班全員で1つの考えにまとめるというものです。なかなか全員の意見を1つにするというのは難しいですが、数時間かけて意見をぶつけあい、完成させた時は本当に達成感がありました。また、様々な職業の方の意見を聞くことができたのも貴重な経験だったと思います。

最後になりましたが、すばらしい仲間と共有したこの時間と空間が決して無駄にならないように、今後の生活の中で生かしていきたいです。

## ● 大古殿 幸憲

### 「RYLAで学んだこと」

会社で過去にRYLAセミナーを受講された先輩達から「心の底から楽しかったよ。」と聞き、漠然とした期待感を持ち参加させて頂いたが、今振り返ると本当に一つ一つ、中身が濃い、満足感を感じた3泊4日であった。

まず感じた事は、グループや多くの受講生、ロータリアンの“楽しくまとまる”といった姿

勢の温かさであった。人それぞれの違いはあれど、“何か一緒にやろう”という気持ちを皆持つことの力の大きさを改めて感じ、学んだ。その中で、リーダーというポジションの大切さと皆の責任感を持つことの大切さも学んだ。

余島という大自然で、自身を見つめ直すことが出来る素晴らしい環境、様々な職種で、それぞれの知識という武器を持っている皆の話を聞いていると、皆それぞれの人間性・職業に関心を持てた。それと同時に自分自身と自分野仕事がより好きになれた。皆とのつながりで自分の考え方や視野が広くなり、成長できたと感じる。

今回参加させて頂いたこの楽しさと、ロータリアンの方々、皆、世界中にいる、つなぎを与えてくれる方々に感謝して、自分も愛を持って生き多くのつなぎを与えられる人になります。

## ● 細川 美和

### 「世界の中の私の位置～研修から感じたこと～」

この研修に参加して、世界の中の私の位置に気づきました。

普段は、自分の生活圏内の中でしか物事をとらえられず、自分の生活と他国の貧困の問題は別問題であると思っていました。しかし、私たちの生活水準が安定している背景には、貧困からぬけだせない人達の存在があります。物事はすべて、つながっていることに気づきました。

また「思考の時間」で、あたり前のようにつながっている受動的なつながりから、能動的なつながりをもっと創っていきたいと思いました。自分でつながるために、自分の思いを他者に伝え、話しあい、行動し、それらの活動を多くの人と一緒に行っていきたいです。この思いを、バズセッションで話したことで覚悟して活動を起こしたいと思っています。

私がこの研修を通じて「つながる」ことに対する意識の変化、世界の中の私の位置が自分の力で得た位置と、生まれてきてから与えられた位置があることに気づきました。

私がこれからするべきこととして、まずは自分の気づきを伝えること、そしてわからないことや、あたり前であることにもっと、疑問に思うこと、そしてその疑問に対する追求心、探求心を持っていくことだと思います。

そして、私が住むこのまちの中で、できることを仲間とともに増やし、世界中の人達とともに生きていける環境をつくっていきたいと思いました。

## ● 須田 尚子

### 「RYLAセミナーに参加して」

まず、私はこのRYLAセミナーに参加して、人とのつながりの大切さや重要性を学びました。3泊4日と長い期間のように思っていましたが、今思うととても短く感じどこか寂しく感じています。そう思えるのは、この4日間、とても濃い時間を過ごし、友情が芽生え、つながりが出来たからです。初日の不安は、とても大きく顔の表情も堅く、この先どうなるのだろうと感じていました。見知らぬ人達の中に一人でいる不安は、とても苦しいものでした。しかし、3泊4日を終えてみると、現在私の周りには信頼できる仲間がそばにいます。やはり、人は一人では寂しく、一人では思いきり笑うこともできないと思います。このセミナーに参加させて頂いて、人にとって、つながりがあることの大切さ、又つながりがあることによっての幸せを改めて感じました。この貴重な経験を忘れず、自身の心の中に大事にしまい、それだけではなく他者へも、学んだこと、感じたこと、大切なことを伝えていけたらと思います。私の中で人として少し成長し、考え方や相手を思う気持ちに変化がありました。RYLAセミナーに参加させて頂いて、本当に貴重な経験をし信頼し合える仲間ができ幸せに思います。ここで出会った仲間とこれからも支え合い、友情が続くように願っています。

## ● 西岡 まや

### 「RYLAセミナーに参加して」

初めはどんなことをするのかもよく分からず、期待と不安な気持ちを持っていました。

実際にプログラムが始まり、講義ではいつも私たちが生活している社会とは違った社会について知ることができ、そこから様々なことについて考える機会にもなりました。

私は大学生なので、学生以外の立場の人たちと一緒にになって話し合ったりする機会はほとんどありません。今回のセミナーでは、社会の方が多く参加されていて、学生の目線とは違った考えや意見を聞くことで、自分の視点がとても広がりました。

今回私は、バズセッションの後の発表をしました。発表者を決める際に、あまり経験がない学生にということになったのですが、私は人前で話すことがあまり得意ではないので、少し嫌に思っていました。しかし、発表者は一番の思い出を持って帰ることができると言われ、せっかくの機会なので頑張ってみようという気持ちになりました。班の人たちのサポートを受けながら実際に発表をし、とても緊張しましたが、終わってみると本当に良い思い出になったと思います。

今回のセミナーでは、様々な人とのつながりを持つことができ、私にとってとても素晴らしい経験になりました。これからも人とのつながりを大切に、このセミナーの中で考えてきたことや、感じたことを活かして過ごしていきたいです。



## D班



## ◆カウンセラー 井本 学明

## 「第32回 RYLAセミナーに参加して」

今年も再び余島に帰ってきた。迎えの船に乗る時から新しい顔に出会う期待感と不安が入り混じるのは不思議である。

今年の担当は、男性7名、女性5名。グループ分けで顔を見れば全員好青年の印象。キャビンに移動し、自己紹介が始まても、真面目さは変わらない。服装も現代風の自己主張があり、仕事も技術者、専門職、学生、教師とさまざまである。オープニングパーティーより徐々に心が開かれ、仲間意識が表れた。そしてキャビンタイムで人生について語りはじめると自身の環境から次々と将来の夢、希望など現実を見つめた上でハッキリと発表できた。これが2晩続き、明け方まで語り合うので体力勝負は例年の快感である。

レクレーションは全員でエンジェルロードを歩き、海岸線の岩場はお互いに助け合いながらの笑顔、笑顔。そして次に長縄飛びでも10人飛びが出るまで全員でがんばった。長時間かかったがチームワークが出きあがったようであった。

そして今年のフォーラムのテーマの発表。『私たちと社会』大きなテーマであった。発表までカウンセラーは入らず、受講生にすべてを任せた。待つことの辛さを知った。他の班は発表準備ができ、食事に来るが我が班はフォーラムにギリギリ間に合った。

立派な発表に一安心。それぞれが達成感を感じたことは顔を見ればわかった。笑顔が変わった。他人への思いやりも変わった。

最後の夜は、心地良い疲れで明け方まで親睦を図った。

今年も多くの若い人達と繋がり、両地区のロータリアンとも知り合えた。

次の余島を期待しつつ、桟橋を離れたい。大きな宝をありがとう。

## ◆カウンセラー 萩田 智子

## 「RYLAセミナーに参加して」

どの時間帯においても初めてのカウンセラーとして参加させてもらった私にとって、全て新鮮で感銘深いものとなった。

毎回書きとめておいた心に残るご挨拶や講義内容等においては、持ち帰り、静かに向き合つ

てみたいと思っている。そこで、今回私に与えられたカウンセラーとしての役目についての反省や思いを感想文とさせていただきたい。

まず、青少年のリーダーとして、青少年を指導する立場にある人達を養成するプログラム遂行については、最終日の朝、今井先生よりご指導を受けた、目標がどこにあるかをしっかりとつことが重要であった。受講生を更に高い精神的境地へ導くことをねらいとしその為に受講生のために一流の先生を呼んでいただきハイレベルな講義を消化することが目標であるならば、カウンセラーとして、このプログラムを事前に充分把握し、講義に集中できる精神力と体力を確保することがカウンセラーとしての指命であった。「和」が先行し、本分遂行に充分な支援が出来なかつたことを心より反省している。

また3泊4日寝食を共にし、相談相手となり、心を開いて話し合うシステムにおいては、夜を徹して語り合い、心を開いて涙し、涙して聞いた受講生との関わり、議論が尽くせず部屋に帰るやいなや立ったまま議論の続きを二時間余りも闘わし、気が付けば夜明けだったこと。絶対信頼の中で部屋に鍵をかけないロッジに受講生やカウンセラーもまた、心に鍵をかけない心開いた4日間であった。誰かの記憶に残ること、それが「生きる」ということであるとすれば、この大きなテーマに、D班はしっかりと向きあえたと確信している。

寝不足の受講生が、いつも全員お父さん、お母さんと慕ってくれ毎回揃って共に行動した4日間は、かけがえのない宝物となった。

## ● 山田 達也

### 「RYLA」

来てよかったです。出会い、講義、それについてのディスカッション、寝食をともにし酒を飲み交わす。新鮮で刺激的な4日間だった。

初日は、不安だらけだったのにRYLAに来て気付くと笑って、真剣に話しに耳をかたむけ

ている自分がいた。自信、とにかく自信を身に付けたいと思いRYLAセミナーに来るまで考えていたが、皆と会話し思いを話していく内に伝わらなくても伝わるまで話せばいいさ、という気持ちになり、それを確かめたくてもっといたい、もっと話したいと感じた。

今回のテーマ「つなぐ」、わからない部分もあったが今は自然とつながりを感じ、その先もずっとつながりを感じられるようになった。本当に来てよかった。

## ● 間嶋 章裕

研修に参加出来た事を心から嬉しく思う。まずは、人の出会い、普段の生活では出会えない人の出会い、お互いに一つのテーマを本気で語り合い、共に時間を過ごすという普段体験する事のない経験をさせて頂いた事が今度の自分の人生に何か役立つと感じる事が出来ました。講師の先生方の、今の世の中の歴史、現状を知り、難しい所もあったが、勉強になりました。今回参加させて頂いたこの研修を沢山の人々に伝え、推薦して下さった、ロータリーの方々に感謝します。本当に楽しい時間を過ごす事が出来、沢山の仲間との出会いがあり、機会があればまた今回の参加メンバーと集まり、本気で語り合い、本気で飲み合いたいです。

## ● 渡辺 多喜

RYLAセミナーが無事終了しました。このセミナーのお話を頂いたときは、ロータリークラブが何なのか、ライラセミナーが何なのか全く知りませんでした。ですから、余島に向かう道中も不安だらけで緊張していました。

しかし、一泊、二泊とするうちに、そんな不安は吹き飛びました。同じ班のメンバーと、夜明けまで話して、お互いを理解して……外見からは分からないような想いや悩みを聞きました。初対面の人にだからこそ話せることもあって、自分はとてもすっきりしました。

3日目のバズセッション及びフォーラム、計7時間もあったのですが、本当にあつという間でした。一人一人の声を全部聞き出して、まとめよう、分かり合おうとしたのは、私たちの班の魅力だったように思います。時間に追われたけれど、模造紙を書く人、発表練習をする人、ご飯の準備をする人、役割分担が自然にできて発表に間に合わせることができました。達成感と感動を味わいました。全体でのディスカッションでは、たくさんの人の意見が聞けて参考になりました。ディスカッションの場が普段は無いので刺激を受けました。今度は、私が刺激を与えられるようになりたいです。

### ● 金岡 友美子

今回ライラセミナーを通じて、人とのつながりを感じることができました。グループの方、お父さん、お母さん、お世話を下さる方、そしてたくさんのロータリアンの方のおかげで、本当にすばらしい仲間に出会えました。

今回のテーマは「つなぐ」ですが、私には漠然としていて実感がありませんでした。しかし、グループでのディスカッション、フォーラムを通じて、言葉では表せない何かを掴めました。口では理想的なことをいくらでも言えますが、そうではない心が感じた暖かい「つなぐ」というものを手に入れられました。

最後になりますが、今回このライラに私を推薦して下さったロータリアンの方、ここでお世話を下さったロータリアン並びに施設の方々、本当にありがとうございました。この方々のおかげで、私はずっとつながっていたい仲間と出会えました。この仲間と、これからも良い関係をつないでいきたいと思います。そしてこのような経験を少しでも多くの方に知ってもらいたい、つながりというものの尊さを感じていただきたいと思います。

### ● 吉原 弥里



私が今回ライラに参加することになった理由は大変消極的なものだった。父の所属する坂出東ロータリークラブからの参加者がいないので、参加してくれないかと父が私に言ってきたのだ。私は今ちょうど春休み中で、特にこれといった用事もなかったので「いいよ」と軽い気持ちで首を縦に振った。しかし、このような完全に受け身ではじまった私のライラ参加は、3泊4日を過ごした今では私の人生の中でかなり特別な経験となった。

今回のライラセミナーのテーマは「つなぐ」だったのだが、4日前には全くピンとこなかったこの言葉が、今の私にとっては人生における重要なキーワードとなった。私は最初グループのメンバーとの距離のとり方が分からなかつた。同級生でも同職者でもない年齢も趣味も違う人間が3泊4日という長いようで短い時間を共に過ごす。4日後にはそれぞれがそれぞれの生活に戻り、勉学、仕事に励む私たちが「友」というつながりを形成できるのか、また形成することに意味はあるのかと考えていた。

しかし実際に3泊4日を通して、自分のこと、仕事のこと、学校のこと、故郷のことなどを話すうちに何の意識もせずともグループのみんなが私の「友」になっていた。私のこの4日間は本当に有意義なものとなった。

最後にこのライラセミナーに携わってくださった全ての方に心からお礼を言いたいと思います。どうもありがとうございました。

## ● 小林 弘樹

### 「ライラセミナー」

このセミナーで一番の収穫は、同世代の人たちの考えが聞けたことです。

一つの議題について、みんなで考え、それぞれの意見を出し合い、その考えを共有する。育った地域や環境、今取り組んでいることが異なる集団であるため、色んな角度からの考え方を知ることができました。

そして、その活動を通して、自分を見つめ直し、新たな自分と出会い、それを少しではあります、受け入れることができた様に思えます。

ただ、そんな自分を、周りにさらけ出すことができなかった気もします。どうしても、周囲にいい格好をしようと、ありもままの自分を出せなかっただけに思えます。

しかし、こんな私でも、同じ班やちがう班の仲間が、受け入れてくれたことをうれしく思います。特に同じ班の仲間には、助けてもらい、教えてもらい、本当にお世話になりました。

冒頭で、同世代の人の考えを聞けたことが、一番の収穫と書きましたが、一番心に残っていることは、仲間とこの4日間を過ごせたことの幸福感です。

そんな出会いを支えてくださったカウンセラーのお父さん、お母さん。ロータリアン・ガバナー・ディーン・先生方、本当にありがとうございます。

そして、このセミナーでつながることができた皆さん、これからもよろしくお願ひします。

## ● 倉本 始学

高い目的意識を持ち、活力ある受講生、豊かな知識と経験で支えて下さるカウンセラーやロータリアンの方々と寝食を共にした4日間は、私にとって、非常に価値のあるセミナーとなりました。特に、バズセッションを始めとする討論では、自分の意見を主張し、周囲の多様な意見に耳を傾けるという、本音での語り合いの重

要さを再確認する事が出来ました。また、3回に渡って聞かれた講義は、そのどれもが深く考えさせられる内容でした。こうしたプログラムの中で、大いに啓蒙を受け、「自分は何が出来、どう進むべきなのか?」と改めて考え直す機会を多く得る事が出来ました。キャンプファイヤーで灯した火を胸に日々邁進して行こうと思います。素晴らしい出会いと、時間を与えてくれたRYLAセミナーに感謝します。

## ● 森脇 裕

4日間楽しかったです。私自身ロータリークラブとは関係のない立場なのですが、たまたま仕事柄、時間が取れるということで招待頂きました。当初、少ない情報の中にも宗教色の強いセミナーなのかと少し危惧していた所もあったのですが、神仏習合の日本でオーガナイズされていることもあるのでしょうか、非常に道徳的で、何の違和感を持つことなく参加出来た事が大きな喜びとなりました。他の班員とは年令が離れていたため、いささか距離を置き、傍観する様なスタンスでいたこともあるのですが、若い人達の元気さやパワーによって、自身の心も20代に戻る思いで普段の生活では味わうことの出来ない貴重な経験に感謝の思いでいっぱいです。普段の生活の中においても、多々オーガナイズする事象が多いため、この経験を今後に活かせればと思います。

## ● 衣川 卓志

### 「ライラセミナー」

このセミナーでは普段の自分ではない、新しい自分というのを発見できました。このセミナーに来る人にはさまざまな職種の人がいて、話ををしてみると今まで考えたことのないこの世界の現状や考えを聞くことができたからです。キャビンタイムやフォーラムで深い話が出て、いつも何も考えてなく、適当にすごしている自分でも、何か熱い物が心にあって、それを

もっともっと話しをしていくことができるんだなと思いました。私たちで社会ということを議論した結果、つながりやコミュニケーションとかいろいろな単語が出てきたのですが、このセミナーを振り返ってみるとこの四日間しかないセミナーでしたが、普段以上に考え、それを議論し、自分の中の特別な社会ができたので、この経験をいかしていきたいです。

## ● 村田 洋平

この研修に参加させていただき、一番の経験になったのはテーマ通り「つなぐ」ということでした。立場や生きてきた環境の違う方たちと語り合うことはとても新鮮でした。このような考え方、意見もあるのだなと気づくことがあり、人と接しつながり合うことで一人ではできないこともできるようになる可能性を感じました。また、普段深いテーマをディスカッションすることなどはほとんどなく、皆いろいろ考え、しっかりとした意見を持っていることがわかりました。ほんやりとたまに考えることでも言葉にして話し合うことでより問題が明確になり意識をしていこうと感じています。思索の時間ではずっと一緒にいた仲間と離れ一人になることでのつながり、帰れる場所がある幸せを感じました。この3泊4日すべての時間がそうでしたが、自分を見つめ直す良い期間でした。明日からはこの経験を意識し、前に向かい生きていきます。ありがとうございました。

## ● 小松 いづみ

初めてのライラセミナーへの参加ということで不安と期待が半分ずつの状態で余島へと向かいました。フェリーで他の受講生の方々と一緒に乗ることになり、緊張もほぐれていきました。

班分けが発表され、初対面の方々ばかりでしたが皆さん気さくで優しくて、不安だった気持ちもいつの間にかどこかへ行ってしまっていました。一番この班で良かったと感じたのは二日

目のレクリエーションのときです。個人で楽しむのではなく、班の全員が楽しめるように皆で盛り上げているのを見て、とても嬉しく感じました。このことがあって班で話し合いをするときも気まずくなく自分の意見を素直に表現することに対して変に緊張しませんでした。徐々に皆との距離が近付いてきたみたいで班の皆と会話するのがすごく楽しくてとても大切に思いました。

議論を交わせる相手というのは、人生においてもそこまで多くはないと思います。このライラセミナーで私は貴重な仲間を得ることができて四日間という短い時間でとても充実した時間が過ごせました。これからもここで学んだ様々なことを活かして信じ合える仲間とともに悩みながら少しづつ人生を歩んでいきたいです。

## ● 塚本 優香子

私は、常日頃から、「自己を向上させたい」「人として成長したい」という思いがあり、神戸ロータリークラブの方からお話を聞いた時、ぜひ参加したいと思いました。とても楽しみにしていたセミナーでしたが、実際に参加してみると、予想以上に充実した4日間でした。

主な理由として2項目が挙げられますが、一つ目は講義です。総合政策学部に所属し、主に「国際発展のための問題解決」について学んでいる私にとって、今回の講演で扱われたテーマはとても興味深いものでした。高山先生自らが実際に現地へ行って働いておられる「住民参加型地雷処理活動」、石井先生にお話を頂いた「経済発展は平和を脅かす」というガンディーの思想に感銘を受けました。私は恵まれた日本という国に生まれ、技術の発達を喜び、必要以上のお金を必要以上の物に費やしています。私を含め、恵まれた立場にある人が、少しでもその財産や時間を捧げれば、金属探知器や井戸が一つでも多く作られ、仕事がなくて生きるのに不自由している一人の命が救えるかもしれない、と

思いました。普段の生活や学校の授業では学ぶことがなかった点について考えることが出来ました。

二つ目の理由は、バズセッション、フォーラムです。このように本音で意見を言い合う機会は多くなく、その上年齢が上で立場が違う人々のお話を聞くことはとても興味深かったです。その上で意見をまとめて発表することは、自分の考えを整理する機会にもなりました。その後のフォーラムで発言することは出来ませんでしたが、自分より何年も、何十年も経験を積んでおられる先輩やロータリアンの方々から、深いテーマに関しての考え方をお聞きし、自分の考えが深まり、視野が広がりました。

4日間という短い期間ではありましたが、得たものはとても多かったです。神戸に帰るとま



た元の生活に戻りますが、今回得た意識や学んだことを忘れずに生活して行きたいです。今井先生が講演を通しておっしゃっていましたが、世界は変わり続けています。多文化が共生する世界の中で、より良い「社会」、「世界」を形成するために私個人は何が出来るのかを考えて行きたいです。





# 第32回RYLAセミナー運営委員会

ガバナー 中村 尚義（第2680地区 洲本RC）  
岡内 紀雄（第2670地区 高知西RC）

顧問 今井 鎮雄（第2680地区 PG 神戸西RC）  
深川 純一（第2680地区 PG 伊丹RC）  
三宅 洋三（第2670地区 PG 高松RC）

アドバイザー 橋本 一豊（第2680地区 PG 神戸須磨RC）  
飯 忠悟（第2670地区 PG 今治RC）

## ●新世代委員会（第2680地区）

委員長 安行 英文（三田RC）  
副委員長 常次 佳文（神崎RC）

## ●新世代委員会（第2670地区）

委員長 佐々木善教（松山RC）

## ● RYLA委員会

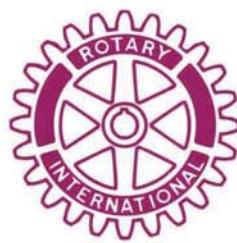
### （第2680地区）

委員長 徳梅 明彦（副ディーン）（あわじ中央RC）  
委員 秋山 紀史（神崎RC）  
 井本 学明（赤穂RC）  
 井奥 寛泰（姫路南RC）  
 加藤 拓（伊丹RC）  
 黒田 建一（西宮夙川RC）  
 三木 明（姫路RC）  
 大江与喜子（西宮恵比寿RC）  
 大森 英夫（伊丹RC）  
 滝澤 功治（神戸須磨RC）  
 安平 和彦（姫路RC）

### （第2670地区）

委員長 日野 博夫（ディーン）（高松RC）  
委員 篠原 成行（北條RC）  
 猪野恵一郎（松山南RC）  
 西松 繁夫（松山南RC）  
 三原 英人（松山RC）  
 森 廣一（美馬RC）  
 伊勢 英利（鴨島RC）  
 濱田 吉隆（高松グリーンRC）  
 太田 國博（小豆島RC）  
 別役 重具（高知東RC）  
 森田 康子（高知東RC）  
 工藤誠一郎（徳島プリンスRC）





国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所  
〒656-0025  
兵庫県洲本市本町5-4-25  
第二大富ビル203号室  
TEL 0799-23-2680 FAX 0799-23-2681

国際ロータリー第2670地区ガバナー事務所  
〒780-0870  
高知県高知市本町4-2-52  
住友生命ビル9階  
TEL 088-871-5177 FAX 088-871-5188